

大津市歴史博物館調査報告書 3

大津百艘船万留帳 2

令和五年（二〇二三年）三月 大津市歴史博物館

はしがき

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵・個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二二）度よりその成果報告書を順次発行する取り組みをはじめました。

この報告書では、前史料集に引き続き、江戸時代に琵琶湖水運の中心的役割を担った船持仲間「大津百艘船」によって記録されてきた「万留帳」のうち、寛政九年（一七九七）から寛政二十二年（一八〇〇）までの分をまとめました。これら留帳には、大津百艘船が対応した事案や物流の様子、大津代官や京都町奉行の要人との折衝、また寺社との贈答関係など、大津百艘船の活動が詳細に綴られています。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読・校正において大津古文書輪読会の皆様に多大なる御協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

令和五年三月

大津市歴史博物館

〔目次〕

はしがき

目次・凡例

一、「万留帳」寛政九年

二、「万留帳」寛政一〇年

三、「万留帳」寛政一一年

四、「万留帳」寛政一二年

| | |
|---|----|
| ・ | 1 |
| ・ | 2 |
| ・ | 4 |
| ・ | 25 |
| ・ | 62 |
| ・ | 92 |

〔凡例〕

一、本史料集は、大津市歴史博物館が所蔵する重要文化財「大津百艘船関係資料」のうち「万留帳」の寛政九年から同一二年の四冊分を翻刻したものである。

一、史料解説にあたっては、大津古文書輪読会の各氏の協力を得て、大津市歴史博物館の五十嵐正也、杉江進が原本照合を含めた校正をおこなった。また本書の編集は同館高橋大樹が担当した。

一、翻刻にあたっては、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により、追込み形式とした。また、平出や台頭、欠字については省略した。

一、翻刻した文字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、江、而、与、者、茂などはそのままとした。また、*ㇿ*（より）以外の合字は仮名に改めた。さらに、旧字体・異体字については、固有名詞を除き、常用漢字に改めた。

一、虫損・汚損・欠損等による判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「*□*」として表記した。

一、翻刻にあたり、適宜、読点を施した。また、傍注について右側に（*□*）で括弧して示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は（ママ）、（*□*）とした。さらに、墨消し（ミセケチ）の場合は、その文字に網掛けをほどこしてある。

一、原本上で図示されている図面については、トレース図を掲載した。トレース図は、大津市歴史博物館職員の大村紀子が作成した。

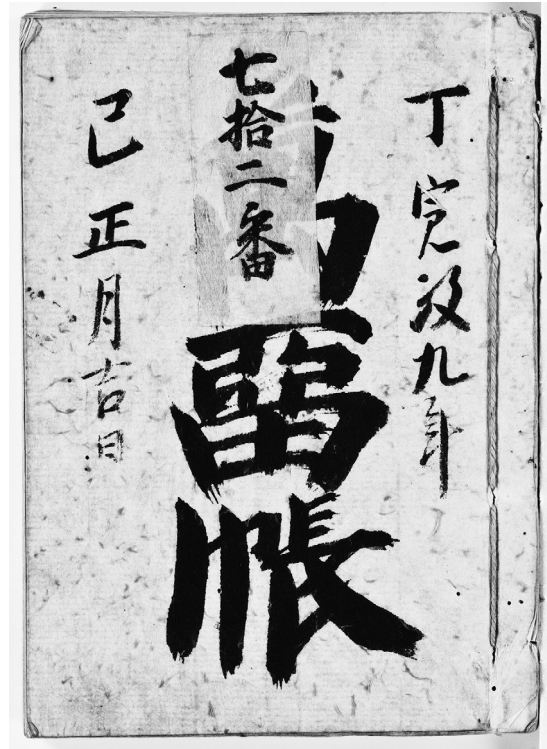
一、史料には、賤称・蔑称などの差別用語とされる言葉が使用されている場合があるが、当時の社会情勢を正しく認識するためそのまま表示したものであり、差別を容認するものではない。読者においてはその点をよく理解され利用されたい。

〔謝辞〕本史料集の編集・発行にあたり次の関係者より協力を得た。

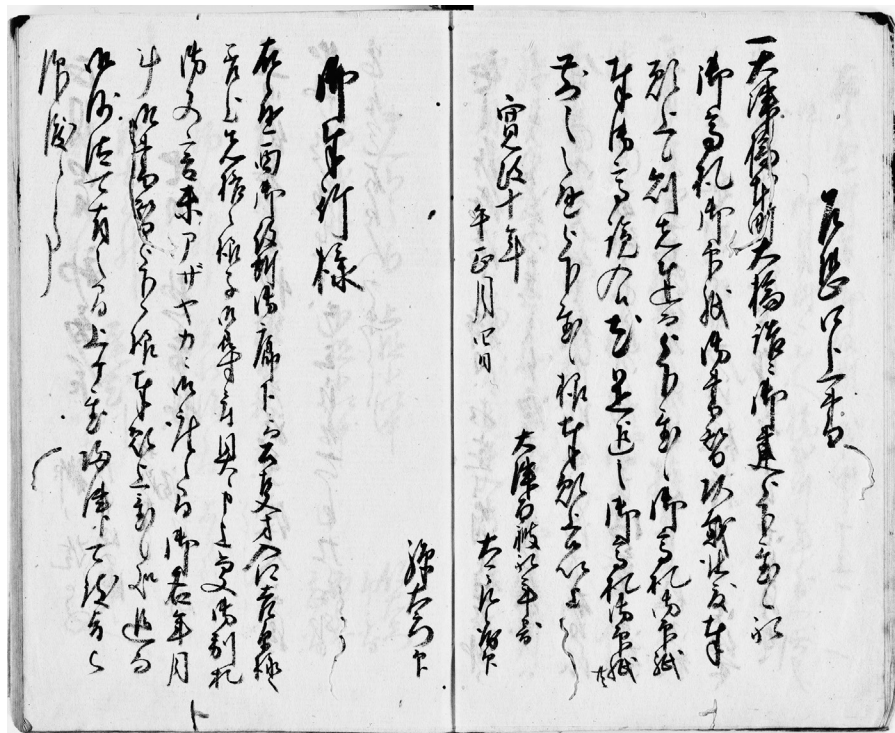
東幸代（滋賀県立大学人間文化学部教授）



「万留帳」寛政12年（表紙）



「万留帳」寛政9年（表紙）



「万留帳」寛政10年

一、「万留帳」寛政九年

(表紙)

丁 寛政九年

万留帳

(貼紙)

「七拾二番」

巳 正月吉日

(表紙見返し)

目録

(印:「百艘」)

- 一、小兵衛持荷問屋株中間へ買受木地忠預ヶ置、此度外方へ譲り候事、
- 一、海津孫七舟柳崎沖ニ而打こかし候事、
- 一、来迎寺三万日廻向ニ付津内艀持并貸舟屋へ廻状出シ候事、
- 一、尾花川艀方へ人乗せ印札遣シ置候処、少々紛失ニ付都合致遣ス事、
- 一、八幡舟木吉左衛門船当津ニ而積米之内紛失ニ付相届候事、
- 一、当御役所へ御用御会符提灯拝領相願叶候事、
- 一、山王御神事神輿船鬪取於中間致候事、
- 一、石原庄三郎様関東御下向之事、
- 一、坂本町ミの庄裏湖中ニ溺死人流来候事、
- 一、金蔵堀端ニ井形堀明ヶ候ニ付御蔵町年寄へ様子尋ニ遣シ候事、
- 一、湖上来船賃御定メ御証文等有之候哉御尋候事、

于時寛政九丁巳正月二日、御礼

石原庄三郎様 金貳百疋

石丸三平様

元々

七里官助様

〃

福永久治右衛門様

町役

内藤伍左衛門様

公事方

芝山泰蔵様

右金百疋宛

小かしら

佐久間正蔵様

赤井平六様

目付

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

船方下

北出雲平様

右ハ銀一両つゝ

惣年寄

小の又三郎殿

町代

堀猪三郎殿

銀一両つゝ

肝煎

吉本弥四郎殿

〃

山本清治郎殿

鳥目式百文つゝ

御足輕、小遣、式人 御蔵番三人

式百文つゝ 名札計

御門吟助殿五百文、内義式百文

白崎久太夫様 平蔵町年寄

名札計

御組内不残 御門内御手代衆

名札計

右之通、与次兵衛、市兵衛、とも新八

三日 京都御礼

東
菅沼下野守様

金子三百疋、
目録台
下ヶ札附

御用人

御取次

小林吉左衛門様

滋賀弥兵衛様

高橋官蔵様

同 弁蔵様

原田仙助様

椎名半蔵様

白木保兵衛様

右七軒へ銀壹両宛

西
三浦伊勢守様

金子三百疋、
目録台
下ヶ札附

栗原武左衛門様

御取次

富尾武兵衛様

曾我元三郎様

加藤直右衛門様

津兼安左衛門様

藤井文左衛門様

梶村立助様

右七軒へ銀壹両宛

東公事方

西尾新太郎様

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

加納小十郎様

上田弥右衛門様

右九軒へ金子百疋宛

東公事下

寺田官左衛門様

中尾彦兵衛様

末吉新五郎様

佐伯喜藤太様

栗山庄蔵様

森 義左衛門様

中川定右衛門様

同 李左衛門様

櫛橋平蔵様

右拾六軒へ銀壹両宛

上町代田内彦助殿

右八銀貳両

上町代中へ五百文

小番中へ三百文

東西中番中へ三百文つゝ

追分丸屋四郎兵衛百文

山科大津屋源右衛門百文

歩判三両三歩

西公事方

渡邊甚五左衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

西公事下

千賀与惣右衛門様

久下政右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八蔵様

酒井宗助様

菊池治左衛門様

柏原治部右衛門様

筆工奥田九右衛門殿

右八銀壹両

下町代中へ五百文

東西御門番へ三百文つゝ

宿鍵屋左助へ貳百文

同下女中へ貳百文

五百文 貳

銀貳両壹つ

三百文 六

同壹両三十一

貳百文 壹

披露札貳枚

百文 貳

下ヶ札貳枚

差出し貳枚

右之通太郎兵衛、孫右衛門相勤申候、供弥兵衛、荷持三右衛門

正月四日、初寄合

鰯やきもの
とうふのしる

七日、惣番積

十一日、例年之通帳かため祝儀、役人不残出勤、外二忠兵衛殿朝飯有之、

まんちう百 上小舟中 八兵衛
長兵衛

酒貳升 下小舟中 五兵衛
忠兵衛

諸白三升 尾花川舟方
鯛貳わ

諸白貳升 坂本新兵衛

当年者不幸有之故、関舟者参り不申、

右之通持参有之事、上下小船并ニ尾花川年礼相濟、於勝手ニ酒給させ申候、

肴組重計、平ノ具ニて吸物ニ致候事、

一、正月十五日、芦浦観音寺様御礼として、例年之通三本人扇子持参致候、

西川五郎右衛門殿、片岡喜左衛門^(殿脱カ)、久松六蔵殿、右三軒へ三本人扇

子持参候、今年者観音寺様御若年故御逢無之御断、例之通節計出申候、右孫右衛門、喜三郎、供平兵衛、上下共日和ニて仕合ニ御座候、

一、正月廿一日、例年之通貴布祢御神酒朝飯有之、役人不残出勤、外二忠兵衛殿呼申候事、

一、三月三日、御礼、青銅壹貫文

石原庄三郎様

石丸与次郎三平様

元々

七里官介様

町役

内藤五左衛門様

元々

福永久治右衛門様

地方公事方

芝山泰蔵様

右ハ五百文つゝ、

御屋敷内組やしき、不残手札

北出雲平殿

右之通与治兵衛、孫右衛門、とも新八

乍恐口上書

一、江州栗太郡下物村船屋惣助持船二米、俵物積入、当月五日当津へ着船仕、則肥し物代ニ差遣可申与存、金四両持参仕、尚又於当津菜種

代銀之内へ銀三百匁受取、船底ニ入置、津内浜々乗廻り仕、大橋堀
ニ而右金子入用ニ付取出し可申与存候所、右金四両、銀三百匁共紛
失仕候、自然於浜々ニ船繫置、用向弁シニ揚候留主中怪敷もの這入
取逃候哉と奉存候二付、乍恐此段御届奉申上候、已上、

江州粟太郡下物村

寛政九年

船屋惣介印

巳三月十一日

右之通相違無御座候二付、奥印仕奉差上候、

百艘年寄

巳三月十一日

与治兵衛印

大津

御役所

右之通船方渡辺弾治郎様へ申上、御目付三軒之内式軒ハ御他行二付、
高橋角左衛門様へ右之段申置候、

右惣介ハ下物半七の事也、即日酒式升持参礼ニ参申候、大新へ預ケ、

一、金屋市右衛門持問屋株、先達而当中間へ買請、船屋小兵衛持二いた
し預ケ置候処、右小兵衛死絶候故、親類内木地屋忠兵衛へ預ケ置候処、
此度中間相談之上、今嵐町井つゝや善五郎へ銀三百匁ニ譲り渡し申
候、勿論問屋中間之義ハ木地忠方何か世話いたされ、当中間ニ拘り
候義ハ無之候へとも、已来為念左之通書付遣し申候、

覚

一、此方中間持問屋株壹、其許各別ニ而是迄預ケ置候処、此度銀三百
匁請取相譲り候上ハ、右株ニ付聊申分無御座候、已上、

寛政九年

百艘印

巳三月十八日

木地屋忠兵衛殿

右之通認遣し申候、尤是迄永々世話いたされ候故、木地屋忠兵衛へ
為樽代金百疋礼ニ遣し申候、

一、三月十九日、海津孫七ふね^{チャリユ}空船ニ而加子式人乗出船いたし
候処、大雨風ニ出合、柳崎沖ニ而打こかし水ふねニ相成、難儀い
たし候二付、尾花川^カ為知ニ参り、爰許より加子とも大勢つかハ
し^(マ)され当着いたし申候、

三湊見舞ニ参られ候、尾花川とも中間孫右衛門相^(接)参、才川^(際)
方も五、六人出合世話いたされ候故、かいつ之もの共礼ニ参り申
候、宿万屋左衛門中間へ挨拶ニ参、

右二付、廿一日かいつ善右衛門、酒五升、するめ三把持参ニ而礼ニ
参られ候、右酒、さかなとも其節出合候西東加子、おしてともへ遣ス、
内一升、するめ二把、小船入上下加子おして共其節^(カ)参合候ものへ遣ス、
但下り、忠兵衛方後日遣ス、

三月廿日

一、鱒三本

沖嶋^カ到来、

内式本ハ孫右衛門へ売申候、

壹本ハ中間ニ而御つかい申候、

一、三月廿二日、長浜久治郎ふね、登りかけニ小松沖ニ而崎南風ニ出合
難舟いたし、乗人五人入水いたし候旨風聞有之候二付、彦根他屋へ
忠介見舞ニ参申候、酒三升持参いたし申候、

右礼ニ他家詰合被参候而、只今否飛脚参申ハ、早速比良船懸ケ付被呉、

依之、助り舟付乗人とも別条無御座候、此段御通達申上候、

一、三月廿六日、四月十日迄日数十五日之間、坂本来迎寺三万日廻向有之候二付、津内艀持中并貸船屋中江参詣之節、渡船之義二付廻状差出候写、左之通、

口演

一、坂本来迎寺万日廻向有之候二付、参詣之節銘々所持之艀船ヲ以渡海被致候義相成不申、其旨心得違無之様御承知可被成候、此廻状二請印被成早々順達可被成候、以上、

巳三月

百艘印

艀持中 名前略ス、

口演

一、坂本来迎寺万日廻向有之候二付、参詣之人艀ふね借り請ニ参り候は、其段百艘会所江御達し被成候上、御貸可被成候、右心得違無之様御承知可被成候、此廻状二請印被成御越可被成候、以上、

巳三月

百艘印

貸船屋中

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、五郎八、善兵衛、源六、

右廻状、三月廿四日廻り、嘉兵衛持参ニて相廻候事、

一、三月廿五日、平方、例年之通振舞、北国町い賀屋ニて有之候事、

一、前々、尾花川艀方江、中間、人乗せ印札三拾九枚相渡し置候処、年久敷義故焼失いたし候哉、当時式拾四枚有之、拾五枚不足いたし候二付、此度坂本来迎寺三万日廻向二付、右札都合いたし呉候様尾花

川、被相頼候、依之、中間相談いたし候所、手積之事故下地振合を以此度新調之拾五枚板遣し申候、尤焼印当時紛失いたし候故、是又此度取調申候事、

尤外二七枚尾花川年寄用ニ預り置、是ハくわん音寺町へかし遣し申候、

右札相用ひ候節ハ、万日又ハみたらし等之節也、山王神事ハ混雜故札紛失いたし候而ハ如何ニ候間、つかい不申候、

「尾花川

表

三拾九枚内」式寸「百艘」但焼印也

三寸

右札拾三枚ニ而宜由二付、式枚は中間残し置候也、

一、三月卅日、尾花川弥吉、長七、右札二鮒五枚持参いたされ候、届二遣ひ候、

一、四月一日、例年之通山王御神事御配符御渡し被成候、御文言略之、

同

山田浦始り

志通

矢橋

是ハ矢橋浦次より宜候間、近来矢橋浦へ相渡し候処、山田浦頼ニ被参、已来山田浦始り之事ニ候へハ、已来山田へ御渡し被下候様被相頼候二付、此段相心得可被申候、尚当年ハ山田浦方取ニ参候二付即二渡、松本浦志通 例年之通

今津浦始り

〃

七里官介様添状志通

外二当年別ニ御渡し被成候、矢橋浦方八幡舟木迄、

同坂本方北小松迄、右式通写、左之通、

山王御神事之節、神輿船江近年山門方雇水主有之、還御勵合之砌水主共不法之儀有之、相互二怪我人等致出来候由二付、去辰年申触候通、御神事之節神輿船往古より定来り候通、船忝組二加子式拾式人宛之外、寄進乘或者助水主等二被出度ものも有之候ハ、定加子式拾式人之内江加り候儀者格別、右之外忝人茂神輿船江乱乘候儀致間敷候、右之趣心得違無之様可致候、此廻状無置滞相廻し、留り所より可相返もの也、

大津

巳四月朔日 御役所

矢橋方八幡船木

坂本方北小松迄

右浦々庄や、船年寄

乍恐口上書

一、八幡船木吉左衛門持船二米、俵物積入、先月廿八日当津へ着船仕、外之積合船揚仕、夕方橋本町揚場所へ相廻置、翌朝船揚仕候所、白米五斗入忝俵、餅米四斗入忝俵、都合三俵紛失仕候二付、外之揚違等も無御座候哉与色々穿鑿仕候所、相違無御座候二付、若昨夕用向弁シニ揚り候儀も御座候二付、右留主中怪敷もの這入取逃候哉与奉存候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

八幡船木

寛政九年

船主吉左衛門

巳四月二日

代弥兵衛

右之通相違無御座候二付、奥印仕奉差上候、以上、

巳四月二日

百艘船年寄

与次兵衛

大津

御役所

右之通船方渡邊弾治郎様へ申上、御目附三軒へ右之段申上置候、孫右衛門相勤、

右之儀二付、翌三日町代部屋方呼二参り、年寄与次兵衛罷出候所、紛失物之儀者町方御役所へも相届ケ候様二被仰候二付、以来、左之通届ケ書致、町方御役所御届ケ可申上候事、尤已来船方、町方とも両方へ相届ケ可申事、

乍恐口上書

一、東江州八幡浜船木吉左衛門持船二米并俵物積入、先月廿八日当津へ着船仕、外積入之品船揚仕、夕方橋本町揚場所へ船相廻置、翌朝米船揚仕候所、右之内白米五斗入忝俵、餅米四斗入忝俵、都合三俵紛失仕候付、段々穿鑿仕候得共相知不申候、依之、昨日地方御役所へ其段船木船主吉左衛門代弥兵衛御届ケ奉申上候へ共、右弥兵衛船木へ直様引取候二付、此段私共御届ケ奉申上候、尤手後相成候段、御断奉申上候、以上、

百艘船年寄

巳四月三日

与次兵衛

大津

御役所

右之段、弥兵衛歸船仕候二付、此方御届ケ申上候事、

一、四月六日、白銀屋六助、いせや弥左衛門、升屋佐介、いせ屋甚兵衛被参、当年山王御神事二付、於膳所二是迄札受来り候処、当年ハ如何可致哉と相尋二被参候二付、札は受候二不及候へとも、御供料之義ハ心持次第可被致二付申達候処、左候ハ、持持之志も無御座候

間、諸共相止メ可申段一同被申候二付、其義ハ勝手^(マ)二次第二可被致候、札受不申御供料不差遣候而も故障ハ有之間敷旨申達置候、油屋作兵衛ハ後家之儀故、夜分挨拶二被參候、小舟入船宿平六伊勢參宮二仕故障無之、為挨拶として諸白^(マ)樽式升入持參被致候、

乍恐口上書

一、御用御会符、御提灯、是迄拝領仕度奉存候得とも、恐多差扣罷在候処、諸浦へ御用向御廻状等急々差送候節、川支又ハ夜二入候節杯、甚難儀仕候義も御座候間、何卒御慈悲を以右願通被下置候ハ、難有奉存候、且又山王御神事之節、百艘年寄共乗船仕候小船二至ル迄船印も無御座候間、於湖中御用之節難見分、自然御用向厥二而ハ恐多奉存候間、船印、御幟并高張御提灯頂戴仕度奉願上候、願之通御聞届被成下被下置候ハ、広太御慈愍難有可奉存候、已上、

寛政九年辰四月

百艘年寄

三郎兵衛印

大津

御役所

右之通元々七里官助様へ願上候処、諸浦へ御用之節用ひ候会符、提灯之義ハ御聞濟有候へとも、山王神事二付船印之義ハ是迄屋敷外へ差出し候例無之二付、此義ハ御取用無之候間、追而之義二可致段被仰聞、左之通書付差上候申候、

覚

一、御用提灯

壹張

一、御用会符

壹枚

右者諸浦々江御用御廻状等私共江御渡被成、夫々早束差送候^(速)処、川支又者夜二入候砌、急御用等之節共、甚差支難儀仕候儀御座候付、

此度右御用提灯、御用会符之儀奉願上候処、願之通御聞濟御渡被下難有奉請取候、然ル上者随分太切二仕、右御用之外自分之儀二付望相用不申、外々江貸渡等一切不仕、尤御用二事寄かさつケ間敷義仕間敷旨、精々被仰渡承知奉畏候、依之、御請印形差上申候、以上、

寛政九巳年四月

百艘船年寄

与次兵衛印

三郎兵衛印

大津

御役所

四月十四日山王御神事二付、例年諸浦神輿船鬮取船方御役宅二而有之候処、去寅年^ノ御手代衆故障二付大坂表へ御下り被居候而、卯年は木村留右衛門様御宅二而有之、辰年ハ町役内藤伍左衛門様御宅二而有之候処、当年は大坂表手代衆落着二付、是迄町住宅御手代衆大半御屋敷之内へ御引取^入二付、当年は七里官助様^ノ御頼二付、十三日朝当会所二おゐて相勤申候、

浅尾紋藏様

渡邊弥次郎様、是ハ服部氏跡役見習、

北出雲平殿

若覚、草履取

其外勝手方手伝三人

にしめ 竹のこ

焼豆腐

干鱈

酒六升

こんにやく

右取揃、前夜^ノ御持せ被遣候、此方^ノ吸物椀、吸物せん計、かし申候、前以七里様^ノ御尋被成は、是迄会所二おゐて鬮取候例有之旨承知いたし居候間、年月相記差出候様被仰渡候二付、此方^ノ申上候ハ、承

伝計二而旧記相見へ不申、鈴木小右衛門様御時代二而も可有之哉と申上置候、

巳年船組

大宮 式百石
式百石
甚之丞
新之丞

二宮 百八拾石
百八拾石
大浦船年寄

聖真子 百九拾八石
式百石
塩津 太郎兵衛
半兵衛

八王子 式百四拾八石
式百三拾石
同 十左衛門
弥助

客人 式百石
式百石
今津 市三郎
十左衛門

十禅師 式百石
百九拾石
海津 太郎兵衛
甚兵衛

三宮 式百石
式百石
同 治左衛門
嘉介

已上
右之通此通^方へ壹枚被下候、北出へ壹枚、御役所へ壹枚、 \times 三枚

一、膳所十分一二付、当津問屋之内白銀屋陸助、嶋関油屋作兵衛、伊勢屋孫左衛門、伊勢屋甚兵衛、小舟入舁屋佐助、右五軒は是迄夫々札受二被得御供料被差 出候処、当年は如何可致哉と、右銘々尋二被見へ候二付、此方方申候者今春方已来札ハ請候二不及候得とも、料物之義ハ志持を以是迄被差出、勿論神事之事二候へハ、此義を御止メ被成候へとハ難申旨申入候処、是迄心持ハ無之候へとも、無抛無躰二差出候義故、向後相止可申段被申、自然於湖中二十分一之者共故障有之候節、可然取計呉候様被相願候二付、於其義二ハ此方二如才無之段申入置候処、七日ケ間何の故障も無之候付、右之銘々十三日二当会所へ礼二被参候、

諸白三升 翌日

生鯛老尾 山王神事年寄ふねへ入遣し候、

生鮑貳つ

イセ

海老五

右持参被致候、 伊勢や孫左衛門

油屋作兵衛

伊勢や甚兵衛

升屋佐助

但白銀屋供介は上京二而不参候、

四月廿一日、大坂御目附様勢田川筋御順見御越し被遊候二付、例之通舟差出し候事、

水野小十郎様 若狭屋八兵衛付添案内方

小出外記様

右二付御出迎例之通、孫右衛門、九兵衛相勤ル、供平兵衛

一、石原庄三郎様関東御下向ニ付、為恐悦与金子貳百疋御祝義申之、則四月廿三日御目見江在之候事、

右、六兵衛、太郎兵衛相勤ル、供新八

一、同廿四日、御出立ニ付勢多迄御見送り、尤勢多神事ニ付御小休、鳥居川鍵屋ニおゐて御目見江在之、夫々勢多神領迄御見送申候事、右之通六兵衛、孫右衛門相勤申候、供嘉兵衛但シ鳥居川入口ニおいて御出迎、手札差出し御披露有之候事、

端午御礼

石原庄三郎様

青銅壹貫文、下ケ札

石丸三平様

元々

七里官助様

//

福永久次右衛門様

町役

内藤五左衛門様

地方公事方

芝山泰蔵様

右ハ鳥目五百文つゝ、

右之外御門内不残、其外組屋敷不残、

北出雲平殿

右ハ手札計

右之通六兵衛、孫右衛門相勤メ、供弥兵衛

一、五月廿一日、例年之通貴布祢御神酒頂戴、朝飯在之、役人不残出勤、尤与次兵衛、市兵衛、七兵衛、六兵衛、外ニ忠兵衛、右五人断而不参候事、

但し料理方当月迄ハ柳町うを屋長兵衛方ニ在之候へ共、殊外鹿抹之いたし方ニ付、其後ハ柳町貝屋半六方へ申付候故、当廿一日半六為顔見せ之肴一種差出候事、躰肴 新鯖の からしのた

六月四日

一、御廻状壹箱

幸津川始

安治

小浜

吉川迄

野村始

江頭

大房

田中江

常楽寺迄

一、同 壹箱

右者当月三日御茶重御下向御用ニ付、右村方へ可相達旨被仰付、五日朝飛脚義兵衛遣又、賃銭七百文之内四百文野村へ申遣候、残り三百文幸津川へ申遣候、尤此方ハ別紙手紙を遣申候、

一、五月廿六日、堅田町組勘三郎出勤ニ付、当役不残出勤之上盃致候事、尤与次兵衛、市兵衛、七兵衛、右三人ハ断ニ而不参候事、

勘三郎持参物 酒貳升、鯉貳本

料理方、左之通、

三種の肴、硯ふた 吸もの はまくり

×右之外持参の鯉さしみ、あらの吸もの、

一、六月九日、三井寺を例年之通竹子拾本到来二付、役人江配分いたし候事、

一、六月十四日、石原庄三郎様江戸御下向御留主御窺金子貳百足、目錄台二のせ袴羽織二而市兵衛相勤ル、供新八、

一、同日、御元×福永久次右衛門様、御勝手御用人山田仲助様、右御兩人御供二而御下り二付、留主見廻二金百足つゝ市兵衛持参致候、

一、六月十七日、町役所石丸三平様吾妻川浚之儀被仰渡候、年寄与次兵衛承知いたし罷歸り候、町代遠藤仁右衛門被相渡候書付、左之通、

覚

一、明十八日朝四つ時、川筋御見分として町御掛り役様、御組様御出役有之候間、川筋へ町々年寄、五人組之内耆人宛、其持場江被出、待請可被申候、以上、

巳六月十七日

惣年寄

町代印

| | | |
|---------|------|-------|
| 百艘持場右中間 | 下堅田町 | 平蔵町上組 |
| 獵師町 | 伊勢や町 | 九軒町 |
| 和泉町 | 境川町 | 下博勞町 |
| 下関寺町 | 中関寺町 | 清水町 |
| 下片原町 | 上片原町 | 上関寺町 |
| 右町々年寄 | | |

五人組 中

右順々相廻し可被申候、

右下堅田町年寄六助方へ四つ半時為持遣し申候、

一、十八日四つ時過、石丸三平様、同心川嶋文左衛門殿、遠藤仁右衛門殿見分二御出被成候、与次兵衛罷出候、

七月六日、当所暑氣御窺

石原庄三郎様
素麵三拾把
白木二重操台

下ヶ札、奉書包熨斗

石丸三平様

御元×

七里官助様

同断

福永久治右衛門様

御台所取×

山田仲助様

御町役

内藤伍左衛門様

御公事役

芝山泰蔵様

右ハ素麵廿把宛配ル、

小頭

佐久間正蔵様

同断

赤井平六様

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

右ハ素麵拾五把ツ、

右之外御門内組屋敷、不残手札二而相勤ル、并ニ北出雲平殿手札二而相勤ル、六兵衛、忠助相勤申候、供新八

七月七日、三井寺乃暑氣見舞与して素麵廿把、例年之通参り候事、

七月六日、京都暑氣御窺

東
菅沼下野守様
金子貳百足
目録台
下ケ札付

御用人

御取次

小林吉左衛門様

滋賀弥兵衛様

高橋官蔵様

同 弁蔵様

原田仙助様

椎名半蔵様

白木保兵衛様

右ハ手札計

西
三浦伊勢守様
金子貳百足
目録台
下ケ札付

御用人

御取次

栗原武左衛門様

曾我元三郎様

富尾武兵衛様

津兼安左衛門様

加藤直右衛門様

梶村立助様

藤井文左衛門様

右ハ手札計

東御公事方

西尾新太郎様

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

加納小十郎様

上田弥右衛門様

右者白銀壹両宛

東御公事下

寺田官左衛門様

末吉新五郎様

佐伯喜藤太様

森 義左衛門様

中川定右衛門様

同 李左衛門様

櫛橋平蔵様

中尾彦兵衛様

右者手札計

上町代

田内彦助殿

右ハ白銀三匁

右之通太郎兵衛、孫右衛門相勤ル、供弥兵衛

西御公事方

渡邊甚五左衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

西御公事下

千賀与惣右衛門様

久下政右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八蔵様

酒井宗助様

菊池治左衛門様

柏原治部右衛門様

若狭屋八兵衛殿

右ハ指鯖貳刺

覚

一、金子五百足

一、銀子三枚

一、同 壹枚

右ハ從御本山被下置、慥ニ受取申候、以上、

大津百艘

寛政九年巳七月十二日

年寄印

御講中

釜屋藤兵衛殿

一、例年之通湖上船増減相改帳面ニ記、来月朔日ハ五日迄ニ可致持参候、
遅滞致間敷候、此配符致請印、昼夜不限早々順達、留り所ハ可相返候、
以上、

大津

巳七月十二日 御役所

大津浦始長沢迄

庄屋

舟年寄 中

貸舟屋江も右之段可申聞候、 坂新兵衛方へ

右請印形いたし、坂本江遣し申候、

一、同箱壹つ

松本始り

右松本へ八ツ時嘉兵衛為持遣し申候、

外ニ添書壹通

一、去辰八月以来船増減之記、委細相分り候様別紙ニ書付、舟帳面ニ添、
日限之通可被差出候、此添廻状共早々相廻し、留り所ハ可被相返候、
以上、

大津御役所

巳七月十二日

渡邊満兵衛印

貸舟屋へも右之段可申聞候、

大津浦始長沢迄

庄屋
舟年寄
貸舟屋 中

七夕御礼

石原庄三郎様

青銅百疋
木札付

石丸三平様

元々

七里官助様

〃

福永久次右衛門様

町役

内藤伍左衛門様

公事方

芝山泰蔵様

右五軒鳥目五拾疋つゝ

其外御門内御手代衆、組屋敷不残、北出氏手札ニ而相勤申候、

市兵衛、九兵衛、供新八

口演

一、貸船増減相改帳面ニ相記、来閏七月朔日ハ五日迄上納可被致候、此
廻状早々順達、留り所ハ百艘会所へ御返可被成候、以上、

七月廿三日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、五郎八、
善兵衛、源六

一、七月十八日頃ハ日照ニ付干水ニ相成、矢嶋之関上ノばん船より不申、

小船入ニおゐて上ノばんのせ不申旨、閏七月二日上下小ふねへ申渡し、三日右小舟入ニおゐてのせ申候、

一、閏七月九日右矢嶋ノ関堀さらへ申付、四廻りふね非番ノ加子四人上組小ふねを或ハ下組を式人、白銀屋陸助を、人足都合拾人計ニ而ほり候様申渡候、

一、閏七月八日、尾花川船方右雨乞かけ候様届ニ被参候、船方年寄、

一、六月十八日右天氣打続、廿五日夕方少夕立、七月十一日昼八つ時少ばらく、同十六日少はらく、但昼七つ時過、廿六日雷鳴、尤京都ハ雨ふり候由、閏七月九日昼九つ時地震、同夜八つ時、七つ時、両度とも地震、十一日ハ式百十日快晴風氣なし、尤十一日十二日頃近郷夕方^(カウ)^(立カ)之由、当津ハ不降、十五日七つ時地震、前夜も少有之、十八日雷鳴夕方右初夜前迄降、翌日快晴、

一、閏七月七日、北風ニ付溺死人流来り、坂本町美濃屋庄兵衛裏見通し十間計沖ニ止り、いつかたへもより不申候処、坂本町年寄代五郎介、五人組嘉兵衛、右兩人八日晚百艘会所へ被参、今日於御役所ニ町代遠藤仁右衛門殿被申候者、右死骸御役所目障之場所ニも有之候へ共、儀際へ寄不申、逆も其候ニ難差置、いつれから成とも及御届ニ、取片付可致旨被申聞候へとも、湖中之義町内右取片付いたし候例も無之候間、御断申上候処、百艘方へも通達いたし候様被申付候間、此段及御達候間、可然取計呉候様五郎助兩人被申候二付、此方宿番六兵衛承り置、追而返答可致旨申候二付被歸候、

一、翌九日、町代部屋右呼ニ参遠藤仁衛門殿堀猪三郎殿話合、百艘年寄

与次兵衛参、町内右夜前右之段申被参候得共、百艘方ニも湖中之義引受候義は無御座、既寛政四年子年又其已前安永七年之行立具ニ相咄、則寛政四子年之留書帳、西御町役石丸三平様へ御覽ニ入御断申上候処、左候ハ、先引退キ可申、尚又品ニ右追而沙汰可致旨被仰候、与次兵衛、六兵衛、町年寄代五郎助方へ参、夜前御出被仰聞候義、私共ニも旧記も有之、引請候義致かたく、依之、只今御役所へ右之段御断申上置候間、此段御承知可被下様返答いたし候、

一、十一日、御役所呼ニ参、御町方石丸三平様、内藤伍左衛門様被仰聞候者、此間一件其後町方右御届可致様段々申聞候へとも、何分町内へ引請不申、其上天明元丑年十月六日溺死人有之候節、町内右百艘へ引合候趣書付差出置候間、為読聞可申、此義ハ如何いたし候義哉と御尋被成、為御読聞承町内右被差出候書面之趣、一円百艘方ニ覚無之段申披いたし候所、左候ハ、覚無之趣并ニケ様之訳ニ而難引請与申義、明朝書付差出可申段被仰渡候、

一、十二日、年寄与次兵衛、太郎兵衛、孫右衛門罷出、右書付差上候所、坂本町年寄代五郎助、五人組嘉兵衛、源兵衛、藤兵衛双方被召出、石丸様、内藤様、遠藤仁右衛門殿此間右双方段々承候処、急々筋合も難相分り義ニ付、引請場所治定之義ハ追而吟味之上沙汰可致、此度之義ハ已来之形ニ不致、格外ニいたし、双方右御届可申上、勿論費用等之義ハ御役所右取賄可申旨被仰渡候付、御意重ク双方共御請申上候事、

右一件、委細留書ハ別紙袋入ニいたし、水死人一件之箱ニ有之候故略之、

右御請申上置、与次兵衛、太郎兵衛、即刻船方御役所へ罷出、渡邊満兵衛様へ右之段申上、町内并私共御請申上候へとも、百艘之義ハ船方右御検使被遣候義候哉、兼而御船方右被仰渡候義も御座候へハ、

此段及御届候段申上候へハ、則満兵衛様奥江御尋被成、此節船方懸り役も不相定義二候へハ、先此度ハ町方二而可相濟被仰渡候、

一、御檢使御目附高橋角左衛門様、一井助九郎様、町代堀猪三郎殿御出、当船会所へ御立寄被成、様子御聞之上拾間余も沖二有之事二候へハ、一先ふね二而見分可致様被仰候二付、与次兵衛申上候ハ、如何様とも思召次第事二候へ共、乍併是迄町方御檢使之節、たとひ湖中二御座候而も、アゲへ引寄御見分有之、又地方御懸り之節ハ、ヲカ近ク候而も船二而御見分被成候例格二御座候、角左衛門様被仰候ハ、此度之義ハ何事も格外之取計二候へハ、随分乗船いたし不苦候間、其趣二可致旨被仰渡、船二而一辺御見分被成、其上当風呂やノ関浜崎空地東石垣留り下隅二而御改被成相濟候、尤美濃屋庄兵衛裏二而引寄可申答候処、町内各段々頼二付、右之趣二御座候、此義も已来例二ハ相成不申、

一、十五日、三日さらし相濟候付届二参候、与次兵衛、太郎兵衛、坂本町五郎助、藤兵衛、石丸様取片付被仰付、尚又七日之間建札いたし置候様被仰渡候、

一、同日、高橋様、一井様、堀、遠藤、筆工雁九郎殿、多七殿とも五人右之通百艘太郎兵衛、坂本町五郎助同道二而礼二参り申候、

一、廿二日、右溺死人今日迄七日間尋二参候者ものも無之候付、届ケ二参候、建ふた取捨候様当御番所ニおみて被仰渡候、同心衆、町代遠藤新右衛門殿、百艘中間孫右衛門、坂本町五人組嘉兵衛、

八朔御礼

石原庄三郎様

金貳百足

当年は御参府御留主二付、七里官助様名代二御受被成候、

町役

石丸三平様

元々

七里官助様

//

福永久治右衛門様

町役

内藤伍左衛門様

地方公事役

柴山泰蔵様

台所勝手方

山田仲助様

船方欠役

渡邊満兵衛様

右金百足宛

小かしら

佐久間正蔵様

赤井平六様

目付

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

右銀壺両つゝ

肝煎

吉本弥四郎殿

鳥目廿足つゝ

山本次右衛門殿

御門吟助 五百文

内義 貳百文

御足輕 宗八殿 小つかい梅八

// 卯八

貳百文つゝ

御藏番三人、白崎久太夫様、組やしき不残、

内やしき、平藏町年寄太郎兵衛 与次兵衛 とも

右八名札はかり 忠助 弥兵衛

京都八朔御礼

東
菅沼下野守様 金子三百足 目録台
下ヶ札付

御用人 御取次

小林吉左衛門様 滋賀弥兵衛様

高橋官藏様 同 弁藏様

原田仙助様 椎名半藏様

白木保兵衛様 近藤彦兵衛様

右八軒へ銀壹両宛

西
三浦伊勢守様 金子三百足 目録台
下ヶ札付

御用人 御取次

栗原武左衛門様 曾我元三郎様

富尾武兵衛様 津兼安左衛門様

加藤直左衛門様 梶村立助様

藤井文右衛門様

右七軒へ銀壹両宛

東御公事方 西御公事方

西尾新太郎様 渡邊甚五左衛門様

真野嘉右衛門様 深谷平左衛門様

四方田重丞様 不破伊左衛門様

加納小十郎様 入江吉兵衛様

上田弥右衛門様

右九軒へ金子百足宛

東御公事下 西御公事下

寺田官左衛門様 千賀与惣右衛門様

中尾彦兵衛様 久下政右衛門様

末吉新五郎様 浅賀卯兵衛様

佐伯喜藤太様 上田八藏様

森 儀左衛門様 酒井宗助様

中川定右衛門様 菊池治左衛門様

同 李左衛門様 柏原治部右衛門様

櫛橋平藏様

右拾五軒へ銀壹両宛

上町代 筆工 奥田九右衛門殿

田内彦助殿 右八銀貳両

上町代中へ五百文 下町代中へ五百文

小番中へ三百文 東西御門番へ三百文つゝ

東西中番中へ三百文つゝ 宿鍵屋左助へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文 同下女中へ貳百文

山科大津屋源右衛門へ百文

歩判三両三歩 五百文 貳

銀貳兩 壹つ 三百文 六

銀壹兩 三十一 貳百文 一

百文 貳

披露札 貳枚

下ケ札 貳枚

差出し 貳枚

右之通太郎兵衛、孫右衛門、相勤申候、供平兵衛、荷持和助

当夏比至而早魃二付、尾花川町雨乞懸ケ被申、多ク艀二取乗り被出候事故被及通達、八月五日右かへし被致候故、酒五升右見廻旁同日尾花川会所江為持遣ス、

但し銘々抽丹誠被祈候二付、其奇特有之、右恩礼のためかへし被行候事、

小ふね屋形かし候付、酒貳升持参二而礼被申候、尾花川弥吉、忠助也、

一、八月廿一日、石原庄三郎様江戸表方御登り被遊候二付、勢多迄御出迎二罷越、則大江村片木原二而相勤、夫方鳥居川村鍵屋御小休二て御目見江在之事、太郎兵衛、孫右衛門相勤申候、供弥兵衛

一、同日、石場御出迎市兵衛、忠助相勤メ、夫方御帰館被遊候上、御玄関迄恐悦二罷出事、市兵衛、忠助、供新八

追而例年之通、船運上銀大津橋本町古望仁兵衛方二而懸改候間、得其意納人印形可致持参候、以上、

湖上船運上銀、来月十五日方十九日迄持参上納可致候、遅滞致間敷候、此配符令請印早々順達、留り所より可相返候、以上、

巳八月廿八日 御役所

大津浦始り長沢まで

庄屋 中

貸船屋へも右之段可申聞候、

右請印いたし、坂本へ遣ス、八月廿八日坂本新兵衛へ為持遣ス、

使弥兵衛

一、御配符壹箱 松本村始り

右ハ松本村へ為持遣ス、使

口演

一、船御運上銀来月十五日方十九日迄無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所方百艘会所へ御返し可被成候、以上、

巳八月廿八日 百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、五郎八、善兵衛、源六

八月廿九日

石原庄三郎様 金子三百足 目録台 下ケ札付

右者江戸表方御帰着恐悦相勤申候、尤此節殊外御用多時節故御逢無之、御玄関御帳前へ罷出申置候事、与次兵衛、六兵衛相勤申候、供平兵衛

九月廿二日、堀田大蔵大輔様御組、勢田川筋御下見与して御越し被

成候二付、例之通小船壹艘差出し候事、小舟入方御乗り被成候御名前、左之通、但シ勢田まで

中村^松弥七郎様
植村権八郎様
桂 専作様
奥村八郎様
吉居郡七様

重陽御礼

石原庄三郎様

青銅壹貫文、下ケ札付

石丸三平様

元々

七里官助様

同

福永久治右衛門様

町役

内藤五左衛門様

地方公事方

芝山泰藏様

右ハ鳥目五百文つゝ、

右之外御門内不残、其外組屋敷不残、

北出雲平殿

右ハ何れも手札計

右之通六兵衛、九兵衛相勤申候、供

一、九月廿一日、例年之通貴布祢御神酒頂戴、朝飯在之、当役不残出勤

之事、尤三郎兵衛、忠兵衛、右兩人断二而不参候事、

一、九月廿九日、東町御奉行菅沼下野守様御下向二付、追分迄出迎、石場迄見送り、御子息幸次郎様同断、与治兵衛、孫右衛門、とも弥兵衛

御役所方御差紙三通、但し南山田村壹通

赤井村壹通

塩津浦壹通

右浦先々江相達候様被仰出候、則態飛脚仕立遣候事、

但し飛脚孫兵衛与申者雇遣し申候、尤添書、賃銭差遣入、写左之通、

覚

御差紙壹通 南山田浦

賃銭貳百文御渡し、

御差紙壹通 赤井浦

賃銭三百文御渡し、

御差紙壹通 塩津浦

賃銭壹貫八百文御渡し、

右御役所方相達候様被仰出候二付、態々以飛脚相渡し申候、慥ニ御請取可被成候、尤右之通賃銭夫々無相違御渡し可被成候、以上、

巳十月三日

百艘印

南山田浦

安井浦

塩津浦

右浦々舟年寄中

一、十月四日、金蔵ラ堀端ニ井形ホリアケ候ニ付、御倉町年寄米屋吉兵衛方へ五日四廻り弥兵衛方江遣し承り候処、堀中江上水出候ニ付一日堀見候処、雨天ニ付片付不申、自然水出候へハ直様鍵屋利助方へ引取と□石致、少も荷物場橋ニ故障無之候ニ付、此段御承知可申候、尤御役所へハ内々御届申上置候段被申候付、其俣ニ差置申候、

一、六日、矢橋芝田清蔵被参、毎々御不沙汰ニ打過候故、一寸御見舞申上候、はも式本、坪かます五持参被致、尤乍序此度請取、鯨石方へ頼置候、自然沙汰も有之候ハ、宜頼入候様被申置候、

十月十五日

一、当御役所ハ矢橋始廻状老通相達候様被仰聞、則廻り嘉兵衛ニ相渡し置申候、尤小舟入ハ急船源兵衛遣候筈、

十月十七日

一、御差紙老通、御役所ハ御渡シ被成、則和邇北濱村差遣し申候、和邇南濱文右衛門舟十七日九つ時ニ遣ス、

十月廿五日、当津御組屋敷山方御掛り役川嶋文左衛門様ハ、山門御修覆ニ付大津浦ハ坂本浦迄材木船賃并切割之義御尋ニ付、左之通書付相認メ差上候事、

口上之覚

大津浦ハ坂本浦迄材木船賃并切割之義御尋ニ付、左ニ申上候、

一、材木老駄ニ付船賃六分宛

但し壹尺四才壹切与定、八切ニ付老駄之事、

一、材木増懸り之分

但し老本ニ而

式拾切ハ三拾九切迄 平才ニ五割増

四拾切ハ七拾九切迄 同 倍増

八拾切ハ上ハ 同 三増倍増

一、槻、楠、檜之分ハ船賃式割半増之事、

右之通御座候、以上、

寛政九年

百艘船年寄

市兵衛印

巳十月

川嶋文左衛門様

一、十一月十三日、吾妻川浚出来見分として石丸三平様、多賀喜會太様、町代遠藤仁右衛門殿御こし、首尾相濟候、与治兵衛参、請負嶋関新兵衛徒弟、六貫文之処、其日少々為直候付五百文まし遣ス、

御尋ニ付乍恐口上書

一、湖上米船賃之義ニ付、御定御証文等在之候哉、書付差上候様被仰付奉畏候、此義往古ハ相定在之処、船持共困窮ニ付、前々ハ増船賃之義御願申上、御聞濟被成下候節、御触書之写、左ニ奉申上候、

覚

去丑年江州御年貢米湖水浦々より大津着運賃之義、去々子之御年貢米運賃、同直段御証文相濟、江州御代官中江御証文之趣申達候間、津出之浦々問屋共江相達置受取可申候、給知米、商人米運賃之義、去四月申渡候通相心得受取可申候、此廻状所附之下致印形、順々早速相廻し、留りハ可相返候、以上、

寅正月廿一日 石原清左衛門御印

但し年号ハ宝永七年也、

右之通御座候、尤膳所迄米船賃之義ハ式表二付六合、御城廻り候得
ハ七合五夕受取申候、海上凡四拾町計、所二より少々宛甲乙御座候、
勿論御用米、商人米共同事御座候御事、

寛政九年

百艘船年寄

市兵衛印

巳十一月廿三日

大津

御役所

右書付相認メ差上候処、尚又御糺之上左之通書付ニ調印致差上候事、

御糺ニ付申上候書付

当所御蔵場ハ御用米膳所迄船積被仰付候義も可有之間、右運賃米湖
上里数等御糺御座候、此義湖上船積運賃米之義ハ、先前より私共仲
間ニ而当所ハ諸浦江之定メ有之、四斗入又者五斗入ニ而も、俵大小
不抱式表二付候運賃ヲ以運送仕候義ニ而、膳所御城迄者当所御蔵場
より凡町数四拾町程在之、右式表二付候賃米六合ニ相定メ、御城乗
越候得者、六合五夕宛之定ヲ以運送致来候義ニ御座候間、右賃米ヲ
以御用被仰付候ハ、何時ニ而も船差向候様可仕旨申上候処、被仰
聞候ハ、江州御年貢米之義ハ、当所御蔵迄湖上船積いたし候村々多
分在之、何レも御定メヲ以前々方被下置候船賃米之御見合も在之義
ニ付、此度船積被仰付候共、運賃米相減運送可仕旨再応御糺御座候処、
私共仲間之船ヲ以年々江州村々御年貢米も積請候得共、一同御定之
御運賃米通ヲ以船積仕候ニも無之、浦方ニより右之外間米受取候場
所も在之義ニ而、売米も右御運賃米ニ准し候場所も在之、又者右御
運賃よりハ少々高キ場所も御座候得共、当浦方膳所へ之仲間定メ之
賃米ハ前書之通御座候間、賃米減方之義ハ御免被成下候様仕度、勿

論此度御用米船積被仰付候共、間米等之出方無之義ニ付、仲間定メ
之賃米ヲ以運送被仰付被下候様奉願候、然ル上ハ聊御用向無御差支
大切ニ相勤候様可仕候、右御糺ニ付相違不申上候、以上、

巳十一月

百艘船年寄

与次兵衛印

大津役所宛

右膳所行御米、翌午三月舟積ニ相成候事、

但委細右一件之別帳ニ記置候事、

臘月朔日、京都寒氣見舞

西御奉行

三浦伊勢守様 真鴨一懸

東御奉行様は江府御役附ニ付、先達而御下り被成御留主故、御

門内一円任先例不相勤候事

西御門内

御用人、御取次様方手札計

渡辺甚五左衛門様 西尾新太郎様

深谷平左衛門様 真の嘉右衛門様

石破伊左衛門様 四方田重丞様

入江吉兵衛様 加納小十郎様

上田弥右衛門様

右ハ式朱一片つゝ、

両方とも公事下ハ手札計

田内彦助殿 若狭屋八兵衛殿

銀一両 ひとり一羽

右之通与治兵衛、孫右衛門、荷物佐兵衛計、

十二月三日、当津寒氣見舞

石原庄三郎様 真鴨一懸

石丸三平様

七里官助様

福永久治右衛門様

内藤伍左衛門様

芝山泰藏様

山田仲助様

船方懸

内堀繁太様

右ハ式朱一片つゝ

佐久間正藏様

安井平六様

高橋角左衛門様

多部甚左衛門様

岡本多内様

右ハ銀一兩つゝ

北出雲平殿、手札

右之通与治兵衛、九兵衛、とも弥兵衛

覚

一、金子百疋

右者当津方御家中方并御人足渡海為御挨拶与御前方被下置、慥二頂戴仕候、以上、

巳十二月七日

百艘印

芦浦観音寺様御内

松岡市左衛門様

東御奉行

一、松下信濃守様

御登り

右極月廿三日、石部御泊り二付、廿四日草津御出迎、太郎兵衛、孫右衛門、供弥兵衛

廿四日、石場御出迎、市兵衛、勘三郎、供新八

同夜当宿御泊り二付、廿五日、追分之御見立て、市兵衛、九兵衛、供新八

十二月廿五日、京都町代田内彦助殿江東御奉行様御初入恐悅之義、手紙ヲ以相尋遣候処、左之通申參候事、

尚々御家中御名前書通達仕候、

御手紙拜見仕候、余寒強御座候処、各様弥御堅安可被成御座、珍重奉存候、然ハ東御奉行様御初入御礼日限被為仰出候ハ、為御知申候様被仰聞、御紙面之趣承知仕候、御初入御礼之義、来年頭御礼相兼申上候様被仰出候間、各様二も如例三日御礼之節御兼御申上之、御心得二而御上ケ物等之用意、御上京可被成候、右得御意度御答迄如斯二御座候、以上、

十二月廿八日

田内彦助

百艘船

御年寄中様

田内彦助様方之書状迄通、態々飛脚ヲ以差下申候、御落手可被下候、尤飛脚賃式百五拾文、此ものへ御渡可被下候、以上、

十二月廿九日

鍵屋左助

(裏表紙)

百艘御仲間

七十二番

御年寄中様

百艘

当十二月廿一日発端

一、今般彦根表へ当所御蔵方御返米被為成候二付、舟積方御調一件之儀
ハ別段留帳取拵記置候二付、爰ニ略ス、

但し翌午三月五日

一、朽木兵庫助様并御家中用江戸廻り御陣屋行箇荷物之分、当所方舟積
之儀右御用達川口町升屋市左衛門殿へかけ合かけ置候処、寛政十一
未五月和談相調、則升市殿方書付取之、本紙ハ御箱へ納置、尤当巳
年発端之儀故、升一書付年月当巳年と相認、勿論御目錄金百疋、当
巳年方年々受取候事、

但し右升一殿方取置候証文之写ハ、諸御蔵方船積帳ニ留置候二付、
爰ニ略ス、

覚

一、金子百疋

右者朽木兵庫助様方○被下置、慥ニ受取申候、以上、

寛政九年巳十二月

百艘舟年寄

御用達

升屋市左衛門殿

○印之前へ

今年初而故如此相認遣ス、来年方ハ例之通と申文言加へ可申事、

(印：「百艘」)

二、「万留帳」寛政一〇年

(表紙)

戊 寛政十年

万留帳

(別筆)
「七拾三番」

午正月吉日、

(表紙見返し)

目録

御高札一件、
八幡忠兵衛船持立之事、
南濱^ろ登り米船賃事、
常楽寺一件二付書状之写、
大物村新右衛門船流失之廻状、
船御印石付分り兼候分改可請旨被仰付候事、
御高札御礼勤方、
西御奉行三浦様唐崎御見分、
貸船や株譲り中間奥印之事、
田中江村外兵衛我俣二木柴舟積之事、
嵯峨积迦京都二而開帳二付寄附事、

(印：「百艘」)

四宮絵馬堂建立二付寄附事、
滋賀見世村割木船積一件、
坂本^上ヶ方船積之事無株之船二而猥り二舟^(積カ)致候故、当津二而舟法
申聞呉候様被相頼候事、
膳所御詰戻米船積一件、
矢橋浦^ろ渡舟賃余銭之儀二付来翰写、
塩屋六兵衛芦浦御家中へ舟積留、
御所司代御下向、
小船入渡船場会所之御触書之御尋、
せた川御順見、
和辻次郎作舟扇屋関二而ハマリ危キ事、
船船二而運送御法度之所舟積致候故御尋之事、
小船入朝舟二而病人ハマリ候事、
平蔵町北側西角髮結床地面之事^(証文之事)、
北国町いかや二而三ヶ浦算用寄合、
坂田屋吉兵衛乗前滞掛合、
吾妻川浚見分、
神出村伊三郎船二而善兵衛ハマリ候事、
孫右衛門船海津行濡荷断状写、
嶋之関首ク、リ一件、
上組小船太郎兵衛船之事、
御蔵石垣際へ死人流寄候事、
六兵衛船内海行木綿紛失一件、
赤井長右衛門船賃滞掛合、
白銀や陸助塩津行丸綿舟積、
紛失荷弁金諸入用取究役人連印、

早水二付上番船小船入二而乗せ候事、

吾妻川浚入札一件、

東海道筋式割増、

当所十兵衛船、小三郎船赤ノ井方米積登り紛失一件、

日吉社松之坊方山王御遷座御礼御供物到来書翰返翰、

(本文)

干時寛政十戊午正月二日御礼、

石原庄三郎様 金子貳百足

目録台、下ケ札付

石丸三平様

元々

七里官助様

//

福永久治右衛門様

//町掛り

内藤伍左衛門様

町役

芝山泰蔵様

台所勝手方

山田仲助様

船掛り

内堀繁太様

右七軒金百足つゝ

小頭

佐久間正蔵様

赤井平六様

船方下役

北出雲平様

惣年寄

目附

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

右拾軒銀壹両つゝ

肝煎

吉本弥四郎殿

山本儀治郎殿

右八鳥目貳拾疋つゝ

白崎久太夫様

御蔵番三人

組屋敷不残、其外内屋敷、平蔵町年寄

右八名札計

小野又三郎殿

矢嶋真十郎殿

町代

堀 猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

御門吟助五百文

内義貳百文

御足輕宗八殿

小つかい梅八

// 宇八

右八鳥目貳百文つゝ

歩判式両壹歩

銀壹匁十ヲ

五百文 一
貳百文 六

右之通与次兵衛、市兵衛相勤申候、供平兵衛

三日、京都御礼

西

三浦伊勢守様

御用人

栗原武左衛門様

富尾武兵衛様

加藤直左衛門様

金子三百足

御取次

曾我元三郎様

津兼安左衛門様

相村立助様

目録台
下ケ札付

藤井文右衛門様

右七軒へ銀壹両つゝ

東
松下信濃守様

金子三百足
目録台
下ヶ札付

御用人

御取次

枚田市之進様

佐伯五郎兵衛様

佐藤八郎治様

坪内逸作様

千葉権之助様

大久保逸八様

芝田伴蔵様

右七軒へ銀壹両宛

西御公事方

東御公事方

三 渡邊甚五左衛門様

二軒 西尾新太郎様

三 深谷平左衛門様

池東南 真野嘉右衛門様

不破伊左衛門様

同 四方田重丞様

三 入江吉兵衛様

池中西南 加納小十郎様

池東南 上田弥右衛門様

右九軒へ金子百足宛

西御公事下

東御公事下

古 千賀与惣右衛門様

池東中 寺田官左衛門様

三 久下政右衛門様

同西南 中尾彦兵衛様

三 浅賀卯兵衛様

池北 末吉新五郎様

古 上田八蔵様

池南 佐伯喜藤太様

古 酒井宗助様

池中西 森 義左衛門様

三 菊池治左衛門様

池北 中川定右衛門様

古 柏原治部右衛門様

同東中 同 柰左衛門様

同中西 櫛橋平蔵様

右拾五軒へ銀壹両宛

上町代

筆工

田内彦助殿

奥田九右衛門殿

右八銀貳両

右八銀壹両

上町代中へ五百文

下町代中へ五百文

小番中へ 三百文

東西御門番へ三百文つゝ

東西中番中へ三百文つゝ

宿鍵屋左助へ三百文

追分丸屋四郎兵衛へ百文

同下女中へ貳百文

山科大津屋源右衛門へ百文

歩判 三兩三步

五百文 貳

銀 貳両 壹つ

三百文 六

銀 壹両 三十

貳百文 壹

百文 貳

披露札 貳枚

下ヶ札 貳枚

差出し 貳枚

目録書付

右之通太郎兵衛、孫右衛門相勤申候、供嘉兵衛、荷持和助

東御奉行旧冬廿五日江戸表より御登り被遊候二付、此度年頭御礼兼
帶二而、御初入恐悦御受被成候二付、則左之通、

東御奉行

目録台

松下信濃守様 金子貳百足

下ヶ札付

内屋敷御家中八名札計にて相勤候、

上町代田内彦助殿へ銀壹両、

右八恐悦御礼之節、世話被致候二付、如此、

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替頂載仕候、右為御願来二日京都西御役所へ持参仕候二付、乍恐此段御届ケ奉申上候、以上、

寛政九年

百艘船年寄

市兵衛印

巳十二月晦日

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届ケ申上候、

但し御目附御三人、橋本町年寄、小歩キへハ口上二而届ケ置候、

正月二日、御高札、御印紙共持参二而上京仕候上、同三日年札之砌、西御公事方入江吉兵衛様へ御役所へ罷出候義、内々孫右衛門御尋申上候処、京都御役所御用始之義ハ当八日二而、夫迄ハ詰番等無之、乍併銘々持日ハ相定候有之、差掛り候義ハ御受在之候得共、不差急義ハ八日迄御受無之趣被仰聞候得共、右日限まで逗留難相成御座候二付、何卒御勘弁之上、宜敷様御取計被成下候様、御頼申上候処、則四日入江様持日二付、御役所二御待受可被下趣被仰聞候二付、四日罷出候事、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙共前々之通被下置候様奉願上候、以上、

大津百艘船年寄

寛政十年

午正月四日

太郎兵衛印

孫右衛門印

御奉行様

右之通西御役所御廊下二而、公事方入江吉兵衛様へ差上、先格之様子御尋二付具二申上、尚又御制札御文言未アザヤカニ御座候間、御名年月計御書替被下候様奉願上置候処、追而御沙汰可有之間、上ケ置歸津可致旨被仰渡候事、

正月四日、初寄合

鰯ノ焼もの、たうふの汁

七日、惣番積

船頭共へ、酒、たうふ

十一日、例年之通帳かため祝義、役人不残出勤、朝飯在之、尤三郎兵衛六兵衛、九兵衛、外二忠兵衛殿、右四人不参之事、まんちう百 上組小船中 仁右衛門 市兵衛

酒貳升 下組小船中

五兵衛 甚兵衛

諸白貳升 坂本新兵衛

勝手方取持いたし申候、

酒貳升 関船治兵衛

右同断

諸白三升 尾花川船方

兩人

右之通持参在之、上下小船、尾花川共年札相濟候迄、於勝手ニ酒給させ申候、

御酒

組重 吸ものハ平ノ具切人

朝飯献立拾九人前、左之通、

繪皿 ぶり身、大こん 汁 つけ、ふき、やきたうふ

御食

平皿 鳥、椎茸、人しん、皮牛蒡、やき麩

焼もの ふり

御酒

肴 八寸 かまつか、かちくり玉子、かまほこ

鉢肴 飯たこ

// 水菜したし

一、年寄治郎左衛門殿義、当駅役義年限中、無滞被相勤退役被致、当春
方仲間江出勤二付、鯉式本仲間へ持参被致、則左之通料理いたし給
候事、

てつほう二、あら吸もの、但し赤みそ

正月十五日、芦浦観音寺様江御礼、如例扇子三本人吉箱献之、

但扇箱くり足紫皮台、式重くり、昆布熨斗包添、

例年権僧正様御逢有之、御手つからこんふのし被下置候処、一兩年
ハ御病氣ニ付京都御屋敷ニ被遊御座、尤御当住様ニハ御幼年ゆへ、
何れ様ニも御逢無之旨、片岡、西川御両人方御断被仰聞候、且御酒、
御節等ハ不相替被下之候事、

外ニ御家中

片岡喜右衛門殿、西川五郎兵衛殿、久松清右衛門殿

右三人へ三本人箱吉つゝ、

治郎左衛門、勘三郎、供加兵衛

小舟加子三人乗、日和能罷下り、無滞相勤候、併帰りハ西風強、

舟立不申候二付、陸廻りニ而罷帰り候、

一、八幡宿大津屋忠兵衛義、同浦ニ株附之売舟有之、相求メ舟持渡世致
度旨申立、当所舟頭共俱々罷越、金子廿両貸呉候様、返済方ハ八幡
行下り船毎被下候世話料を以差引致呉候様相願出候二付、一同相談
之上金子拾両かし遣、外五兩当年中別段取替遣し、尤両様とも、別
紙証文取置申候事、

一、正月廿一日、例年之通貴布祢御神酒朝飯有之、役人不残出勤并隠居
年寄忠兵衛出座、但年寄三郎兵衛不参、

一、土屋能登守様御領分江州伊香郡村々近来御領ニ相成、当津御代官石
原庄三郎様御支配被遊、右御城米舟積場所之儀ハ、土屋様之節同様
浅井郡南濱村へ出、夫方舟積ニ而当津御蔵着ニ候、此舟賃五斗入吉
俵二付七合宛ニ而積置、御米之内見取ニ仕来り候処、去巳年より舟
賃米四斗俵ニ而別段郡中方可相渡旨二付、尤升目損徳ハ無之儀ニ候
へ共、後年ニ至り下米、悪米等被相渡可申段難計、且ハ新規之事故、
早速南濱浦舟方右郡中へ懸ケ合被申候処、此義ハ村方之存寄ニ而
ハ無之、石原様米懸り御役人中被仰出候趣村方申之、勿論御米運
送差懸り有之候得ハ、舟積為滞候儀恐多儀故、無抛去年中ハ其俵ニ
而運送致候得共、南濱浦之儀ハ廻舟之湊ニ御座候故、浦方切ニも難
差置、いかゝ仕候哉、御相談旁此度年礼を兼罷登り候旨ニ而、同
村舟方惣代源次、庄屋新右衛門両人、当舟会所へ被参候二付、俱々
及相談候処、前書之通石原様米方御役人中可御差図之由、村方被
申候義も有之事ゆへ、右新右衛門、源次方御蔵懸り御手代浅野紋蔵
様へ御内意ニ承り被申候処、浅野氏被仰候ニハ、御米積置之内ニ

而、運賃見取二致為致候而ハ紛敷儀も有之、既淺井郡之御米も同浦南方同南濱を積登り、運賃米之儀ハ御蔵二而計立相渡候義二付、右伊香郡も浅井同様可仕旨村方へ申附候処、村方直渡二可致旨申二付、任其意二候義二被仰置候、迎も積置御米之内見取二ハ難成候へ共、浅井郡之分同様御蔵二而計立請取申度候ハ、書付を以相願候様と被仰候旨二付、此儀いかゞ可仕哉と申參られ候故、浅井郡始外浦方舟積致候御米之舟賃米、御蔵二而計立御渡二仕来り之儀二候へハ、此度伊香郡之分も同様二相成候共、可申上様無之候儀二存候間迷惑なから其旨願書被上、可然と申遣候二付、則願書を以右之通被願出候処、正月廿一日中間年寄呼二參、次郎左衛門罷出候処、浅野氏被仰候二ハ、前書之趣南濱庄屋、舟持共願出候、此義百艘方始外廻舟之者共二も同意之事二而、以来御運賃米御蔵二而渡候義差障り筋不申出候哉と御尋二付、次郎左衛門申上候ハ、何卒御慈悲を以仕来り之通積置御米之内二而見取二被仰付被下度、無左候而ハ御給知米、商人米等之運賃米請取方二も相響、先規仕来り二相偲候而ハ、困窮之舟方迷惑仕候旨、種々申立候処、同南濱積浅井郡之分、其外浦方積越候御運賃米、何れも御蔵二而計立御渡被成候義被仰立、無致方候故、伊香郡之分も御蔵二而御渡被下候様と申上候処、南濱方之運賃御定五斗入壹俵二付六合つゝ二而、則浅井郡之分も如此相渡来り候二付、右伊香郡之儀も南濱方之舟積二候故、浅井同様六合つゝ御蔵方相渡候、尤是迄下極メ二而七合つゝ二候へハ、右余米壹合ハ以来も村方別段取之候様被仰候二付、是又兩様二相成迷惑之筋二付、猶又南濱庄屋、舟持へも申談、此度之儀ハ願下ケ為致申候、依之正月廿二日南濱庄屋、舟持歸村被致候、

但し歸村之上伊香郡村々へ懸ケ合、以来とも舟賃ハ壹石二付壹升四合二而、舟賃米者納米同様之米二而、下米、悪米等被相渡間敷

之書付為取替置候様、勘弁を以取計被申、可然旨申含置候事、

此般舟方下役北出雲平殿、御嫁被迎候為祝と正月十二日

一、諸白三升

一、平目壹枚

海老五つ

正月十二日御使を以到来致候、

一、御紙面添

鳥目式百文、半し式折、使へ遣入、

右二付中間惣代として金式百疋、孫右衛門持參二而悦二參ル、但しため 鳥目式百文、半し式折到来入、

正月廿六日、常樂寺浦一件二付、堅田新左衛門、左十郎兩人被參被申置候儀二付、左之通返書遣入、

切手以得御意候、未余寒強御座候処、弥御堅勝被成御座珍重奉存候、然ハ此間ハ常樂寺一件二付、御両所御上津被下御苦方奉存候、其節御噂之趣、同役共へも及沙汰候処、何分四ヶ浦共打揃一参会仕候儀、可然旨申之罷有候、夫二付貴浦へ相揃候様致度候へ共、御日限被仰下候節自然、無抛差支之程難計、自然不參延引等相成、いかゞ二御座候間、乍自由当浦へ御揃被下候様仕度候間、此段御承知被下、八幡、常樂寺へも乍御世話御通達被下日限御定被成被仰合御出津被下度、尤御日限御定之上前以被仰下候ハ、御待請可申上候、右御報如此二御座候、万々期貴面候、以上、

正月廿九日

百艘舟年寄

次郎左衛門

堅田浦

新左衛門様

左十郎様

二月朔日

右状堅田通イふね、仁兵衛遣入、

覚

一、小艦船壹艘

但櫓壹挺、竿壹本

滋賀郡五ヶ浦之内大物村
新右衛門

右之船、当月十八日和迹村の漕歸り候節、西風強難漕歸二付北小松村船入二繋置、右村二致止宿、翌十九日朝船入江罷越候処、艦綱引切有之、所々相尋候得共、流失候哉不相知、尤夜中風並之儀者難定り旨申出候間、浦々致吟味、見当り次第右之ものへ及通達、船可相渡候、此廻状早々相廻し、留り所を追而可相返候、以上、

午正月廿九日

御役所御印

大津始り長沢迄 壹通

坂本新兵衛へ遣入、

松本始り

壹通

艦持中へ廻状之覚

右本文之通相認、

右之通御廻状到来致候間、右之船御見当り被成候ハ、当会所へ御申出可被成候、此廻状請印被成早々御廻し、留り所を御返し可被成候、以上、

正月廿九日

百艘印

貸船屋惣代

北保町艦持惣代

観音寺町艦持惣代

尾花川艦持惣代

正月廿一日、外用二付年寄次郎左衛門御役所へ罷出候処、舟方懸り御手代内堀繁太様被仰候二ハ、其方中間内之船二御印、御石附等分りかね候舟有之候間、早々相調改を請候様可仕旨被仰聞候二付、則相調候処分り兼候分左之通願書相認、二月二日舟方下役北出雲平殿宅へ孫右衛門持参致入、

但稼舟之儀故、御改之日限被仰下候節、有合不申分ハ追々二御改被下候様、北出氏迄相断置候、

乍恐口上書

一、丸船式百石積壹艘

百艘之内舟頭町

一、同式百石積壹艘

右同断平蔵町

一、同式百石積壹艘

右同人持

一、同六拾五石積壹艘

勘兵衛名前

一、同六拾石積壹艘

十兵衛持

一、同五拾石積壹艘

次兵衛持

一、同 四拾八石積壹艘

市兵衛持

一、同 六拾石積壹艘

徳蔵持

甚七町仁左衛門方かり舟

同

一、同 五拾五石積壹艘

五兵衛持

一、同 五拾五石積壹艘

忠兵衛持

同

一、同 五拾五石積壹艘

七兵衛持

〆拾貳艘

右之船御印并御石附等分り兼候間、御改被成下候様奉願上候、以上、

百艘之内

寛政十年

治兵衛印

午二月二日

同

太郎兵衛印

百艘下知内

五兵衛印

同

十兵衛印

同

治兵衛印

同

市兵衛印

同

徳藏印

同

五兵衛印

同

忠兵衛印

同

七兵衛印

右願之通御改被成下候様奉願候、依之奥書印形仕奉差上候、以上、

午二月二日

百艘舟年寄

次郎左衛門印

大津

御役所

一、此書付相認差上候処、北出雲平殿被仰候二ハ、是ハ舟数多有之候、
いつれ頓而御舟改可有之儀ニも候へハ、至而御印石付皆無之分計願
出可然哉と御内意被下候故、猶又認替次兵衛舟壹艘計御願申上候処、
翌三日御揮替被成下候事、銀三匁つゝ内堀氏、北出氏へ謝礼舟主次
兵衛を被致候、

大津百艘江高札并定書、来月朔日相渡候間、右日限申合、先例之通
人数も申合、九つ時比可罷出旨可申遣事、

西公事方

午正月廿八日

右書付ニ宿鍵屋左助方を手紙相添、仕立飛脚ヲ以申参り候、則手紙
之写左之通、

仕立飛脚ヲ以啓上仕候、弥御勇健ニ可被成御座、奉恐寿候、然者別
紙御書付西御公事方より到来仕候間差上申候、御入手被遊可被下候、
日限無相違御上京可被遊候、飛脚ちん式百五拾文、此ものへ御渡し
可被下候、右之段申上度如此ニ御座候、以上、

正月廿八日

鍵屋左助

百艘御仲間様

右二付二月朔日早天を市兵衛、太郎兵衛、供嘉兵衛、荷持和助罷登り、
西御役所へ罷出、御公事方へ手札ヲ以御案内申上、御廊下ニ扣居候処、
御公事方入江吉兵衛様并公事下千賀与惣右衛門様、右御兩人立会之
上御高札、御印紙共ニ御渡被成候二付、相改メ頂戴仕候、尤御請書

用意致罷出候得共、先方之御帳面二御認メ被置、印形致候様被仰候
二付、御帳面二直二印形致申候、

奉差上一札

一、百艘江被下置候船御高札、御印紙頂戴仕、并是迄之御印紙前々之通
被下置難在奉存候、仍而一札奉差上候処如件、

寛政十年

大津百艘船年寄

市兵衛印

午二月朔日

太郎兵衛印

御奉行様

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、御書替被成下
候様先達而西御役所江奉願上候処、右御高札、御印紙頂戴仕、難在
奉存候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

寛政十年

大津百艘船年寄

市兵衛印

午二月朔日

太郎兵衛印

御奉行様

右御届書東御役所御廊下二而、公事下中川定右衛門様へ差上候処、
御聞濟趣御申被成候事、

右御高札被下置候二付、御礼左之通相勤申候、

西御奉行

三浦伊勢守様

金子式百足、目録台、下ヶ札付

東御奉行

松下信濃守様

右同断

西御公事方

渡邊甚五右衛門様

深谷平左衛門様
不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

御掛り二付別段百足遣入、

東御公事方

西尾新太郎様

同断

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

加納小十郎様

上田弥右衛門様

右各々金子百足宛、御肴与して例之通遣入、

西公事下

千賀与惣右衛門様

右ハ御掛り二付金子百足遣入、

柏原宇右衛門様

右者御高札、御印紙御書役二付金子百足遣入、

歩判拾六切

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都西御役所二而頂戴仕罷
歸り候二付、此段御届奉申上候、以上、

寛政十年

百艘船年寄

市兵衛印

午二月二日

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届奉申上候事、

当所御目付方

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

右ハ白銀壹両宛遣ス、

橋本町年寄へ口上届ケ計、

同町小歩キへ先格ニ付式百文遣ス、

右之通市兵衛相勤申候事、

二月十七日、唐崎石垣御見分有之、小船相廻し候処間ニ合不申、艀

ニ而御用相勤候事、

西御奉行

下小船

三浦伊勢守様

治右衛門

其外与力、同心衆拾人計御出被成候、

右九兵衛相勤申候、供嘉兵衛

一、当二月十三日、舟方御手代内堀繁太様より被仰聞候ニハ、当所貸舟

屋之儀、定例之儀ハ格別ニ候へ共、新願并株分、株譲り其外臨時之

儀ハ、前々之通以来百艘舟年寄奥印ニ而願出可申様被仰渡候事、

但し其節之趣意覚書迄通、貸舟や一件袋江入置候ニ付爰ニ略ス、

一、田中江村卯兵衛と申もの、木柴我俣ニ舟積いたし候ニ付、同所御地

頭当津大房蔵へ帳屋角兵衛、右卯兵衛并村役人とも御呼寄被成御糺

一件之記、^{別帳}三ヶ浦廻船対談留帳へ写置候故爰ニ略ス、

一、当二月、当津ニおいて常楽寺舟積方之義ニ付、三ヶ浦并常楽寺共遂

^参会候事、

但右一件ハ廻舟対談^帳長へ写置候故爰略ス、

一、近藤方旧冬廿九揚凡四五百匁并銘々舟賃残り有之、当月上旬迄々

かけ合、今二月廿二日藤兵衛并大坂屋三郎兵衛兩人被参、次郎左衛門、

市兵衛引合義定、如左、

一、去年分廿九揚之内へ、当時三百匁受取、残銀ハ四月廿日迄ニ

受取候筈^{被渡候筈}

一、去年分銘々残せん之儀ハ、三月中頃被渡候筈、

一、当季のりまへ并坂本行舟賃ハ、月々晦日定例之通被渡候筈、

一、当春以来之廿九揚并銘々舟ちん之儀ハ、五月節句前定例之通被渡候

筈、

右之通義定いたし置候事、

上巳御礼

石原庄三郎様

鳥目百足、但し青刺木札附

御手附町懸り役

石丸三平様 是ハ町懸り御役ニ付相勤ル、

七里官助様 当時役義ニ而無之候へ共、是迄御役中御世話ニ相

成候ニ付相勤ル、

御元々

福永久次右衛門様

同

内藤伍左衛門様

御町役

芝山泰蔵様

御勝手御用人

山田仲助様

舟方御手代

内堀繁太様

右七軒鳥目五拾疋つゝ、但し藁繩刺、紙札附

外二御紋内御手代衆、御組屋敷不残并御蔵方御手代浅野紋蔵様、舟方下役北出雲平殿、手札計二而相勤ル、与次兵衛、次郎左衛門、供新八

一、当三月三日の嵯峨釈迦如来京都誓願寺國福寺二而開帳有之処、当宿問屋肝煎吉本弥四郎方へ、由縁を以寄進物相頼参候趣二付、同人を無扱被相頼候故、中間を南鐙吉片寄符いたし候事、

一、今度四宮絵馬堂新夕二建直度旨二付、神主滋賀左衛門并氏子町惣代度々参り被相頼、無扱儀二付金子百疋奉納いたし候、

但右奉納金寄進札二書顯し差出被呉候而ハ、後日諸方を頼参候節、断之差支二も相成、殊二わつか之納金二候故、氏子町惣代方へ忠助持参、必寄進札差出不被呉様申談置歸り候事、

当三月八日方地築初ル、

一、当二月下旬、滋賀見世村之割木を際川を北之山門領へいたさせ、同所船ふね二而当浦へ積越候旨、此方へ相知らせ候もの有之、内々相調候処いよく、無相違儀二付、坂本の船方と立会相糺度存、其旨三月四日四つ家九兵衛息子へ伝言申遣候処、右糺方ハ坂本切二而被致度趣二而段々被相糺、際川船持方一札取之、則三月十日際川之もの

共同道二而、坂本舟方喜兵衛、長三郎、与右衛門濟方之訳被申参候二付、此方を際川之ものへ申置候ハ、此度之儀全際川を南へ可出割木二候処、其方へ引受勿論舟方を差置、無株之船二而勝手自由二運送いたし候義、旁以難相濟候二付、坂本舟方と立会急度対談可致之処、坂本舟方二而相糺度旨二而被糺候処、其方衆心得違二而、以来船二而運送致間敷旨之一札坂本浦へも差出、段々被相詫候二付、此方二も聞濟置候、向後心得違無之様可被致旨申渡置候、猶又坂本舟方へ得御意候二ハ、全躰各々方二も制度等閑故、大津積場へ可出品を際川之もの共引取候様二存候、右場所之儀者川壺つ隔、坂本と大津之積場違之所二候へハ、少二而も不実儀有之候而ハ申分出候事故、前々より相互二実意を以、勝手ケ間敷儀不致候故、是迄何之障り合無之処、此度之儀如何二相心得被下候儀哉と相尋候処、坂本衆被申候ハ、此度際川之もの共隠積仕候儀ハ、於私共二も聊存不申処、各々様方御知らせ二預り、無申訳も事二御座候得共、向後前々方之通(ママ)辞宜合を不乱、大津積場へ可出品縦令荷主勝手二付被頼候共、私共手先之舟二積候様成儀、決而無之様可仕間、何事も是迄同様相互二睦間敷致呉候様被申候事、

其節坂本衆別段被申聞候ハ、湖水一統いつれの浦二而も、舟方之障二相成候品を、無株之船二而勝手自由二運送いたし候義ハ仕間敷旨兼而船御支配様を御触流御座候処、坂本之儀ハ近年上ヶ方船持之もの共、猥り二相成候得共、強而私共方制度仕候へハ、がいあだをなし候故、睨々取締仕かね罷有、難渋二候間、何卒向後私共手先之船隠積仕候節ハ、内々二而御通達可仕候間、何卒各々方方湖水舟法ヲ申聞被下、我意我尽相止(儘)候様、御勘弁を以御取計被下候様と、別段被相頼候二付、此方二も相考、左様之節ハ世話可致旨申置候、但し其節之割木主ハ、別所村弥右衛門と申もの也、

右割木

一、右二付松葉船尾花川忠右衛門并尾花川町中も以来氣を付、自然隠積いたし候者見および被申候ハ、此方へ知らせ被呉候様申置候、
一、右為挨拶三月十二日、坂本舟方三升樽与書状壹通到来いたし候、則書状之写左二記置、

以手紙啓上仕候、弥以御安康被成御座、珍重御事奉存候、誠二此間ハ大勢參上仕候処、何角与御世話二預り忝奉存候、寔二乍輕少御酒壹樽進上之いたし候、猶又此間御頼申上置候通、艸舟運艘之儀有之候ハ、御吟味被成被下度様、よろしく御頼申上度、御礼かたゝ、如此御座候、早々、以上、

三月十二日

坂本舟中間

百艘御仲間中

右本紙ハ到来状さし二差置候、

一、三月十二日朝、年寄市兵衛宅へ坂本舟方庄兵衛被參候趣ハ、坂本上ヶ方之艸二割木、柴等積受、今朝坂本出舟二而当津へ登り候もの御座候間、各々様舟会所へ右之もの御呼被下、無株之艸二而猥り二運送仕候儀ハ不相成旨、湖水一統之舟法御申聞せ被下、以来不仕候様急度御糺被下度存、態々中間方私を以御頼之ため差越候旨被申之候由二付、早速右艸呼二遣し候処、坂本石川清兵衛と申もの二而、舟会所へ引付様子承糺居候所へ、幸ひ坂本舟方与兵衛被參候二付立会相糺候処、艸清兵衛申候ハ、私儀ハ舟方之様子不存候へ共、私買積二而今朝柳^{七本柳}二而積受之節、舟方与兵衛見請居被申、則与兵衛伝言被致候ハ、大津へ登り候ハ、歸り舟之節此方娘之着かへ風呂敷積歸りくれ候様被相頼候得共、舟積之咎も無之故積越候趣申之候二付、此方艸清兵衛へ申候ハ、右艸二而ハ舟方も取計不行届候故、猶又舟

方へかけ合可申候へ共、全体艸二而勝手二運送致候儀ハ不相成事二候間、以来ハ舟方へ左法^作を立候上二而積受可被申旨申渡、右艸清兵衛ハかへし候、跡二而舟方与兵衛へ申候ハ、今朝市兵衛方へ庄兵衛殿を以御申越被成候趣ハ承知致候二付、此方二ハ如在なく各々方之御為二相成候様、上ヶ方艸之もの積登り見咎候節ハ可申聞候へ共、自然糺方之儀ハ其方二而被致候義哉と相尋候処、与兵衛答二ハ、此儀^{間中}毎々寄合評義一決仕置候二付、随分私共方二而相糺可申候間、以来ハ舟方之外上ヶ方之艸二而積登り候節私共聞届候分ハ、私^{其艸}名前月日等相記、私共方書付相渡置可申間、其書付所持無之艸二荷物積越候ハ、乍御世話平生共御穿鑿被成下、私共方へ書通二而御知らせ可被下候、左候ハ、私共方二而急度相糺可申と被申候事、

一、三月十四日、与治兵衛、市兵衛御役所へ罷出、御懸り内堀様を被仰渡候趣、左之通、

此度膳所へ御詰戻米、小堀縫殿御手元之分千七百石、当月廿日水損二いたし運送、勿論先達而書付差出置候通、式俵二付六合つゝ船賃米受取可申候、則当所二世話いたし候もの共有之、貝屋利兵衛^{さや}鍵利兵衛と申もの江何か及熟談二置、手つかへ無之様取計可申旨被仰渡、請印形差上申候事、

一、右膳所行御米、当三月廿三日、廿四日両日二舟積いたし、舟賃等請取無滞相勤候事、

但し委細ハ右一件之別帳二記置候二付、爰二略ス、

從矢橋浦来翰之留

以手紙得御意候、春暖之節、弥御安康可被成御勤役、珍重二奉存候、然ハ渡船賃之儀、余錢過分二申請候様相見へ、折節者及口論、又者

陸二而右船賃致相對、甚見苦敷旅人評判者惡敷、下向二者当滨江之
乗人も自然と少なく、甚難儀二御座候、御互二渡船無数候而者、迷
惑二奉存候間、此節者參宮人、六条參詣往返人通多御座候間、右躰
之儀評判惡敷候而ハ御互二難儀二御座候故、近頃乍御面倒右之趣御
承知被下、余錢申請間敷様、御申付可被下候、此方加子共此間嚴敷
申渡候、且又右躰不埒之儀御座候ハ、無御遠慮加子とも名前一々
御申越被下候様御頼申上候、右得御意度如斯御座候、以上、

三月十九日

矢橋浦

船年寄共

百艘

御年寄中様

右之通来状候二付、当浦渡船掛り之者共へ加子共ハ嚴敷取締申付候上、返翰左之通、

此間者貴札忝致拜見候、如仰暖氣相増候所、各々様弥御安康被成御
勤役奉賀候、然者渡船賃余錢取之候故折々ハ及口論、又ハ陸地二而
船賃致相對候儀も有之、旅人之評判不宣、別而此節參宮人、六条參
詣等往返多候所、右躰二而ハ自然与乗人薄ク相成、御互二難儀之事
二付、於当浦二も取締仕候様、尤貴浦之儀者此間加子共ハ嚴重二御
申渡置被成候へ共、此上二も不埒之加子とも有之候ハ、無遠慮名
前等可申上旨被仰聞、委細御尤至極二承知仕候二付、当浦之儀も早
速取締可申付筈之処、折節無抛用向差添ひ無暇候二付、漸時夜渡船
掛り之もの共一同へ急度申渡、請印取置之候間、自然心得違不埒之
もの有之、御見聞被成候節ハ未始御申越被下候様、此方も御同事
二御頼申上候、右貴答得御意度如斯御座候、心跡期貴面之時候、以上、

三月廿三日

矢橋浦

百艘

船年寄

船年寄中様

一、炭式俵 但し去巳年分二候へ共、去冬ハ至而雪多降積、津出し相

滯候旨二付、当三月廿八日到来致ス、

右朽木様方如例被下候二付受取書遣ス、

四月朔日、例年之通日吉御神事之船御配符四箱、外二御配符式通、

御役所二而受取、夫々ハ相達候趣、左二記、

一、御箱入御配符壹通 百艘へ

但し右箱ハ返上仕候、

御文言ハ例年之通二候故、略ス、尤御本紙取片付置、

一、同 壹箱 山田浦 是ハ山た方取二參、

矢橋浦 即ち使藤左衛門へ渡ス、

但御文言左二留置、

覚

一、船七艘

是ハ日吉御神事之節御馬船、

右之船、来ル十四日日吉御神事二候間、如例年船可差出候、尤服
忌差合之もの相改可申候、此配符令請印早々順達、留り方可相返
もの也、

午四月朔日 石庄三郎御印

山田浦

矢橋浦

船持中

一、同 壹箱 松本浦 廻り新八二遣ス、

此御文言左之通、

来ル十四日日吉御神事御役船之事、

一、船数八艘

右者御供船、台所船并兒船之用二候間、如例年無相違粟津、馬場、
松本江相渡可申候、油断有間敷候、以上、

午四月朔日 石庄三郎御印

松本浦舟持中

一、同 老箱 堅田浦始 堅田飛脚柳屋嘉平次

此御文言左之通、 宿升屋町近江屋庄介へ遣入、

来ル十四日日吉御神事神輿船割賦之事、

堅田浦

丸船貳艘 水主九人 舟年寄
外二楫取忝人

但百八拾石積方貳百石積迄

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主拾忝人 新之丞
外楫取忝人

丸船壹艘 右同断 甚之丞

丸船壹艘 右同断 七郎左衛門

丸船壹艘 右同断 八郎左衛門

海津浦

丸船壹艘 水主拾忝人 治左衛門
外楫取忝人

丸船壹艘 右同断 太郎市

丸船壹艘 右同断 市兵衛

丸船壹艘 右同断 甚兵衛

塩津浦

丸船壹艘 水主拾忝人 源六
外楫取忝人

丸船壹艘 右同断 角兵衛

丸船壹艘 右同断 傳右衛門

丸船壹艘 右同断 三次

右之船例年之通致吟味、来ル十四日已前、大津江着船可致候、尤服
忌差合之もの相改可申候、此配符令請印早々順達、留り所可相返
もの也、

午四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦

舟年寄

今津浦

新之丞

海津浦

次左衛門

塩津浦 源六

外二舟方御手代内堀繁太様方御添書老通有之、則左之通、

来ル十四日日吉御神事二付、例年之通船割賦被差出候、右差船之内
差支有之候ハ、庇付揃ひ候丈夫成船吟味いたし、代り船可被差出候、
尤御神事四五日已前大津へ着船、其段可被相届候、此添廻状共昼夜
二不限早々順達、留り所可被相返候、以上、

四月朔日

内堀繁太印

堅田浦

今津浦

海津浦

塩津浦

船年寄中

一、御廻状壹通 坂本始 二日坂本新兵衛渡入、
 一、同 壹通 矢橋始 廻り新八二遣入、
 右二通ハ御神輿船助水主廿式人之外助水主乗間敷旨之御触ニ而、爰
 両三年計如此之御触出申候、則去年、去々年之留帳ニ写有之故略ス、
 但壹通ハ坂本方北小松迄、壹通ハ矢橋方八幡船木迄也、
 ✕御箱四つと御封書状式通、

一、四月三日、当津柴や町塩屋ハ兵衛方正ゆ粕五駄、芦浦御家中片岡喜
 右衛門殿行二付、下物ふね二積下し申度旨被申参候、
 此義一昨年正月、芦浦へ孫右衛門年頭御礼ニ上り候節、右喜右衛門
 殿被申候ハ、近年拙家田地造り申二付、大津表方少々之肥もの買受
 下物舟二積取申候、畢竟纒之事ニ而、自分遣ひ用之儀ニ候間、右の
 りまへ用捨いたし呉候様御頼二付、孫右衛門引取候上、否御報可仕
 旨申置候得共、其後中間方能々相談相究り不申、然ル処去々年、去
 年兩年とも年分二五六駄程つゝ舟積有之候へ共、いつれも差懸り之
 儀ニ付、まづく、其向ニ相成有之候、然ル処当三月中旬、塩屋六兵
 衛方方干粕式太下物舟二積下し度旨、断ニ被参承届ケ積下し申候、
 尤以来ハのりまへ御払被下度旨、其節喜右衛門殿方へ書状差遣置候
 処、今以御返事無之内、又候之儀故難聞置儀ニ候へ共、外ならぬ事也、
 最早年内是切之事ニも可有之ニ付、今一度積下し置、来ル年頭ニ参
 候節、得と面談ニ断申積り二付、左之通猶又書状差遣置候事、
 以手紙啓上仕候、暖氣相増候処、益御勇健被遊御座、目出度奉存候、
 然ハ此度御入用之正ゆ粕五駄、下物舟二積下候旨、塩屋六兵衛方断
 被申候へ共、先達而同人方方干粕式太下物ふね二積下し被申候節も、

以書中申上置候通、無乗前ニ而他浦之舟ニ為積候儀ハ差障り之儀有
 之、甚以迷惑仕候二付、御断申上度候へ共、時分柄差懸り候御当用
 物ニ御座候故、則下物舟ニ為積申候、尤以来ハ私共船積合之節、積
 受可申候、左候ハ、壹駄二付七分つゝ舟賃御払可被下候、且下物
 舟ニ御積取被成候ハ、乗まへ御払被下候様奉頼上候、右御断申上
 置度如此ニ御座候、以上、

四月四日

百艘舟年寄

芦浦

片岡喜右衛門様

〔貼紙〕
 一、端午節句御礼 年寄与次兵衛、二郎左衛門相勤ル、

供弥兵衛、但勤方上巳之節同様二付略ス、

〔貼紙下〕
 端午節句

一、前二留有上巳節句同様殿様并御手代衆

一、五月八日、三井寺方例年之通竹子拾本到来二付、役人江配分いたし
 候事、

一、五月十四日、御所司代堀田大蔵大輔様関東御下向二付、追分迄御出
 迎申上候事、孫右衛門、勘三郎相勤ル、供平兵衛

五月十八日

一、御配符壹通

野洲郡須原始メ与有之二付、則同所へ久兵衛悴

飛脚与して遣、賃錢三百五十文、

一、御配符老通 同郡小田始メ与有之二付、則同所へ久兵衛悴遣

又、賃錢四百五十文、

右者当月御茶壺御下向御用二付、右村方へ相達し候様被仰付候二付、
飛脚を仕立、添状二飛脚賃書込遣入、

御尋二付口上書

平蔵町字小船入渡船場船会所ニ有之候御触書之写、左ニ奉御高覧入候、

一、貞享二年丑十一月 御触書之写

一、正徳三年巳十月 右同断

一、同 元年五月 大津之駄賃并船賃、人足賃錢定書

右之通御座候、以上、

寛政十年戊午年六月

百艘船年寄

市兵衛印

矢橋渡り船賃錢御定之御高札、天和二年^(元カ)戊五月^(辰カ)二左之御名ニテ御建
被為下候、

定

一、商人荷老駄四拾貫二付船賃、ひた錢拾八文之事、

一、乗かけ荷、人共二船賃拾八文、人老人者六文之事、

一、如此船賃相定候上者、往還之者無遅候様ニ可船渡事、

右之条々於相背者、可為曲事、

元和貳年

五月日

对馬守

大炊助

備後守

上野助

伊賀守

右御高札、平蔵町渡船場堀端ニ御建被下置候、尤寛永十癸酉年より
大津駅所御札場之内へ、駄賃、人足賃、船賃一所ニ御書付被下置候
御事、

寛政十年戊午年六月

百艘船年寄

市兵衛印

右御書付式通、六月二日船方御掛り役内堀繁太様江差上候事、

一、五月廿一日、例年之通貴布祢御神酒頂戴、朝飯在之、役人不残出勤、

尤三郎兵衛、治郎左衛門、隠居年寄忠兵衛、右三人不参之事、

一、六月九日、大坂御目附勢多川筋御順見ニ御越被遊候二付、例之通船

差出し候事、

石丸勇之丞様

下ノ甚兵衛加子三丁
上ノ太郎兵衛加子三丁

下ノ五兵衛加子三丁
是ハ用意ニ而なかれ、

右御出迎、市兵衛、太郎兵衛相勤候事、供新八

六月十二日

当所暑氣御伺

石原庄三郎様江

素麴三拾把、白台、包のし

乍御手附御町役

石丸三平様

御元々

福永久次右衛門様

同

内藤伍左衛門様

御町懸り

芝山泰蔵様

舟方

内堀伴九兵衛繁太様

御勝手御用人

山田仲助様

右六軒へそうめん廿わつゝ、包のし添

御組頭

佐久間正蔵様

〃

赤井平六様

御目附

高橋角左衛門様

〃

多部甚介様

〃

岡本多内様

右五軒へ十五わつゝ、包のし添

右之外御門内手代衆、御組屋敷不残并北出雲平殿江手札計二而相勤

ル、次郎左衛門、忠介、供新八

一、六月十三日、坂本御普請御奉行三浦伊勢守様、其外御掛り御組中様

へ、暑氣御窺として市兵衛、勘三郎相勤申候、尤御奉行様江白砂糖

一折、白木台二のせ差上申候、其外御組中江者手札計二而相勤申候、

尤委細者山門御普請留帳二相記し置申候、

六月十五日、御役所方御配符之写

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日ヨリ十日迄二可致持参候、

一、船帳面之内、所二寄大名下之村々茂、何誰知行所与相認候儀多分有之、領分、知行之差別も不相分候間、都而大名下之分者何誰領分与相認、御旗本下之分者何誰知行所与可相認候、尤右帳面式々通宛差出候二者不及候間、壹ヶ所方壹冊宛可差出候、

右之趣得其意、此配符致請印無遲滞早々順達、留り所方可相返候、以上、

大津

午六月十五日

御役所御印

大津浦始長沢迄

箱入壹通

外二御差紙壹封坂本浦へ、

同壹通(比較)へ辻村へ、

合 箱入壹通

御差紙式通

坂本七本柳弥助へ遣入、

〆

一、御符箱壹つ、但前書同様之御配符壹通入、

右者六月十五日松本浦へ遣入、使新八

口演

一、貸船増減相改帳面二相記、来月朔日ヨリ十日迄之内二上納可被致候、

尤此廻状早々順達、留り所方百艘会所へ御返し可被成候、以上、

午六月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、源七、五

郎八、善兵衛、源六、

追而申達し候、是迄者右帳面式々通宛相認差上可被申候得共、当年
方耆冊宛二而相濟候間、此段申通し候様被仰付候二付、別段得御意候、
以上、

暑氣見舞

六月三日

西御奉行

三浦伊勢守様

金貳百疋

此節坂本御詰切二付坂本へも
相勤申候、尤別二とめ書有之、

御用人

栗原武左衛門様

御取次
曾我武三郎様

留尾武兵衛様

津兼安左衛門様

加藤直左衛門様

相村立助様

藤井文右衛門様

右八名札計

東

松下信濃守様

金貳百疋

御用人

杉田市之進様

佐伯五郎兵衛様

佐藤八郎治様

坪内逸作様

千葉権之助様

大久保逸八様

柴田伴蔵様

右八名札計

右之外

東西御公事方九軒、銀耆両宛、

同 御公事方下拾五軒、手札計、

若狭屋八兵衛、さし鯖式さし、

田内彦助殿、銀三匁、
右之通与次兵衛、孫右衛門、とも弥兵衛相勤、

一、当四月四日、芦浦片岡喜右衛門殿江札物積下之儀二付、手紙遣し
申候処、今六月十七日京都を下り懸二、右喜右衛門殿当会所へ被参、
先達而御手紙之趣承知いたし候、随分御尤之筋合二付、被仰聞候通
以来相心得可申候段被申置候事、

一、当六月廿二日、寺門政所より暑中為見舞索麴貳拾把到来、

一、六月廿三日昼八つ時、和辻治郎作船入舟候節、扇や関先キニ而湖中
へはまり、既二危ク相見へ候二付、折節近辺二堅田糸ひ舟、下物舟
居候故、差図いたし早急ニ漕出させ、無難引揚ケ来候、則二郎作ニ
様子相尋候処、早苧切レ如此仕合ニ相成申候、全躰壹丁乗りニ而通
ヒ候段、難濟申入候処、何之一格も不弁旨申之候二付、右舟宿片半
呼寄右趣意申聞、和辻舟方へ通達被致候様引合候処、同廿五日和辻
舟方弥与八并甚九郎、右兩人当会所へ被参、不念候段断被申、以後
氣を被付候様申入置候、其節式升樽并肴料一封持参被致、世話ニ相
成候旁へ可然取計呉候様相頼被歸候、尤堅田糸ひ舟之分、即日酒樽
を以挨拶被致候事、

一、当午六月廿七日、御役所呼二参、次郎左衛門罷出候処、舟方御手
代内堀繁太様被仰聞候ハ、艀舟ニ而荷物積運送いたし候儀ハ、前々
方も御法度二候処、猥りニ相成三ヶ浦廻船之場所へも這入積登り候
趣二付、天明年中三ヶ浦方出願有之、其節も御差留触差出、浦々村々
請印形有之処、其後も不相用自由いたし候趣相聞へ候、当浦方艀ニ

為積候儀ハ無之哉と御尋ニ付、次郎左衛門答候ハ、御意之通艀ニ而荷物自由ニ積受候而ハ、第一あやうき儀ニ有之、殊ニ舟御用向相勤舟株所持仕候浦々丸船方之障ニ相成候ニ付、乍此上精々御停止ニ被仰渡被下候様仕度御儀ニ御座候、併当浦ニ而至而遠キ浦之艀ニハ為積不申候へ共、西ハ堅田、東ハ木濱辺方上之浦村之もの共、木柴或ハ瓜なすむ其外少々の端もの積登り、又ハこやし取抔日々艀ニ而入込、右歸り之節、自分入用ニ調候肥もの、塩着其余ニも少々之品ハ、前々る定り之乗前取之為積来り申候、此儀是等舟方勝手ニ而取計候ニ而ハ無之候へ共、是等此儀差留候而ハ諸向一躰差支ニ相成儀故、無抛右之趣ニ仕来り候段答上候処、此節山門御修覆ニ付、右御用木等艀ニ而積送り之儀ハ無之哉と御尋被成候ニ付、此儀も容易ニハ積不申候得共、少分之品急御入用ニ候処、外ニ積合無之時、留置候而ハ御用之間ニ合不申、船方ニ而為滞置候様請負人方申立、御懸り役人様方御召被成、急々着ケ候様被仰付候節、丸舟ニ而ハ仕当テニ合不申、勿論舟行足遅ク有之、且増舟賃等相對仕候而ハ、出方無之節ハ丈夫成艀ニ積、尤加子抱加子か下船之者共歟、式人方見計加子相増差送り候儀も、適ニ御座候趣申上候処、右之外ニハ一切艀ニ為積候事無之哉と被仰聞候ニ付、其余ニハ関舟ノ次兵衛、坂本行新兵衛と申大艀式艘御座候、此もの共儀ハ、せた橋下毛村方行、坂本行荷物二限下請為致置候段申上候処、其儀如何之訳哉と御尋ニ付、右所々行荷物ハ畢竟聊之儀ニ有之処、坂本方ハ日々数多之艀当津へこやし取ニ參、其舟ニ壹俵半固之もの、わくの下杯へ積入積隠、又ハミの笠の下へ隱置積歸り、私共制度届き兼候ニ付、新兵衛へ下請申付置候へハ、自分之損益ニ抱り候ニ付、ぬけ荷無之様手切ニ氣を付、自然隱積候もの有之候而も始終坂本へ入込候新兵衛儀故、跡々ニ而も相頭候道理ニ付、新兵衛へ申付置候儀ニ御座候、関舟次兵衛と申ハ將又

せた川筋之儀ハ、当津之加子ニ而ハ川筋乘行方不案内ニ付、參兼候場所ニ候処、関ノ次兵衛と申ハ其向々案内之ものニ候故下請申付置候、尤右兩人共前々る年久敷まかせ置候仕来り之様申上候処、一切艀ニ荷物為積不申段申上候処、重而被仰候ハ、右躰ニ而ハ御役所之御触ハ表向而已ニ而、当浦さへ右勝手ニいたし候へハ、小浦々方ハ勿論積洩候筈ニ候、左候へハ御触之御趣意立不申趣ニ被仰聞候ニ付、其段奉恐入候得共、艀ニ而自由仕候而ハ丸舟方差障ニ相成候ニ付、御願申上御差留被下置難有奉存候得共、浦方江趣意相立候上、艀并加子丈夫ニいたし、日和見定近辺を少々之荷品運送仕候儀ハ、前々方之仕来り之儀ニ而、則先年も御尋有之、其段答上候留置御座候旨相心得罷有候趣申上候処、左之書付有之ハ相分り可申間、持參仕候様被仰付、罷歸り穿鑿仕候処、宝曆式申七月御尋之砌書上候趣留帳ニ有之候へ共、此度之答方ニ用ひ候儀不宣存候ニ付、翌廿八日罷出昨日申上候先年之書付吟味仕候処、私存込違之儀申上候哉、相見得不申候ニ付、此段御断奉申上候旨申上候処、昨日ハ先年之答書有之趣ニ候処、今日無之旨申出候儀如何敷相聞へ候へ共、一躰此度尋候儀ハ強而吟味詰候義ニ而ハ無之候へ共存寄ニも無之候へ共、右御停止之儀を背、諸浦方も艀ニ而荷物積越、当浦方も同様為積候段趣及見候ニ付及見聞候ニ付、依之外浦々江も可相尋積りニ候処、第一当浦之儀を承糺置度相尋候処、右仕来り之儀を今以急相改候様急度申渡ニ而ハ無之旨被仰聞候ニ付、此上ニも舟方積前之荷物を艀ニ而勝手ニ積受、舟方差支ニ相成候義、何方の浦方願出候ハ、艀運送不相成様被仰候是迄之通御取締被成下度願上置罷歸り候、

右御尋之御趣意ハ、艀運送之儀ハあやうき事故御法度ニ候処、猥りニ運送いたし候段不埒ニ思召候ニ付、御吟味も可被成積ニ被存候、一、此方御答之趣意ハ、艀ニ而勝手尽ニ運送仕候而ハ丸舟方障ニ相成

候二付、御願申上御法度ニ被仰付候儀ニ而、実ニ無抛少々の品ハ舟方^の趣意を立候上ハ、艀ニも為積候様^{道理と}いたし度所存^{ニ付}二候事右之通ニ答候事也、

一、七月朔日、夜子ノ刻大白雨雷鳴、但三つ四つ計鳴、其夜京都大仏殿同刻出火、早束鎮火いたし候処、明六つ時前を又々発火、本堂、廻廊、仁王門限不残焼失、二日申刻火止ル、右地面限ニ而、前通類火無之不思儀成事共也、

一、七夕御礼 市兵衛、勘三郎相勤ル、供平兵衛、

但勤方上巳同様ニ付略スル、

×

一、七月八日、せた作兵衛と申もの艀舟二而つほ台積登り、彦根他屋木綿屋太兵衛方へ七ヶ半上ヶ候二付、相招承候所、何も訳合不存候故、不調法いたし候たん断申候二付、已来之義申聞穩便二いたし遣申候、尤せた舟年寄又兵衛殿へ此たん申置、重而右躰之義無之様、艀持中江申聞可被置段、右作兵衛罷歸り可申置、尚又又兵衛殿を右承知ニ有之候ハ、其趣手紙被差越候様申聞歸し遣候、右之外相残候荷物^(屋脱カ)有之候二付、八幡や作兵衛揚ヶさせ、彦根他へ運せ申候、右二付同十二日せた舟年寄次郎兵衛被来候二付、舟積訳合申入候処、鹿忽之段断被申、猶艀方集候砌心得違無之様、一派へ以後之舟積可致旨申被歸候、

一、七月十日、朽木様江戸廻り舟積御荷物之儀二付、升屋市左衛門被参、次郎左衛門うけ合遣置事、

但し右うけ合之訳ハ略ス、

覚

一、金子 五百疋

一、銀子 三枚

一、同 壹枚

右者從御本山被下置、髓ニ受取申候、以上、

寛政十年

大津百艘

午七月十一日

年寄印

御講中

釜屋藤兵衛殿

一、七月廿四日^五、小船入朝ふね下組次右衛門乗合出船いたし候処、松本浜沖ニ而乗合之内、但京都を田舎江参り候病人、駕籠ニ乗居候処、ハマリ候付、早束引揚無難ニ矢橋へ着いたし申候、石場舟年寄茂兵衛、長兵衛江世話致候二付、挨拶二年寄与次兵衛参候、酒式升遣ス、鴨ヶ関申シフラ^(シ脱カ)早束舟押出し世話いたし候故、心付として百文遣ス、下組忠兵衛、当会所^(運)へ挨拶ニ参、翌日与次兵衛方へ松本茂兵衛礼ニ被参候、但捨身いたし候杯と風聞有之候付、為内届ヶと内堀様へ太郎兵衛参候処、此節大坂御承り^下ニ付御留主故、下役北出雲平殿へ申置候所、内堀様御帰宅次第可申上候旨被申渡候事、

一、平蔵町北側西角ニ有之候髮結床地面之儀ハ、年久敷勘四郎と申ものへ貸置、同人代々床職仕罷有候処、段々不如意ニ相成、右地代当時滞銭高五貫弐百文相滞、勿論他借銀多有之、相続難出来趣ニ付、此

節右床之儀株共八床中間組中借財之方へ突出、床職相止メ候二付、床中間東組中へ引受、是迄松本石場二居候塩津屋善七と申もの二引続職為致申度旨、右組惣代之ものを頼出候二付、下地勘四郎滞錢五貫弐百文之処へ、壹貫五百文右惣代を受取為濟遣し、以来之儀左之通一札取之置申候、

一札

一、平藏町北側字嶋ノ関下ル東之方、御仲間御支配地之内二有之候髮結床壹ヶ所、勘四郎と申もの年久敷借り請罷有候処、右床株此度同人方当組中へ引受二相成候二付、以来善七と申ものへ床職為致申度段、御頼申上候処、御得心被下忝奉存候、然ル上八地所御入用之節ハ早速引払可申候、且地代銀之義ハ是迄之通毎年七月、十二月兩度二銀三匁つゝ、無遅々急度差入可申候、勿論右床二付如何様之故障懸り合之筋等出来仕候共、組中ノ埒明聊も御厄介二相成申間敷候、為後日善七并組惣代連印一札差出置候処、仍而如件、

床仲間東組之内

寛政十年

塩津屋善七印

午七月

右組惣代

大塚屋四郎八印

百艘中間

御年寄中

右一札本紙ハ、空地諸証文之袋江入置候也、

但し下地ノ勘四郎ハ、床地裏北ノ方畑地別段借遣置候得共、此度善七儀ハ床地計二而、右畑地之分ハ四廻り柳屋弥兵衛へ以来かし遣候事、

一、当七月廿一日、北国町いが屋作次郎宅ニおゐて、大津浦与次兵衛、次郎左衛門、市兵衛、太郎兵衛、堅田庄兵衛、三右衛門、八幡九左衛門、治郎兵衛、忠兵衛立会、去ル天明五巳年以來当年三月迄之分、三ヶ

浦入用勘定相調候処、差引残銀大津、八幡方堅田へかし二相成候得共、取引者跡方可仕筈之事、尤委細差引書ハ三ヶ浦差引書拔帳二有之故略ス、

当津御役所八朔御札

当正月年頭同前之事

但年寄与次兵衛、九兵衛相勤申候事、とも坂本新兵衛やとい

一、京都八朔御札

年寄治郎左衛門、太郎兵衛相勤ル、供弥

兵衛、荷持和助

但し勤方当正月年頭同様二付略ス、

一、荷問屋株内枳屋町坂田屋吉兵衛、当五月ノ乗前差滞有之候処、六月比死去二付、五月ノ七月前迄凡八拾匁余二相成候所、七月十三日半五郎と申もの被參、節季之処断被申、七月晦日迄差延し呉候様被頼候、然る所同廿八日同人被參、此節迄被相濟候処、御材木代銀其外上納等借受居候付、尤右乗前も同様之義二候へ共、此節右上納対談中二候へハ、居宅売払上納為相濟候節、乗前之所も算用可致段々断被申候付、極難治之中ノ別格被差入候義難成趣付、左候ハ、八月四日右半五郎呼二遣し、左候ハ、右上納相濟候節、無間違埒合可被申、夫迄ハ待遣し候様申間、乍然是迄対談間違延引二相成候事候へハ、此趣問屋中間へ相達置可申旨引合置候事、

但右八拾匁余之内六拾匁程ハ鍵屋五兵衛分、五六匁程ハ釜屋宗兵衛分、残り廿匁程は坂善分二候間、引請分ハ差入可申候へ共、廿匁程之処ハ外買掛同様二致呉候様被相頼候へとも、此方二而引請并小手前之分と申、差別ハ無之候間、いつれ同様之事二候間、聊

之義なから了簡ハ付不申、何分急々均合有之候様申遣候事、

荷問屋株之義も望手有之候ハ、世話いたし呉候様、尚又株代之内二而引落呉候而も不苦候旨被申置候事、

即刻右対談之趣荷問屋之内酒や佐右衛門殿へ申聞、自然株被売払候節ハ相談不相究前二当中間へ通達被致呉候様申置候所、今日ハ則問屋弥藏、白銀屋陸介兩人共此方へ被参候間、右之段申置候様被申候、此節ハ荷問屋中間惣代無之、何事も右兩年寄取計被致候旨二付如此、

一、八月十一日、吾妻川浚為見分、石丸三平様、手塚傳十郎様、町代遠藤仁右衛門七組年寄柳町久兵衛、当仲間年寄与次兵衛罷出候処、此度迎も式尺掘之積り二候間、弥さらへ申付候ハ、其旨可相心得、尤川尻二是迄箭升有之候様相見候間、此度ハしがらミいたし可申、見通し出入無之様、川端直ク二相成候様可致被申渡候、百艘立会場の松本境堂木迄式百式間余、此度再間改有之候事、

一、書付 大津御役所 津内貸船屋惣代

右八月十五日到來二付、即刻橋本町源助へ為持遣入、以手紙得御意候、秋冷二御座候処、弥御堅勝二被成御座珍重奉存候、然ハ昨十六日其御地艀舟二割木壹艘積登り候二付、相招キ様子相尋候処、比叡辻新藏与申人二而、右割木上積候分ハ、先日北船二坂本迄積越し有之を被相頼、今日当津坂本町鍵や太助方迄積来り候旨、相残ル割木ハ自分之商物二付、所々へ売附候由、尤右新藏方同所舟方喜兵衛殿江其段相断被申候処、舟方へ聞濟積登候艀二ハ印札遣し候筈、先達而百艘方へも掛合置候得共、いまた右印札楯無之故不遣候得共、百艘方被尋候節ハ其段相答候様、喜兵衛殿方御差図も有

之候趣新藏被申之候、右艀二而ハ先頃各々方、御上津之砌市兵衛方掛合申置候筋とハ一向相違いたし候御取計方二而、何共難得其意存候二付、舟方之内御登り合せ有之候ハ、其段得御意度存、金藏、川口の御宿へ尋二遣し候処、折節旦那とも御登り合無之、残念之至二御座候、仍而以書中御達し申候間、猶其御地二而御糺被成、追而始末御申越し可被聞候、右得御意度艀々、以上、

八月十七日

百艘舟年寄

坂本舟方長三郎様

与右衛門様

右之通相認め、同日坂本よつや小四郎へ遣入、

一、右二付、八月十九日比叡辻舟方喜兵衛被参申聞られ候者、此間ハ新藏と申もの艀二而割木積登り候二付、同人へ様子御尋被成候処、私江断置積越候段、新藏申答候趣二付、舟年寄共方へ御手紙被下、依之昨夜寄り合を附、私儀も呼二参罷出初而承り申候為御断参上仕候、全新藏当分逃二偽を申上候事二御座候、尤先頃与右衛門、長三郎杯上津仕候節、丸舟代之外艀舟二而荷物積登り候分ハ、御糺被下度御頼申上置候儀、私へハ沙汰無之、漸昨夜其儀も承知いたし候二付、私舟も今日御書付願上申候、且又南坂本舟方之もの共儀ハ、此度嚴重二取締仕度趣意二候へ共、余り厳敷取計候而ハ、却而彼ノ者共不為之筋出来候而ハ如何二候間、此後少々ノ端もの積越候艀御座候共、右艀二被成置被下候様と、喜兵衛被申候事、但し、

一、干菓子壹袋 凡式匁位

是ハ山門御修覆追々御出来被成、近々御役人様方御引払可被成候由、御用中無滞相勤、御互二大慶致候二付、乍序右御挨拶申入候趣二而、右干菓子持参被致受納いたし置候事、

一、八月十八日辰刻、神出村西落伊三郎艦二而同村善兵衛と申年頃四十才計二相成候もの、こやし積川口堀方出舟いたし、中保町小笠原藏裏先二而はや緒切はまり候二付、折節通舟之艦こき寄取扱ひいたし候内、追々助舟参引上ケ、則観音寺町五兵衛と申もの妹右善兵衛妻二付、五兵衛方へ引取早速養生相加へ、即刻まかり神出村へ引取候由、三人相掛養生いたし居候旨、艦主伊三郎親類観音寺町五兵衛申之候二付、其段口上二而舟方御役所へ年寄次郎左衛門罷出、内堀繁太様へ口上二而御断申上置候、

但し、終養生不叶相果、十九日無滞葬送いたし候趣、申

十九日夕

一、神出村艦主伊三郎、観音寺町五兵衛礼二参ル、

廿日朝

一、酒式升、松本舟方右為挨拶到来致、後刻舟年寄長兵衛被参候

二付、翌日右同人方へ忠介礼二参り置候、

八月十三日積海津行孫右衛門船、

池徳揚り之内木綿五つ、立かへ包巻

米平揚り之内木綿三拾反

右浪濡仕候趣、加、五方へ申来、其書面之末切解不申候故中濡之程
暁与相知レ不申候へ共、相知らせ申、客方へも断可申段申来、米平
方方も同様之書面二付、船主方連名二而頼状遣入、左之通、

以手紙申上候、時分柄秋冷相増候所、弥御安康二御座被成奉賀候、
然者此間私船参り候所、荷物浪濡仕候段か、屋五郎兵衛殿方承知致、
何角御世話之段忝奉存候、何分此上御客方へも宜敷御断頼申上候、
以上、

八月廿一日

池田徳右衛門様

米屋平兵衛様

船屋孫右衛門

一、八月廿一日暮過頃、嶋関吾妻川端二有之候柳之木枝二首く、り居候
段、番所守新兵衛為相知候付、与次兵衛、太郎兵衛早束罷越見届ケ
候処、此節渋川屋六兵衛方へ登り居候、江州栗太郡小柿村百性庄左
衛門と申もの、由二相見へ、勿論間も無之哉ウゴキ候様二被存二
付、早束右六兵衛方へ申遣候処、則ツレノ衆兩人六兵衛同道二而被
見届候処、弥右庄左衛門二紛無之候故、早束引おろし医師辻村悦斎老
寺岡清藏丈助兩人ヲ呼二遣し、様々療治被致候へとも、終二不行届二
付、同夜四つ時絶命いたし候付、御目付高橋角左衛門殿へ相届ケ候処、
尤中間方与次兵衛、平藏町年寄兼帯太郎兵衛、是八宿渋六居町二付、
同道二而、夜も更候事故明朝之事二可致旨二付、翌廿二日与次兵衛
与兵衛、宿渋川屋六兵衛、町役共連印二而相届ケ候処、早束檢使御
出被成御改之上口書差出し、同日日暮過二落着いたし、死骸ハ小柿
へ引取被申候事、但檢使吟味は嶋関油屋作兵衛座敷二而相濟、口書
ハ御役所ニおゐて御認被成候事、

死人 小柿 百性庄左衛門

年五十一

同宿ツレノ衆

忠次郎

与三右衛門

右庄左衛門従弟久八

年寄七右衛門

右村惣代年寄

七右衛門

御代官様御上京二而七つ過時御歸館被成候事、

石丸三平様、福永久次右衛門様被仰候ハ、口書之通相違無之哉、左候ハ、願之通死骸之義勝手ニ引取可申候、尤御代官直々被仰渡候筈ニ候へ共、御用多候二付、此方共方申聞候間、此段承知可致被仰渡候、

元々 目付

石丸へ銀壹両 福永銀一両 高橋へ金三百足

同心 掛り町代 町代

川嶋へ金貳百足 堀へ金三百足 遠藤へ銀一両

惣年寄

矢嶋へ銀一両 町番老人三百文 供廻り三人貳百文つゝ、

筆工太七へ貳朱 筆工 医師

すゞ喜へ三匁 辻村へ金貳百足

医師 御目付

寺岡へ三匁 岡本 銀壹両 つゝ、吟介茶代三百文

多部

番所守

新兵衛貳朱 小歩 使女五百文

金貳両三歩

三十一匁八分

銀三拾匁部 右ハ 郷方 組合札

錢壹匁六匁

元々 検使 平蔵町

福永久治右衛門様 高橋角左衛門様金百足

石丸三平様 銀三匁つゝ、 川嶋文左衛門様貳朱

御目付非番

多部作馬(佐久間) 岡本へ三匁つゝ、

惣年寄詰合

矢嶋新次郎殿

町代同 三匁つゝ、

遠藤仁右衛門殿

筆工太七三匁

町番

〃 すゞき貳匁

但金棒引

吟助茶代貳百文

金貳歩

銀廿三匁

右ハ中間を礼

せに五百文

市兵衛礼ニ參、

右為挨拶礼と中間へ金五百足持參、郷方へ、

但渋川屋六兵衛付添被參候、

町代付添

堀猪三郎殿貳朱

供三人百文つゝ、

〃 貳百文

但金棒引

吟助茶代貳百文

金貳歩

銀廿三匁

右ハ中間を礼

せに五百文

市兵衛礼ニ參、

右為挨拶礼と中間へ金五百足持參、郷方へ、

但渋川屋六兵衛付添被參候、

一、上組小船太郎兵衛儀、下地貸舟屋仁右衛門を四十八石積壹艘かり受罷有候処、古船二相成用ひかたく候二付、仁右衛門方へ差戻し、代り二堅田与助方を廿石積壹艘、右仁右衛門へのかり分二而、太郎兵衛へハ仁右衛門をかり受遣ひ居候処、仲間表へ右躰之届不申參候二付、当年舟帳下地之通二相認差上置候処、御役所を被仰聞候ハ、右太郎兵衛へ堅田与助を廿石積壹艘かし附置候旨、右与介を書上候然ル処、当浦帳外二相成有之候間、相調可申出旨被仰渡候二付、太郎兵衛并組惣代呼寄せ相糺候処、前条之通下二而のミ込事二而不埒二付、当八月廿三日太郎兵衛、組惣代市兵衛連印一札取置之候事、但し一札ハ上下小船証文入と申袋へ入置、尤委細之儀ハ右一札之文面二而相分り候儀二付爰二略ス、

右一件御役所向ハ当地有姿、廿石積壹艘堅田与介をかり舟と認直し、

段々御断申上御聞濟二相成候事、

覚

一、平太船 壹艘 水主式人乗

右者御藏石垣際江死人流寄有之、御檢使御出二付、右之船差出候様被仰付候間、只今金藏堀へ相廻し可被申候、以上、

午八月廿六日

惣年寄

町代印

百艘年寄中

右書付廿六日暮前到来候二付、即刻小船入江加子差当、嶋ノ関舟大工喜兵衛方を艀壹艘かり、薄縁差入年寄次郎左衛門附添、舟相廻し御注進申上、町代遠藤仁右衛門殿江、内々様子相尋候処、今日御藏番之衆方其段被申出候趣二付、先例等^{御調被候趣}去ル天明二寅年金藏堀内御藏之石垣際ニ死躰流居候節ハ、百艘中間へ取片付被仰付候趣二候へ共、御評儀之上、此度ハ宿場入用ニ可被仰付旨被仰出候、尤京都御支配之節杯の例ハ如何ニ相成候哉と被尋候二付、次郎左衛門答候二ハ、京都御支配之節者いかゞ相成候哉、旧記ニも無之候へ共、右被仰聞候者、天明二寅年并安永七戌年御屋敷表二産子ノ死骸有之節、右兩度之儀ハ御頼二付、取片付仕候段申答置候、則同夜西中刻、為御檢使御藏懸り石丸三平様、町御目附岡本多内様、同御組同心岡田六右衛門様、町代堀猪三郎殿御越、宿場方年寄善右衛門并御藏町、藏橋町年寄、五人組、是ハ近町之事故様子御尋迄ニ御召出被成、尤存当り等無之旨之口書御取被成候事、其外筆工、待番、供廻り、死骸取扱ひの手伝人数等大勢二付、俄ニ御藏町百性弥介江艀壹艘申付、右式艘ニのせ場所へ御出御見分被成候処、日数込候死骸と相見得、惣身白はせ二而うつむきに流居、首、腕も無之様ニ而、障り候ハ、

くだけ可申躰故、取扱ひ不自由ニ難成、殊ニ夜分の事故誠ニ白犬の死居候様成ものニ有之候、右御檢使ハ御役所へ御引被遊、死骸之儀ハ宿場年寄差図ニ而、場所ニ而直ニ古葛籠へ取入、大濱先御印場石垣ノ上へあけ、直様取片付被申候、尤何方へ被葬候哉、其儀承り不申候、

嶋ノ関舟屋喜兵衛方かり舟

一、艀壹艘

四十八文

小舟差加子

一、右加子 とめ、新平

式百文

御藏町艀持

一、艀壹艘

百性弥介

是ハ俄ニ夜分相頼候二付、錢式百文心付遣ス、

但し加子ちんとも

×四百四十八文 中間費二成、

右之通ニ而相濟候、後年心得之ため如此留置候もの也、

覚

一、山駕籠

壹挺

此人足 三人

一、分持

式荷

此人足 式人

一、合羽籠

壹荷

此人足 壹人

一、步棹持

此人足 壹人

右者御代官明後二日曉七つ時大津出立、矢橋迄乗船ニ而、野洲郡北

桜村為検見被罷越日帰候条、書面之人足往返共、御定之賃錢請取之、無差支差出可被申候、此先触無遅滞継送、北桜村二而可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

割印 八月晦日 牧野九郎兵衛印

柴山泰蔵印

百艘

矢橋

草津

人足用意二不及候、守山

北桜村

右宿々

問屋 中

年寄

追而北桜村方例之通守山宿迄迎人足可被差出候、以上、

右御先触八月晦日二御役所方到来いたし候二付、則添状相認め候而

矢橋浦へ小船入より便船二差遣候事、

九月朔日夜八つ時、扇屋関方御乗船有之候事、小船壹艘差出候、則

泊り番七兵衛御乗船之節出迎二参候事、但し加子三人乗り、屋形なし、

豊薄縁計入遣入、

尚々片田浦へ申上候、八幡へハ此書状二御添書被成、早々御達

可被下候、

一筆致啓上候、冷氣相増候処、各々様弥御堅勝二可被成御座、珍重奉存候、誠二先月当津二而御出会之節申談置候通、其以来之諸算用、来ル付替御参会之砌相調可申候、依之当浦方扣へ之分其節書付持参

可致候間、各々様二も御扣へ之分、夫迄之内二書付御取揃置可被下候、

勿論先達而立会相調申置候差引残銀之儀も、其節御渡可被下候、且

又当年付替之節ハ常楽寺一件并橋船等所々掛合方多御座候二付、此

方共相揃罷出候積り二御座候間、各々様二も御揃御参会被下度候、

右御案内旁前以得御意置度、如此御座候、以上、

九月朔日

百艘船年寄

片田浦

八幡浦舟年寄中様

二日朝右片田半七船二遣入、

大津御役所

一、重陽御礼

次郎左衛門 市兵衛

相勤、供弥兵衛

但し七夕同様二付御役方御名前略入、

当月七日、六兵衛船内海行積固メ不日和二付、風呂屋関八幡屋之段

二繋置候処、翌八日初夜時右船定乗加子あか場之水かへ二参候迄ハ

無難二有之、翌九日又々水かへ二参候処、へさきすの口二積置候、かゝ

や五郎兵衛出小木綿壹箇、切解取乱有之趣、舟主六兵衛へ申聞候旨、

六兵衛被申出候二付、早速問屋五郎兵衛へ申達、問屋、舟主、算番

とも三人立会有数相改候処、箇々六拾六反之内嶋三反、白五疋紛失

有之、残り木綿ハ五郎兵衛方へ相渡申候、尤御役所へ御届之儀、今

明日ハ日柄二付、町代部屋詰茂無之候二付、町方御目付高橋様迄申

上置限二取計置候事、

但し右紛失木綿代弁方之儀ハ、^{六兵衛}追而、五郎兵衛相對も の二付、当

時相分り不申候、

此一件手懸り出来候様子ニ相聞へ候ニ付、九月十三日町方、船方兩御役所へ御届申上候、則留書奥ニ記置候、

但し右紛失木綿代弁方之儀ハ、^{六兵衛}追而五郎兵衛相對ものニ付、當時相ふり不申候、

一、当月八日、石山寺より「^(船紙)例之通松たけ忒」拾本到来、

九月十二日 大津

一、書付 御役所

松本浦

同断

貸舟屋仁右衛門

右二通御役所方先方へ差遣し候様申参り候ニ付、持せ遣入、

覚

一、人足老人

右者検見為御用、明十六日明六ツ時大津御役所出立、五条村江罷越候間、書面之人足御定之賃錢請取之、無滞可被差出候、尤船川渡之場所、無差支様可被取計候、此先触早々順達、於五条可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

割印 午九月十五日 牧野九郎兵衛印

柴山泰蔵印

大津方

矢橋迄 渡船

草津

守山

五条

右宿々

問屋中

外ニ五条村始之御書付老通、^メ忒通、

右御先触九月十五日御役所方到来いたし候ニ付、則添状相認メ矢橋浦へ小船入より便船ニ差遣し候事、使弥兵衛

大津

配符 御役所

大津浦始メ

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方ニ而懸改候間、得其意納人印判持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月朔日ハ五日迄持参上納可致候、遅滞致間敷候、此符配令請印早々順達、留り所方可相返候、以上、

大津

九月十五日

御役所

本文之趣貸船屋江も可申聞候、

大津

坂本

比叡辻

苗鹿

雄琴

衣川

本文之趣貸船屋江も可申聞候、

本堅田

同躰方

西ノ切

今堅田

釣獵師

本文之趣貸船屋へも可申聞候、

今堅田

同躰方

本文之趣貸舟屋江も可申聞候、

針江 深溝 藁園 太田 新庄 同北浜 同横江浜 舟木南浜

本文之趣貸舟屋江も可申聞候、

横江 藤江 今在家 下小川 永田 同躰方 大溝 打下 北小松 南小松 北比良 南比良 北船路 木戸、守山 五ヶ浦 大物、荒川 北浜 和迹 南浜 小野

本文之趣貸舟屋へも可申聞候、

安養寺 海老江 延勝寺 東尾上 片山 石川 塩津 岩熊 月出両組 大浦 菅浦 海津 西浜 知内 北新保 中庄 深清水 桂村 貫川 北仰 領家 新保 今津 木津 馬原 森村

早崎

下八木

大浜

本文之趣貸舟屋江も可申聞候、

南浜

本文之趣貸舟屋江も可申聞候、

川道

下坂浜

長沢

右浦々 庄屋

舟年寄

右配符十五日到来二付、即日請印致坂本へ廻入、使坂本新兵衛

松本始メ之配符、同日松本舟年寄へ持せ遣入、使弥兵衛

西御奉行

九月十五日

三浦伊勢守様

坂本方御帰京之節、当御役所へ御立寄被遊候二付、

尾花川まで出迎、孫右衛門、九兵衛、供孫七

乍恐口上書

一、去ル七日、私所持舟二而蒲生郡常楽寺浦行荷物積込、坂本町字風呂屋関二繋置、湖上日和待いたし居候処、翌八日夜水主喜八与申もの宿元二用事有之、四つ時頃方帰宅仕無程右舟へ罷越候処、右荷物之内湊町かゝや五郎兵衛方出、木綿荷壹箇切解有之旨、右喜八方私へ為相知候二付、驚五郎兵衛方へも申遣し俱々見請候得共、紛失木綿数難相分、依之五郎兵衛方荷主方へも申遣候処、木綿数者壹固六十六反之由申越候内、白木綿五疋、嶋木綿三反紛失仕候儀二御座候、全八日夜中暫帰宅仕罷有候内を考、^{居候間合}鷹乱者右荷物切解、右品々盗取候儀与奉存候、尤喜八へも得と相糺候へとも、怪敷存当りも無之旨

申聞候二付、此段御届奉申上候、勿論右之仕合二而、遠方之荷主へも懸合罷有候間、日数相延御届延引相成候儀二付、乍恐此段奉申上候、已上、

午九月十三日

平蔵町上組

舟屋六兵衛印

百艘舟年寄

次郎左衛門印

大津

御役所

右御町方御役所へ差上ル、

一、右訴書之写壹通、町方御目付高橋御氏へ差出相届ル、残り式軒之御目付方へハ口上計二而相届置候、

一、右訴書之写二、

右之通町方御役所へ御届奉申上候二付、尚又此段奉申上候以上と奥書相認、年寄次郎左衛門吉人印形二而、舟方御役所へも届置候事、

口演

一、船御運上銀来月朔日方五日迄無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達留り所方百艘会所へ御返し可被成候、以上、

午九月十六日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清介、太右衛門、源七、五郎八、善兵衛、源六

赤井浦問屋長右衛門方舟賃払遅滞いたし、何れ茂困り罷在候、当年も追々出来時分二候故、前広同所太右衛門殿方先方へ掛合被呉候様以書状申遣入所、左之通、以手紙得御意候、秋冷弥増御座候処、御安康可被成御座、珍重奉存候、

然ハ次第出米之時分ニ趣御多用可有之与奉察候、夫ニ付御地長右衛門殿方舟賃之義及延引、何れ茂迷惑仕候、当年も追々出米之時分ニ差向イ候間、右躰舟賃延引ニおよび不申候様、乍御面働各々様より長右衛門殿方へ御相对被成置被下度、御同所之事故各々様迄前広通達いたし置候、先ハ右之段得御意度如此御座候、草々、以上、

百艘舟年寄

十月二日

堅田浦舟年寄

赤井問屋多右衛門殿

当十月白銀屋六助殿、舟会所へ被参塩津行丸綿出懸ケ有之、右出揃次第地舟壹艘為積呉候様、尤才領附急キ荷物と申二而ハ無之故、増加子賃等出方無御座候間、常躰之通加子式人ニ而差立呉候様被申間候ニ付、中ケ間申談候而、跡方御返事可申入旨孫右衛門方申置候六助被帰候上跡二而一同申談候処、忠介を以及返事候趣ハ此節有合候舟も無数此節舟切二有之、有合候舟も無数殊ニ遠方不案内之湊へ運送之儀者銘々きらい迷惑筋ニ候へ共候故、何卒乗前積二而被遣候様いたし度ハ存候へ共、左様勝手ケ間敷返事も難相成、尤まし加子賃不被差出軒壹艘軒固メと申例無之譬ひ候間、平荷同様ニ而ハ加子賃被差出候とも海津行並二而ハ難請合積合二而被遣候歟、是悲非共吉艘固メニ被成度候ハ、加子まし賃可被差出、是以海津行並少々の壹貫五百文ニ而ハ難調候間、大がいの違ひニ候ハ、のりまい積ニ被成候様致度、前段申述候通冬気ニ向ひ、不知案内成地舟差下候儀ハ御互ニ不心能存候事ニ付、右申談候様一同方申付候ニ付罷越候旨忠助申述候処、折節六助殿留主故、手代長兵衛申候ハ、仰之趣六介へ申聞、猶又否可申参旨申之二付、忠助儀罷歸り申候、其後六介殿被参、次郎左衛門逢候処、弥別舟一艘立呉候様いたし度、尤加子まし賃何程ニ而御座候哉と被申候ニ付、委細此間忠介を以申入候通之

儀故、加子賃何程過分御増被成候而も、相好積候ものハ此節無之故、當時有合之舟鬪取二而申付、為積候儀二而甚迷惑ニ存候へ共、渡世方之儀ニ勝手筋も難申、勿論過分之まし賃も申兼候間、式貫文被差出候様、しかし乍此上今一応客方へ御引合被成のりまい積ニ相成候様、御働可被下旨申談候処、被致承知被帰候処、亦々十月十日陸介殿被参、何卒式貫文差出可申間何分舟立呉候様被申候ニ付、孫右衛門、忠介方猶又かけ合候ハ、是迄外問屋方へ出候海津行地舟荷前之積品、久々地舟立不申、無扼節者売荷と名附、壹駄十八文つゝ中間方差出、入舟ニ被積下候儀も有之候へハ、此度貴家綿荷も右同様了簡被御附可申、幸塩津舟参合せ有之間、其余ハ御相談被成、御積せ被成可然と申候へ共、右式貫文まし賃之儀ハ、先達而客方へもかけ合承知被致候へ共、其余ハ出方無之間、式貫文の打銀ニ而、如何様とも取計ニ預り度と達而被申聞候ニ付、中間方塩津舟呼二遣し、直相談ヲ以壹駄廿六文つゝ二相極メ塩津舟式艘二積下し申候、

一、丸綿合八十八本 但し三本ニ付四匁三分つゝ、

此舟ちん百廿六匁分三り式も、中間へ受取、

内、錢式貫三百八拾文、塩津舟式艘へ渡ス、

但當節下り積壹艘分銀高百三十五匁固メ也、然ル処右百廿六匁分三り式も差引八匁八分六り八も不足之分、右六介方別段受取可申筈之処、其節かけ合落ニ相成、跡方申遣候儀もいかゝニ付、此度之儀ハ其尽ニ差置候へ共、以来差障ニ相成候義難計故、右之入割申述以来例ニ不被致様、猶又忠助差遣し申入置候事、

一、大溝蔵一件ニ付十月廿二日夜、堀氏江於当会所ニかけ合候事、但立会之名前、与兵衛、次郎左衛門、市兵衛、太郎兵衛、六兵衛、孫右

衛門~~六~~六人、

一、先建而六兵衛船積荷之内紛失木綿之一件二付、十月廿日六兵衛并同人方舟頭喜八、忠兵衛并同人方舟頭喜八、右之もの共石橋町牢屋鋪へ御召出二付、年寄次郎左衛門付添罷出候処、夫々口書印形御取被成候上、左之通被仰渡候、

他参留メ 六兵衛方抱舟頭 喜八

遠方留メ 六兵衛

同 忠兵衛

同 右忠兵衛方抱船頭 喜八

×

右一件翌未四月十三日相濟候二付、委細翌未留帳二相記有之、

覚

一、仲間之銘々持船二積請候荷物并勢田泊り廻り船二積受候分共、紛失荷有之節是迄者右入用出方之無差別候処、此度相談之上相改、以来紛失荷有之節、船主、荷主相對濟二相成候分ハ、荷品代之弁金并諸入用共其船主限り二可致之候得共、其仕宜ニ寄仲間御訴申上候歟、亦者表向露頭仕被召出、御吟味等二相成り、仲間懸りニ有之候分ハ、紛失荷品代、弁金ハ何程二而も其船主方出之、其余之諸入用者、仲間入用二而相賄可申事、尤御役所并御役人中様方御尋筋、御糺筋御座候而も仲間年寄不及付添、其身分計歟又者居町懸りニ候得者諸入用仲間方不差出候事、
右之趣無相違様可取計事、

寛政十年

三郎兵衛(印)

午十月

与治兵衛(印)

治郎左衛門(印)

市兵衛(印)

十兵衛(印)

六兵衛(印)

太郎兵衛(印)

孫右衛門(印)

忠助(印)

九兵衛

喜三郎(印)

勘三郎(印)

一、当冬旱水二付^{上ノ番}矢船^{上ノ番}矢嶋関二而難為乗故、是迄左様之節の振合を以、上下組小舟遣之もの共へも申聞、十月十三日方小舟入二而為乗候処、此節渡舟方一向淋敷候上二、右上ノ番船入交^{のせ候儀二付上下組かた舟も為遣不申処}乗せ候而ハ日々上番船式艘、下ノ番船壹艘遣之、猶又日ニ寄空泊り船壹艘遣ひ候二付、上下組番船ハ難立、別而日短之時節故、多クなかれ勝二有之、小舟持并加子共一同^(マ)陵兼候間、何卒為救ノ淋敷節ハ上番船壹艘遣ひ二申付呉候様、両組惣代之もの願出候二付、中間二而数席相談致候処、漸此比方小舟入二而上ノ番船のせ、いまた日間も無之儀二候故、取用ひかたく願二候へ共、此節渡舟方淋敷、別而短日之砌故上下番船立兼、多クなかれ候儀相違無之、且上ノ番船小舟入二而のせ候而ハかた舟も不遣候間々難渋之趣及見聞罷有、何れ手先キ之もの共、難儀之段難黙止候二付、乍新規も勘弁を以、十月廿四日方当分一艘遣ひ二申付候^{遣シ候}、尤両組惣代呼寄、誠ニ此度勘弁を以当分壹艘遣ひ二申付遣候へ共、以来例格二ハ不相成、勿論明日二も渡舟方にきハ敷候へハ、式艘遣ひ二申付候間、左様相心得候様入

一、是迄相浚候場所、凡廿間余二候処、此節干水二而四拾間余二も相成候へハ、しからミかけ候而浚候分、定例廿間余二而御用捨被下度、勿論浚方之義二付、乍恐覚召も御座候へハ、乍御苦勞御見分被下、其上御差函を以請負方へ相渡し申度段相願候通、御代官へ御伺之上夕方可参様被仰聞、嶋関二与次兵衛、市兵衛、太郎兵衛待受居申候、一、夕方嶋ノ関へ芝山様御出二付、川筋御覽被成、西側へ川筋付東側二しからミ結候而、先三拾間計取拵候様被仰渡候事、

但川幅五尺、深サ三尺ボリ、川下二而八拾分堀立候二も不及、全躰湖水中迄もしからミ結堀立候覚召二候へとも、成程干水二而余程間数長ク難作筋二も候へハ、先右之趣二而も可宜歟、何分出情いたし急度立候様取計可致様、訳而御利害被仰渡候事、

一、請負清右衛門参居候由二付、一両日之中積書可差出様申聞置、勿論御役所へ直様申上候様被仰置候事、

一、竹三拾駄、杭六百本余御手当有之候へハ、定而余り可申候間、其中間へも差遣し可申候、足り不申候ハ、尚又同直段二而可申遣様被仰渡候、

竹一本拾四匁五分

六尺くい一本三十八文也、

一、竹置場所之義、御頼被成候二付、嶋関東六条様御小屋之内へ入置候様相頼、此段申上ル、即夜、芝山様へ年寄市兵衛御挨拶二御門前迄参候、

一、十月廿七日、石原庄三郎様干水二付獅々飛江御内分二而御出被成二付、前日山田仲助様船之義御頼被成候間、小船壹艘、年寄、ふねのやかたにて差遣し申候、御付添福永久次右衛門様、山田仲助様、其外御近習式人、宗八、梅八、メ七人

小船新六加子四丁、新六、徳右衛門、新平、軍洲、船乗場御見立与

次兵衛罷越、朝五つ半時御乗船二而、御機嫌よく御こし被成候事、

一、吾妻川浚手間相知レ候ハ、御訴可申様、芝山様被仰渡置候二付、請負清右衛門、嶋関新兵衛甥長治組合二而為相積候処、九貫文掛り候由申参二付、段々詰合八貫文二而相渡申候、此段十一月二日御役所へ与次兵衛御訴申上候処、則芝山様御聞濟被成候事、但去年ハ六貫文二而御座候処、当年半川浚之事故、夫下直二可相成筈之処、段々相調候処、川丈ケ式拾間定例之処三拾間余有之、其外くい打、しがらミ、竹わり手間、浚もふかく候故、右之趣申之候、川上右浚立獵師町辺迄浚下り之節、清右衛門方一兩人わけ、長次諸共川下嶋ノ関場所堀立候様申渡置候、

来未正月辰十二月迄拾ケ年之間、東海道筋人馬賃、舟賃共式割増被仰付、則矢橋渡舟之儀も同様式割増被仰渡候事、

但委細四割増一件と申別帳二留置爰二略ス、

一、当十一月廿一日、京都御所司代御用人朝比奈氏御子息同丹下様、江戸へ御下り之節、小舟壹艘差出、松本浜右御上乘被成候事、

十一月廿日、当所十兵衛持小三郎船二、赤井浦より淀納米四百六拾三表船積仕、則上乘り四人、抱水主元七、雇おして清七、右六人乗り翌廿一日当所字大浜先へ着船致、右之内元七義者宿元へ返り、残り五人之もの共右船二臥居申候処、夜中二何もの共不知寝入候間合ヲ考、右積米之内川田村納米式表盜取候二付、此段御届ケ奉申上候、写左之通、

乍恐口上書

一、百艘仲間内下堅田町十兵衛船ヲ以、当月廿日淀御蔵納米高四百六拾三表、野洲郡赤井村より当津へ積登り、廿一日夜当所字大浜先キニ掛り船致し居申、船中二ハ抱水主元七并雇水主今堀町清七、上乗り村方之もの四人、都合六人ニ御座候処、同夜元七義者主人十兵衛方へ引取、船二ハ残り五人臥居申、翌朝見請候処、へさきニ而笞ヲ割木ヲ以上ケ置有之候ニ付、不審ニ存吟味致候得共、俵数多義ニ付紛失之義難計、船上ケ仕候処、式表川田村納米之内不足仕候ニ付、右夜中鷹乱もの寝入候間合ヲ考、盜取候義ニ而も可有御座哉ニ奉存候ニ付、御届奉申上候、尤早速御届可申上候、夫々出方へ掛合仕延引ニ相成候ニ付、此段も御断奉申上候、以上、

寛政十年

午十一月廿四日

百艘仲間内

船屋十兵衛印

同仲間年寄

太郎兵衛印

大津

御役所

右ハ町方御役所へ御届ケ奉申上候処、即御当番多部甚助様、岡田六右衛門様御聞濟被置、尚手掛り等も在之候者、早速御訴奉申上候様被仰渡候事、

一、右訴書之写書通、町方御目附高橋様へ差出し相届ル、残式軒之御目附方へハ口上計ニ而相届ケ置候、

一、町方御役所へ奉差上候通、訴書相認め調印いたし、船方御役所へ御届ケ奉申上候処、則船方御掛り内堀様被仰聞候ハ、此度之義ハ右之通聞濟置候間、重而右躰之義在之節ハ、右之届ケ書ニ町方御役所へ御届奉申上候ニ付、尚又此段奉申上候与奥書いたし差上候様被仰渡候間、重而右之趣ニ相心得候事、

一翰啓上仕候、先以寒冷ニ御座候得共、各々様弥御康安ニ可被成御凌珍重奉存候、然ハ山王正遷座も此比迄ニ無滞相濟候、其節於御内陳ニ御祈禱執行之御礼、御供物進上之仕候、御頂戴被成可被下候、右得貴意度以愚礼如斯御座候、恐惶謹言、

霜月廿八日

百艘御仲間様

日吉社松之坊
仙欽書判

追啓

当夏者例月之日限ニ御参詣被成候処、折節御修復中ニ而御神楽も上り不申候、此節ニ而ハ何時ニ而も上申候間、御勝手宜敷節寛々御参詣被成可被下候、其節ハ不相替預御祝儀忝奉存候、以上、
右書状と箱入御神札并□まんちう拾干菓子但書宛位、干菓子代凡三匁位、右十二月三日到来いたし候ニ付、左之返書差遣置候、

貴翰辱拜見仕候、如命甚寒ニ御座候処、益御安全可被遊御座、目出度御儀存奉候、然ハ今般山王御正遷座無御滞相濟、其節於御客殿御執行之御神札、御供物等御差越被成下、難有頂戴可仕候、猶仲間中へ披露仕、追日参上御礼可申上候へ共、先ハ不取敢御請申上度、如此御座候、尤御神札箱書つ返上仕候間、御落手可被成下候、且又去ル五月例之通御社参仕候へ共、其節ハ御修覆中ニ付、御神楽上り不申候、此節ニ而ハ何時ニ而も参詣仕次第御上ケ可被下旨被仰下、忝承知仕候、孰近々参上仕万々可奉得貴意候、恐惶謹言、

十二月四日

松之坊様

百艘舟会所
役人

十二月四日、芦浦観音寺様を、旧例通納豆五十把参り候二付請取書、
左之通、

覚

一、納豆 五十把

右者旧例之通御前を不相替被下置、難有頂戴仕候、以上、

午十二月四日

百艘印

松岡市左衛門様

一、十二月九日、御役所を当所船大工中江、御用書封附老通相達候様被
仰付、則橋本町源助江相渡候、請取書取置也、

十二月大津寒気見舞

七日

与次兵衛、孫右衛門、とも新八
弥兵衛

石原庄三郎様 青首吉掛

石丸三平様

御手付手代

福永久次右衛門様 元々

内藤伍左衛門様 //

芝山泰蔵様

町懸り

内堀繁太様

船方

山田仲助様

勝手方

右ハ南鐮一片つゝ、

此外七里官助様手札計、但年八二者上ケ物有之、

御門内御手代衆手札計、年中上ケ物なし、

左久間正蔵様

小かしら

赤井平六様

高橋角左衛門様

多胡甚助様

御目付

岡本多内様

銀一両つゝ、

北出雲平殿

手札計

西

十二月九日、京都寒気見舞 与次兵衛、孫右衛門、とも弥兵衛

三浦伊勢守様

青くび吉掛

御用人

栗原武左衛門様

富尾武兵衛様

藤井文右衛門様

御取次

曾家元三郎様

永野忠治様

津兼安左衛門様

加藤直左衛門様

白居丹下様

右手札計

東

松下信濃守様

青くび一懸

枚田市之進様

御用人

佐藤八郎次様

柴田伴蔵様

佐伯五郎兵衛様

御取次

坪内逸作様

大久保逸八様

右ハ手札計

にし

三 渡辺甚五左衛門様

三 深谷平左衛門様

古南奥不破伊左衛門様

三 入江吉兵衛様

右ハ南鐐一片つゝ

古 千賀与三右衛門様

三 久下政右衛門様

三 浅賀卯兵衛様

古 上田八蔵様

古 酒井宗助様

三 菊池治左衛門様

古 柏原治部右衛門様

ひかし

二軒 西尾新太郎様

池東南 その嘉右衛門様

同 四方田重丞様

池中西 加納小十郎様

池東南 上田弥右衛門様

池東中 寺田官左衛門様

池北 末吉新五郎様

池中西 森 義左衛門様

池^{池北}中 中川定右衛門様

池東中 同 李左衛門様

池中西 榎橋平蔵様

池北 平尾安左衛門様

古北 喜多尾八郎右衛門様

右ハ手札計

油小路松原上ル所

田内彦助殿 銀三刃

右田内殿方へ参申置候ハ、来正月年頭御礼例之通二日之積りニ上京可致間、乍御世話頼入候、若日限相違之義も御座候ハ、前広ニ為御知被下度頼置候事、

あたらし町御池上ル所

若狭屋八兵衛殿 ひとり一羽

メ

一、廻り新八、当夏以来病氣ニ付長々服薬等致、右薬代等出来兼候趣、^前先以仲間へ段々相願候二付、十二月十四日相談之上銭三貫文合力致遣之申候、

一、矢橋渡舟賃、来未正月辰十二月迄十ヶ年之間式割増取之候様、当十二月十九日石原庄三郎様御役所ニおゐて被仰渡候事、^{右件之}但し委細留帳ニ記置候二付爰ニ略ス、

覚

一、金子 百疋

右ハ当津より御家中并御人足渡海為御挨拶与、御前被下置、慥ニ頂載仕候、以上、

午十二月十九日

百艘印

芦浦観音寺様御内

松岡市左衛門様

一、吾妻川浚立出来二付、十二月廿日御代官直々御見分可有之、尤嶋関番所ニて御休足可被成趣二付、前日十九日そうじいたし待受居候処、雪氣ニて天氣不勝延引相成申候、然ル所だんく、月迫ニ而御用繁廿六日町役芝山泰蔵様、同心高田源左衛門様手塚傳十郎様、町代堀猪三郎殿、右之衆中下見分ニ相見へ、冬中八間も無之候付、春ニも相成候ハ、御代官直々御見分も可有之間、夫迄ごもく等捨不申様氣ヲ付可申候旨被申渡、嶋関番所ニ而暫休足有之、相済申候事、右此度浚立候川中ニ、幅三尺計土手道出来候二付、右御代官御直ニ御出可被成迄往来無之様垣いたし可申候、右町々江被仰渡候二付、百艘之分ハ番所地尻之分ハ垣いたし可申候へとも、油屋作兵衛蔵う

しろの方ハ地尻ハ百艘中間地先ニ候へとも、是迄浚場ハ平蔵町之持

分ニ候へハ、如何可致哉と相尋候所、芝山様被仰渡候者、自然此後

石垣つみ出、常地面ニ相成候ハ、中間ないたし置候方よろしく候、

しかし此度ハ町分と入魂いたし、双方可拵旨被仰渡候、

(裏表紙)

七拾三番

百艘

午十二月廿六日

一、錢八貫文

請負清右衛門

右手間代相渡し受取書取置候、

一、四貫七百五十文 杭百廿本、壹本二付三十八文つゝ、

一、六貫百六十文 竹四太壹束 四束壹太 壹貫四百五十文

右二口ハ御役所御用として北浦へ取ニ御遣被成、惣川浚ニ相用ひ

候中、別而貫ひ申候、

八貫文之浚賃者、是迄五、六貫文之処、此度しからミ手間川中も深ク

候故、右高直ニ有之候、

右之通御見分節、与次兵衛、喜三郎兩人罷出相済申候、

一、此度東海道筋式割増被仰付候二付、宿々人馬賃錢、舟賃共書付差越

候様、紀州江戸御勘定之御廻状、十二月廿八日矢橋浦へ到来、即

刻人馬会所へ為持遣、

但し委細割増一件帳ニ記置、爰ニ略ス、

一、金百疋

右ハ朽木様舟積之御祝儀、当午年分不参二付、翌未十二月廿九日升

屋市左衛門殿へ請取候二付、未年留長ニ記有之、

但し初りハ去巳年也、

(印：「百艘」)

三、「万留帳」寛政一二年

(表紙)

巳 寛政拾一年

(別筆)
「七拾四番」

万留帳

未 正月吉日

(表紙見返し)

目録

京御役所御案内方獅々飛、供御瀬御下見
御老中戸田様御引渡御登
御所司代牧野様御登
御老中山門唐崎御巡見
江頭帳付船八幡浦る頼一件
せたろうくい五十到来致候事
東本願寺様湖辺御遊覧御延引諸留
赤井太右衛門舟難舟
松原舟際川先二而難舟
彦根様御鷹場御順二付御尋
彦根様御入用川御座舟小渡

(印:「百艘」)

六兵衛舟紛失荷一件相済之留

朽木様荷物舟積掛合

矢橋舟膳所新堀方人乗せ候事

御茶壺御下向

御蔵南側石垣際死人流寄事

大物新右衛門艀流失廻状

小船入平六舟二而旅人脇差紛失一件

大濱船極印場修覆

船御改一件

御高札場所二脇差壹腰有之御役所へ上候事

永田浦清左衛門掛合事

西御奉行様御死去二付宿鍵左方来状

御所司代御順見御延引諸留

(本文)

于時寛政十一己未正月二日、御礼

石原庄三郎様 金子式百疋、目録台、下ヶ札付

御手附

石丸三平様

御元々 役退役被成候へとも、前方方格別

七里官助様 御世話二相成候故、相勤ル、

元々

福永久治右衛門様

同町掛り

内藤伍左衛門様

御町役

芝山泰藏様

台所勝手方

山田仲助様

舟掛り

内堀繁太様

右七軒金百足宛

小頭

佐久間正藏様

赤井平六様

目附

高橋角左衛門様

多部甚助様

岡本多内様

右十軒銀壹両宛

駅肝煎

吉本弥四郎殿

山本依治郎殿

右八鳥目廿足宛

右八鳥目式百文宛

白崎久太夫様

組屋敷不残、其外内屋敷

右八名札計

歩判式両老歩

銀壹両十

式百文 六

五百文 一

右之通治郎左衛門、市兵衛相勤申候、供平兵衛

正月三日、京都御礼

西

三浦伊勢守様

金子三百足

目録台
下ケ札附

御用人

富尾武兵衛様

曾我元三郎様

加藤直左衛門様

津兼安左衛門様

藤井文右衛門様

永野忠治様

右六軒へ銀壹両宛

東

松下信濃守様

金子三百足

目録台
下ケ札附

御用人

杵田市之進様

佐伯五郎兵衛様

佐藤八郎治様

坪内逸作様

柴田伴藏様

大久保逸八様

右六軒へ銀壹両宛

西公事方

渡邊甚五左衛門様

西尾新太郎様

深谷平左衛門様

真野嘉右衛門様

不破伊左衛門様

四方田重丞様

入江吉兵衛様

加納小十郎様

右九軒へ金百足宛

西公事下

千賀与三右衛門様

寺田官左衛門様

東公事下

久下政右衛門様

末吉新五郎様

浅賀卯兵衛様

森儀左衛門様

上田八藏様

中川定右衛門様

酒井宗助様

中川李左衛門様

菊池治左衛門様

櫛橋平藏様

柏原治部右衛門様

平尾安左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

右十五軒へ銀壹両宛

上町代田内彦助殿、銀貳両

筆工

上町代中へ五百文

奥田九右衛門殿、銀壹両

小番中へ三百文

下町代中へ五百文

東西中番中へ三百文宛

東西御門番へ三百文宛

追分丸屋四郎兵衛へ百文

宿鍵屋佐助へ三百文

山科大津屋孫右衛門へ百文

同 下女中へ貳百文

歩判三両三歩

五百文、貳

銀貳両、壹つ

三百文、六

銀壹両、廿八

貳百文、壹

百文、貳

披露札貳枚

下ヶ札貳枚

差出し貳枚

(貼紙)

一、田内彦助下丁代藤沢傳六、藤村左市右両人、宿鍵屋左助方江被参、私共儀前々ハ御用事等も被仰聞候へ共、近年中絶いたし、此後御用等も御座候へハ、被仰付被下候様、彦助儀も御頼申上候様、是を申候、尤彦助義旧冬、隠居被致候事、

右之通孫右衛門、忠助相勤ル、供弥兵衛、荷持利助

正月四日、初寄合、役人不残出勤致、旧例之通諸帳面勘定相濟候、尤不相替中飯有之候、

七日 惣番積 船頭共江酒、たうふ

十一日、例之通帳かため祝儀、役人不残出勤、朝飯在之、尤四郎兵衛、忠兵衛両人断、

まんちう百 上組小船中 仁右衛門 五兵衛

酒貳升 下組小船中 甚兵衛 忠兵衛

諸白貳升 坂本新兵衛 勝手方取持いたし申也、

酒貳升 関船治兵衛 右同断

諸白三升 尾花川船方両人 するめ貳把

右之通持参有之、上下小船、尾花川共年礼相濟候上、勝手ニおいて酒給ませ申也、

御酒組重 吸ものハ午之具出ス、

朝飯献立十八人前、左之通

鱈 いせ鯉、大こん 汁 ちさ、干かふら

平皿 鳥、しいたけ、人しん、皮牛ぼう、くわい

食 焼もの ぶり

御酒

肴 八寸 かまぼこ、あわび、海老 粕漬

鉢肴 飯たこ

〃 ひたし

ノ

一、例之通朽木様方細炭式俵被下、直川口升屋市左衛門方より届ニ参ル、
受取書遣ス、尤去午歳暮之御祝儀、

正月十五日、芦浦御礼

観音寺様 扇子三本人壹箱献之

但扇箱くり足のし包添

右権僧正様いまた御病氣二付、京都ニ御座被遊、御当住様御幼年ゆへ、
御逢無之旨、片岡氏方御断被仰聞、不相替御酒、御節等被下之候事、

御家中

片岡喜右衛門殿、西川五郎兵衛殿、久松清右衛門殿

右三軒扇子三本人壹箱つゝ、六兵衛、九兵衛相勤、供嘉兵衛

一、正月廿一日、例年之通貴布祢御神酒、朝飯有之、役人不残出勤、

一、二月四日、勢田川筋御下夕見として

西御町御奉行組

村山彦市様

御案内方

柏原宇右衛門様

右御兩人、小舟入会所へ向ケ御出被成候ニ付、早速舟仕立御乗船被成、
御越し被成候、小舟下五兵衛、かこ四人乗り、詰番六兵衛

口上

一、從東御公事方様御用状壹通差進候間、御落手可被成候、尤請取書相

認御遣し可被成候、飛脚賃三百文、此ものへ御渡し可被下候、以上、

若狭屋

未二月六日

太郎兵衛

大津百船(艘力)

舟年寄中様

明七日、獅々飛、供御之瀬御巡見ケ所為下見、御案内方罷越候間、
扇屋関江例之通船壹艘御申付可有之候、以上、

二月六日

西尾新太郎

真野嘉右衛門

四方田重丞

加納小十郎

上田弥右衛門

大津

百艘船年寄中

七日

東御役所御案内方

井上龍右衛門様

深谷半治郎様

森 鉄蔵様

柴田益右衛門様

中川万太郎様

脇山介四郎様

小十郎様御子息

加納平三郎様

御供三人

ノ十人

右之通朝四つ時扇屋関を御乗舟被成候、則為御案内、八丁江弥兵衛遣し置、扇屋関江弥右衛門罷出候、小舟太郎兵衛、加子三人、

二月七日

御老中

戸田采女正様

二月廿四日御登り、当津御泊り、石場迄出迎、六兵衛、九兵衛、供新八

御所司代

牧野備前守様

御登り、二月廿五日当津御泊り、石場迄出迎、孫右衛門、勘三郎、供平兵衛

右御出迎之節、惣年寄兩人、町代伊三郎殿を被申候者、諸仲ケ間一統此方共を披露いたし候間、其御仲ケ間茂、右之通可被相心得、勿論手札二及不申由被申聞候二付、当仲ケ間之義者、是迄勝手二相勤来り候由申之候得共、太田様之節も此方共を披露致候例格二候間、尤勝手二被勤候書物等有之候哉と被申聞候得共、其義者見改参り不申、勝手勤之義者申伝承り居候、則手札等持参致候間、左様二御承知致被下候様申之候所、然者手札ハ御勝手二御出被成、披露者此方共を諸仲ケ間と披露いたし候、左様二御心得可被成被申候得共、差掛り急成義故、其趣二て手札差遣し相勤申候、尤御帳面方江壹枚差出し候所、今壹枚無之候哉と被仰候故、又壹枚御乗物脇之御取次江壹枚差出し相勤申候、以来之為、心得、此段留置候事、

二月廿五日

明三日、戸采女正殿唐崎を坂本筋御巡見二付、右之辺こやし船通船

被致候様船持共へ急度可申付候、尤此廻状昼夜二刻付ヲ以早々相廻シ、留り所を相返可申、以上、

大津

三月二日

御役所

大津始り

和邇北浜村迄

庄屋

年寄

一、三月二日朝、御役所を呼二参り、孫右衛門罷出候処、明三日御老中戸田采女正様唐崎山門為御順見、京都を山越二御越被遊候、尤唐崎を七本柳迄御乗船可被積趣二付、役船差出可申旨、尤御所司代御順見之通二取計可申様、御元へ福永久次右衛門様被仰付、則御召屋形船、此外小船同屋形船、数者大船三艘、小船六艘、艀船壹艘へ九艘二、年寄与治兵衛、市兵衛、肝煎孫右衛門、九兵衛、喜「(兵衛)」付添二、日夜九つ時出船いたし、同七つ半時二唐崎へ着船致、差扣罷有候内、当御役所を御用書参り候者、三日御順見二相違無之候得共、唐崎者見通し二相成、直二坂本江御越被成候二付、御乗船者無之間、役船者勝手二帰船可致趣二付、即刻役船并役人共帰津いたし申候、但委細者御乗船役船帳面二有之候二付、此帳面二者略之、

上巳御礼

一、石原庄三郎様

鳥目百足

木札付

御手附

石丸三平様

御元々

福永久次右衛門様

//

内藤伍左衛門様

同町役

芝山泰蔵様

御隠居

七里官助様

御勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

右七軒鳥目五百文つゝ、

此外御門内御手代衆、組屋敷不残、手札計而相勤候、六兵衛、勘

三郎供

三月六日

御役所方松本浦へ御差紙書通

廻り弥兵衛持参、

覚

一、うくい五拾尾

即刻役人不残之配当、

廻り弥兵衛ニ配らせ候、

右ハせた橋本村舟方役次郎兵衛被致持参、先々ハ当村川筋ニ而獵儀
夥敷有之候ニ付、年々獵儀之品御見舞ニ差上候^{得共}、近年不獵ニ付無
其義候^{此節ニ至}、今年右之うくい余程とれ候ニ付、御見舞迄ニ進上いたし候、
尚又以来も相応獵儀有之節ハ、先々方之通進上可申積ニ候間、受納
いたし呉候様被申、尤此節石山浜と旅人のせ方之儀内論有之、此儀

宝曆年中故障之節、中間方取喰ひ置候ニ付、此度も対談ニ而相濟
不申時ハ、中間へ申出取斗ひニ預り度旨内々頼込有之義ニ付、自然
右一件ニ拘り候挨拶等ニ候ハ、右うくい申受間敷と断申候^前、
申述候通ニ而、全右一件ニ拘り候儀ニ而ハ無之間、受納いたし呉候
様被申聞候ニ付、申請置候事、

一、当三月九日、八まん舟年寄利右衛門被登、兼而御頼申入置候通、江
頭帳付舟数は迄一浦方五艘限ニ御座候^前、当年方常楽寺浦積方四ヶ
浦之廻り積ニ相成候ニ付、八まん浦之舟附込場所無数相成、甚差困
り候間、右江頭浦之儀、十艘附ニいたし呉候様仕度、尤堅田浦へも
申込候^前、六七艘位之儀ハ彼方二も承知之旨ニ被申、其余ハ大津
浦ニ而取究候様被申之候間、何卒八艘附迄ニ被成下度と利右衛門被
申候得共、外ニ相談之筋も有之故、堅田舟年寄上津被致可然と存
書状を以申遣候、留左二記、

以手紙得御意候、漸春暖相催候^前、各々様弥御堅勝可被成御座、
珍重奉存候、然ハ八幡舟年寄利右衛門殿被致上津、江頭附込舟借之
儀御頼ニ御座候、尤荒方各々様へも御示談相濟候上、御登り有之旨
ニ付、当浦ニ而如何様共取究メ呉候様御頼ニ御座候へ共、此方切ニ
相極候段も如何敷、勿論兼而江頭長左衛門一件ニ付、右浦問屋中挨拶
ニ被参置候^前、今以不及返事ニ候故、是以及相談、其上ニ而江頭
問屋、帳屋呼ニ遣し、右之両様共申達候儀可然と奉存、猶其外ニも
序ニ御相談申入度義共差つかひ有之候間、乍御苦勞御一人御登り
可被下候、且八まん利右衛門殿ニも、此節ハ京都へ御出ニ成、来ル
十五六日頃^出津被致^可答^可ニ御座候間、各々様ニも十五日頃方無間違御
登り被下度、相待申候、右得御意度事余、期貴面可申述候、以上、

三月九日

百艘舟年寄

堅田浦

舟年寄中様

一、赤ノ井太右衛門船、在所ノ海津へ釣り鐘積参、右戻り舟之節、当三月十四日、大早手風二逢、彦根領新田村ノ一里斗沖二而船かへり候趣及承候二付、廻り新八二酒五升為持、吉右衛門方へ見廻二遣候処、舟頭兩人共別条無之旨、承り帰り申候、

一、三月十九日、御役所ノ呼ニ参、孫右衛門罷出候処、内堀繁太様被仰候二ハ、近々東本願寺様堅田表へ御越可被成旨二付、御乗船之古格御尋二付、左之通端書相認差上ル、

今般東本願寺御門跡様、当津ノ堅田浦迄御乗船可被遊旨二而、先格御尋二付、左ニ奉申上候、

一、天明三年卯八月十八日、右御門跡様湖辺為御見物御下向可被遊筈二付、御召船壹艘、御供舟壹艘、外ニ小舟等用意仕置候へ共、雨天ニ而御延引ニ相成申候、尤右為御挨拶鳥目十貫文被下之候、且右舟手当方之儀、何れ様ノ被仰渡候儀哉相知レ不申候、

一、同四年四月十八日、和邇迄御下向可被遊筈二而、当津米屋町丸屋勘三郎裏多門ノ御乗船被為遊候処、俄ニ大雷大白雨仕候二付、堅田光徳寺へ御上り被遊、御帰者唐崎迄御ひろい二而、夫ノ船ニ被為召、勘三郎居宅へ無滞御帰着被為有候、

右舟割

御召 大船壹艘 加子十人

付添 舟年寄壹人 気色不勝二付まし加子とも

供壹人

茶かま くと 茶杓 茶袋 橋板

うすへり十枚 とゆ

外ニ御役所ノ御幕、御屏風、御燭台等御差入被遊候、

御供舟 同壹艘 加子六人

茶かま くと 茶袋 茶杓 薄縁十枚 とゆ

✕

台所船 小舟壹艘 加子三人

くと 茶かま 歩行板 茶杓 茶袋 とゆ式枚

✕

御役人中 同壹艘 加子三人

茶かま くと 茶袋 茶杓 薄縁五枚

✕

大小船数合四艘

右ハ当御役所様ノ被仰付、舟差出申候、尤被下もの之儀、留書無御座候へ共、相応之御会釈ハ可有御座儀と奉存候、

一、寛政三亥十一月、堅田へ御下向之節、御召船壹艘ハ堅田舟を借り受、外ニ小舟五艘ハ当浦之船を以相勤申候、尤其節之儀ハ当津門徒中ノ被相頼舟差出候儀二付、右舟ちん、加子賃共ニ而金式歩、銭七貫文、門徒中ノ受取申候、

右之通ニ御座候、以上、

未三月十九日

百艘舟年寄

宛所なし

右之通無印之端書相認、年寄市兵衛持参仕差上候処、内堀様被仰候ニハ、此節本願寺役人当御役所被出、此度御門主堅田表へ被罷越度、同所居初市右衛門儀立入之もの二付、同人方本陣ニ相究メ候、右ニ付門主帰り之節、堅田ノ唐崎迄乗船可被致積二候処、畢竟見物之事二候へハ、最寄の船内々相頼申様致度候へ共、先年御役所ノ御世話

被下候儀も有之二付、其段御請申上候と被申候故、此度も無御滞様

御世話可申旨申聞候処、何分堅田表へ罷越歸津之上、御伺亦々二可出旨

二而被引取候、右之通堅田唐崎迄之乗舟二候へハ、堅田浦へ申付

先二而入魂被致、堅田之船二而送り候とも百艘方二相障候儀ハ有之

間敷と、内堀様被仰候二付、市兵衛答候二ハ、其儀二おゐてハ故障

無御座候へ共、御役所被仰渡候筋二候ハ、私共方へ被仰付被下度、

且又唐崎堅田への御乗船二候へハ、私共舟相勤不申候而ハ規矩難

相立候間、是又御承知成置被下度段申上候処、何れ右本願寺役人歸

津之上相分り可申と被仰候事、

但し右天明四辰年御乗舟之節者、船賃、加子賃として、鳥目十五

貫文、外二舟年寄へ金子百疋御役所被下、則御役所御留書二有

之趣候、此外門徒中あしらい有之候哉と御尋被成候へ共、中間方

二ハ其義留無之故相分り不申段申上候処、猶又此度被仰付候而も、

右躰之御取斗二而不苦候哉、自然仕当テ二引合不申候ハ、無遠

慮可申聞旨結構二被下候二付、市兵衛答候二ハ、平生有之候と申

儀二而ハ無之候故、御役所被仰付候上ハ、如何躰二而も相勤可

申候へ共、何分先格通二被成下候様申上置候、

外二内堀様被仰候二ハ、近々彦根御太主様御登り被遊候二付、定而

其節ハ右御用船数多入着可致之処、右御長屋東西堀へ舟繫候儀ハ何

艘ならひと申急度いたし候、訳合等茂有之儀哉、為心得聞置度と御

尋被成候二付、市兵衛答候二ハ、右二付急度立候書物等無之候へ共、

先々三艘ならひと申伝へ候得共、右申唱のミの事二付、先方二而

ハ如何二心得被居候哉、相知し不申、尤是迄も時二寄四五艘もなら

べ有之、私共差支二相成候へハ、三湊舟会所へ申遣、故障無之様取

計被申候義二御座候、右之通聡と何艘限と申訳無之候へ共、東西と

も堀中見通し、境目二而御座候得共、其御心得二而被成御座被下候

様申上置候事、

一、二月晦日、松原船登候節、際川先二而大北風逢、船打こかし候二付、

尾花川網船早速懸ヶ付候旨、尾花川相知らせ来候二付、肝煎孫右

衛門、同喜三郎、居合候船頭召連、かこ小船二而右場所へ懸付世話

いたし候処、右加子二別条無之、船之義も空船二付、大いたみ無之、

勿論紛失之品もなく、大津御他屋へ参着致候事、

一、酒五升

是ハ右為挨拶、三湊会所へ遣ス、

一、酒壺斗 内五升ハ其節出合候加子共へ遣ス、

するめ三把

是ハ右船持参二付受置、尤尾花川町へハ別段先方挨拶被致候事、

三月廿七日、沖之嶋例之通ます三本到来いたし、貝半へ預ヶ置候事、

四月朔日、例年之通山王御神事役船割符并浦々配符請取、夫々へ相

達し申候、

大津

一、船御割符壺通

百艘江

右御文言例年之通候間、御本紙御箱へ取納置申候、

此外

一、配符 壺箱

松本浦

廻り新八二為持遣ス、

一、同壺箱

山田浦、矢橋浦

廻り新八江渡、

一、同壺箱

今津浦 始

飛脚宿

万屋四郎右衛門へ渡、請

取書取之置、尤ちん錢百

文申遣し、

山王御神事二七本柳にて御代官江御機嫌窺二罷出候浦々、いつも時刻二不相揃、甚不宜儀二付、仲間ヨリ当日罷出候浦方江、遅参不致候様二通達可致様被仰渡候二付、左之通申遣ス、

以手紙得貴意候、弥御勇健二可被成御座珍重奉存候、然者山王御神事之節、七本柳にて御代官様江御機嫌窺二罷出候浦方之内、いつも御請被遊候時刻二不相揃遅参致候浦方茂有之、甚不宜儀二付、当年方相改、何れ茂前刻る七本柳江参り居候様被仰付候、尤表立而被仰渡も有之筈二候処、拙者共無間違通達致候様被仰渡候間、遅参無之様二当前広る御出可被成候、為其以書中如此二御座候、以上、

四月朔日

宛所

百艘

年寄

松本船方へ

吉通

山田 江

吉通

矢橋 本堅田

吉通

西ノ切 釣漁師

式通

矢橋浦始吉通

坂本浦始吉通

一、御廻状箱入

四月五日 四月五日
一、鯉式本 せた橋本村方
一、夕照式升 到来
右八石山村と旅人乗合之儀滞筋有之趣にて、自前仲間方世話二茂いたし呉候様、兼而申参り有之処、不及其儀双方熟段二而、仕来り、道理二相濟、依之右挨拶之ため、右之二品持参いたされ候、
六日
一、小鮒五つ
右八山田あみ方到来
一、三月廿一日、御役所る呼二参り、市兵衛罷出候処、此度東本願寺御門主湖辺為御遊覧、明後廿三日白川越二唐崎江御越、夫片田迄被遊御乗船候間、大屋形大船吉艘并苦葺大船吉艘、台所小船吉艘、年寄吉人付添唐崎へ相廻し置候様被仰渡候、尤御召船江御役所る幕もせん、御屏風、其外二御馳走道具品々御差入被成候、右船前夜方相廻し可申与加子共相揃罷有居内、雨天に相成、御延引之旨申参り、猶又廿六日二御越可被成筈二付、廿五日晚前同様船仕立幸崎江相廻し可申筈之所、是又雨天二而延引二相成候、将又卅日二者弥御越可被成趣二付、廿九日之晚仲間孫右衛門付添、亥刻る出船いたし、唐崎へ相廻し待請候処、其夜七つ半時又候雨降出し、御延引二付、卅日朝五つ時二帰船いたし候、且又近日之内に天氣次第二御越可被遊候所、此節何分天氣不勝候二付、今暫御延引之旨、御役所る被仰聞候、猶又追而御沙汰も有之筈御座候事、

(貼紙)

〔但し〕

| | | | |
|-----|-----|---------|------|
| 御召 | 大屋形 | 武兵衛船 | 加子拾丁 |
| 供船 | 苦葺 | 三郎兵衛船 | 加子六丁 |
| 台所 | 内屋形 | 下組小船平兵衛 | 同三丁 |
| 年寄船 | 苦葺 | 片田町組小船 | 同三丁 |

一、去午九月、六兵衛舟内海行積荷之内、かゝや五郎兵衛方木綿十三反紛失候二付、其節御訴申上置候処、右盗人ハおして稼仕居候伊八と申もの之由二候得共、同人儀出奔いたし行衛知レ不申故、懸り合之もの毎度牢屋敷へ御呼出被成、御糺之上、同十月口書印形御取被成、六兵衛方舟頭喜八儀ハ他参留、主人六兵衛并舟屋忠兵衛、同人方舟頭喜八、右三人ハ遠方留ニ被仰付置候処、今四月十三日御役所へ被召出、御叱ニ而相濟候二付、諸人用左二記、

覚

一、白銀壹両つゝ、御元メ御兩人様へ

御町懸り御兩人様へ

右八百艘名前二而遣ス、

一、南鐮三片つゝ、御目付三軒へ、

外ニ南鐮共、菓子料として高橋様へ遣ス、

右八百艘之内六兵衛、同忠兵衛、同舟年寄名前二而遣ス、

百艘名前二而遣ス、

一、白銀三匁つゝ、

惣年寄老人
町代式人

同

一、鳥目式百文

御足輕惣八殿

同

一、同百文

筆工多七

一、鳥目式百文

大江与五郎へ

是ハ六兵衛、忠兵衛、両度御召之節茶代、

一、同四十八文

牢番七兵衛へ

是ハ右同断、茶代壹度分

一、同百文

筆工料

是ハ最初御訴之節筆料

メ 金壹両一步式朱

銀廿六匁式分

錢六百四十八文

右入用之儀ハ、去午十月相談之上相定、則其節之留帳ニ記有之候通、中間方差出候事、

一、紛失木綿十三反之内、五反ハ相知レ不申、残り八反ハ御下ケ渡被為下、即刻六兵衛持参二而、かゝ屋五郎兵衛へ相渡ス、

一、前書ニ留有之候通、東本願寺御門主様御儀、湖辺御遊覽之筈ニ付三月廿三日、同廿六日、同晦日、右三ヶ度舟数用意仕置候処、三度とも雨天御延引ニ相成候処、今四月十三日御役所方呼二参、市兵衛罷出候処、内堀繁太様被仰候二ハ、先達而ハ東御門跡御越之積二付、毎度舟用意申渡、手当被致置候処、折悪敷其度毎雨天御延引ニ相成、御乗船ハ無之候へ共、先年も右躰舟手当いたし置候処、雨天御延引ニ相成候節、鳥目拾貫文并舟手□金百疋被下之候旧例も有之処、別して此度之儀ハ、三ヶ度も舟手当被致候儀ニ付、其段此方方かけ申達置候処、則左之通被下之相渡候間、慥ニ受取手形差上候様被仰渡、難有段申上、受取歸り候事、

尤最早永御延引ニ相成、是悲至秋ニ候得ハ、御越可被遊筈被仰渡候、

覚

一、金百疋 百艘舟年寄

一、銭拾貫文 水主之者

右者東本願寺 御門跡様辛崎^カ堅田へ可被遊御乗船御積二付、御船用意仕候処、此度ハ御延引ニ相成候得共、右為御手当書面之通被下置難有奉受取候、依之受取書差上申候、以上、

百艘舟年寄

市兵衛印

未四月十三日

御宛名なし、

覚

一、銭拾貫文

右者東本願寺 御門跡様辛崎^カ堅田へ可被遊御乗船御積二御座候処、度々御日限も相延候儀二付、別段為御手当書面之通被下置、難有奉受取候、依之受取書差上申候、以上、

百艘舟年寄

市兵衛印

未四月十三日

是も御宛なし、

右之通銭二口合廿貫文と金子百疋被下候事、尤舟数并舟への入日記其外諸入用等之儀ハ、御役舟帳ニ委留有之ニ付、爰ニ略ス、

覚

井伊掃部頭様御入用

一、川御座船壹艘、但長七間、巾九尺程有之由

右之船大坂ニ而造立、今四月十四日地車ニ而松本浜へ牽越候ニ付、沢山御長屋江相達呉候様、前以小野又三郎殿^カ御申聞有之候処、定法舟賃無之、新物之儀二付、右舟賃銭壹貫文ニ相対いたし、此方の

艀壹艘ニ小舟入の加子四人申付、肝煎忠助并四廻り平兵衛付添、松

本浜へ罷越、同所舟会所へも申達、^{折節}尤雨天南風余程吹候得共、無難

二東御他屋へ着、御付添才領衆へ相渡、尤地車、繩等ハ此方の艀ニ積廻り候ニ付、橋本町八まん屋の関へあけ相渡候、則舟賃壹貫文小野氏^カ受取、左之通受取書認遣置、

覚

一、銭壹貫文

右ハ今日井伊掃部頭様御用^川御座船壹艘申付、松本浜^カ当所御長屋迄相廻し候湖上運賃、書面之通槩ニ受取相済申候、以上、

未四月十四日

百艘舟年寄

小野又三郎殿

一、四月十五日、夕方ニ御役所^カ御差紙壹通、山田浦へ相渡候様被仰付、翌日山田新九郎与申者へ差遣ス、則受取書取之置候、

一、右同断、堅田浦へ相渡し候様被仰付、折節堅田舟居合せ不申候ニ付、木浜仁兵衛舟ニ差遣し候事、

四月廿日、山王御神事、朝^カ氣色不勝伊吹風ふき候得共、船毎無別条七本柳へ着いたし、頓^カ而神輿御渡り前^カ右風追々つ^カのり候ニ付、舟毎二壹兩人つゝまし加子差入、御奉行船始メ三井寺舟其外遊参舟ニ至まで不残無別条夜五つ時^カ四つ時頃迄ニ無別条帰着いたし候処、御名代船壹艘さい川へ懸り候ニ付、有合之加子共召連、中間役人御迎ニ罷越候処、殿様ニハ御駕籠ニ而陸地御歸り被遊候、早速尾花川町^カ大勢欠付被呉、其夜九つ時無恙金藏堀へ帰舟いたし候事、尤委敷ハ右御役船帳ニ記有之、

但し膳所御供船際川ノ南へ相掛り候訳并松本兒船風呂屋ノ関へ歸船候訳等ハ、右御役船帳面ニ記有之、

四月十四日、矢橋金勝屋藤藏船歸り之節、草つ宿^方当駅へ参候郷人足の歸りを右船へのせ歸り申度旨相頼候得共、不差免候処、右人足之もの共と、右船加子之もの馴合、膳所新堀^方のせ歸り候を中間役人孫右衛門并廻り弥兵衛、右場所へいせ参宮のさか迎ニ参居合せ見咎候二付、穩便ニ濟し呉候様加子とも段々相詫、のせ候人もあけ改申候故、出舟為致候旨被申之、是迄ニも折節ニハ右躰之品有之趣ニ付難差被置、依之同廿八日、以手紙矢橋役人呼ニ遣し候処、則舟年寄長七被参談合、次郎左衛門^方申談候ニハ、去ル十四日其浦方之船膳所新堀江人を引参のせ歸り候処へ、此方中間之もの居合せ相咎候^收処、右のせ候人を上ケ穩便ニ間濟呉候様段々加子共歎キ相詫候二付、其節各々方へハ御沙汰ニも不及候申候、尤是迄ニも折節ニハ右様之品有之旨相聞へ候得共、定而各々方ニハ決而御存知無之儀ニ御座候^{此上}へ者、有之間敷と存候、其節も舟并加子共引附置、各々方へ御案内可仕筈ニ候へ共、外浦と違ひ格別ニ存、勿論加子共儀も穩便ニいたし呉候様段々相詫候二付、別段不及御沙汰ニも候、併此後左様成儀候へハ、舟并加子とも留置六ヶ敷御懸ケ合ニ仕候およひ候様相成候段、実以不相好候間、兼而御取締置被下度、為其相招キ候趣申聞置候処、委細相心得候段、兩人共被申之候事、

但右序ニ矢橋村之もの惣別歸り之節、舟賃なしニ仕来り有之、甚混雜^{相分の兼候}差支ニ相成候二付、以来村方之衆ハ鑑札ニ而も相拵へ、分り能キ様被相考、急々右可被申聞旨申遣し置候事、

井伊掃部頭様御鷹場御巡見之由にて、当四月廿六日彦根御発駕、同

夜奥ノ嶋村御泊り、廿七日牧村ニ而ばん鳥狩御座候旨二付、同所迄ハ右御領分之船大小百五六拾艘計も参、御同勢も右准し大人數二候処、ばん狩相濟候上、舟人共ハ多御返し被成候よし同廿七日^{守山宿御泊り}草つ宿御泊被成、廿八日ニハ野洲、栗本之内御順行、品村^方御船ニ而坂本へ御渡り被遊候御積之由ニ付、早舟造の御座船壹艘、大太郎船壹艘、外二三挺船三拾艘計、磯ノウなき小舟十五艘計、御用聞船舟壹艘、舟奉行船舟壹艘、都合凡五拾艘計同日品村へ着船、御待請有之処、御乗船無之、草津宿へ御廻り被遊、^{廿八日七時半時}同夜、当津へ御着、同夜舟頭町小野又三郎殿方ニ御泊り、廿九日朝五つ時御立、升屋町^を通り東へ、御通り懸ケニ御長屋御見覽被成、尤右五拾艘程之舟、廿八日品村出舟、同日八つ時過御長屋へ着、御待請有之故、御長屋^方唐崎迄早舟ノ御座舟ニ御召被成唐崎、夫^方坂本へ御ひろひ、同日暮方又候小野又殿方へ御歸り御泊り被成候、尤舟ハ唐崎^方御返し被成、廿九日八つ時過又候御長屋へ戻り申候、晦日朝五つ時半時御立、濱通りを東へ御越被遊候、但し山田村へ御越被成、名石御覽之旨風聞仕候、依之舟も山田へ参候事、

右上津二付、当中間方^方ハ一切勤なし、

端午節句御札

石原庄三郎様

鳥目百足、木札付也、

御手付

石丸三平様

御元々

福永久治右衛門様

同

内藤伍左衛門様

御町役

芝山泰藏様

七里官助様

御勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

右七軒へ鳥目五拾疋宛、紙札付其外御門内御手代衆、組屋敷不残

手札計二而、治郎左衛門、孫右衛門相勤ル、供新八

一、五月十四日、三井寺を例年之通竹ノ子拾本到来いたし候事、

一、朽木兵庫助様并御家中用江戸廻り荷物舟積之儀、川口町升屋市左衛門殿へうけ合、此節濟方相調、則升一を書付取之相濟候得共、うけ合発端ハ、去ル巳年之儀故、此度升一を取候書付年月去々巳年之分二相認、則御目錄金百疋も右巳年(符カ)を受取候二付、一件之委細ハ、去々巳年留帳并諸御蔵方舟積帳二相記有之候事、

六月三日、御茶壺御下向二付、野洲川御用船配符之御文言、左之通、

覚

一、艀船八艘 幅三尺八寸ろ

四尺

但し吉村二式艘つゝ、

右者御茶壺御下向、来月三日宇治御出立、同日守山宿止宿、翌四日野洲川渡船之御用二候間、丈夫成船致吟味、洗之柄杓壺本宛船毎二入置、三日昼時迄二野洲川渡場江船差出可相勤候、此配符令請印、

昼夜不限早々順達、留り所より可相返候、以上、

御未

五月廿四日 御役所御印

今浜

野田

安治

幸津川

右村々庄屋、船年寄

同断、横関川分

一、艀船五艘 幅三尺八寸ろ

四尺

但吉村二式艘つゝ、

是者横関川渡船之御用御文言、同前二、

牧村

長命寺

船木

南津田

野村

右村々庄屋、船年寄

右式通可相届趣被仰付、則翌廿五日為持遣又、尤飛脚ちん今濱江三百四十八文、牧村へ四百文、又七百四十八文申遣又、

六月六日

一、大坂御目附長崎弥之助様獅々飛御巡見、御役所前を膳所御口江御乗船被遊候二付、扇子屋関上江御出迎、市兵衛、孫右衛門、供新八

一、当六月九日、朝方金蔵堀内御蔵石垣蔵橋町 御蔵町ノ際地境見通し、御蔵南側石垣

際方凡小一間計離水中二男死骸流寄有之処、同日九つ時過、右御檢使有之、入用二候間、艀式艘差越候様町代部や方申参候二付、川口弥藏、木や作介両家二而艀式艘かり廻り、加兵衛外二加子代り蔵橋町小兵衛と申もの雇ひ遣候、猶又跡方肝煎役孫右衛門、町代部や迄御挨拶二参置候、

但し重而右様之儀二而艀申参候ハ、見計ヲ以加子差添、為御用伺と年寄老人付添、勿論艀へ薄縁入遣し可申事、尤其外中間二おゐてハ一切懸り無之事、

一、石原庄三郎様御儀、当四月下旬頃方之御発病二而被為人追々相重り、京都医師福井、荻野毎度御屋敷へ御出有之候二付、右為御伺と、治郎左衛門、孫右衛門兩人、六月十日御玄閑迄御伺申上候、

但し人馬会所役人、米会所役人等も先頃御伺二被罷出、上ケ物等被差上候処、御請無之由承り候二付、舟方御懸り役内堀様迄内窺仕候処、上ケもの之儀ハ堅ク御差留被成候二付、不及其儀二申上計二而相勤候事、尤此節二而ハ大方御全快二付、京都右御醫師方も最早御出無之、段々御本腹^(復)之趣、内堀様方被仰聞候、

六月十一日夕、舟屋小兵衛殿後家おみつ殿、御子息由兵衛殿御同道二而当会所へ御入来被成被仰候ハ、忰由兵衛義是迄召連御挨拶可申上筈之所、奉公之身分二付無其儀、然れとも余り御無沙汰二およひ候故、今晚右御断旁召連参上仕候、以来小兵衛同様二思召被下度自然私露命致候ハ、舟株之義忰へ相譲り可申之積り二御座候与相頼被帰候事、右二付酒式升持参被致候二付受書之事、

御役所方御配符之写

例年之通湖上船増減相改帳面二記、来月朔日より十日迄二可致持集候、一、昨午年之儀、浦方二方貸船混乱いたし候間、当末年之儀者、借り主并貸船屋共、入念相改船每貸借符合いたし候様可書出候、右之趣得其意、此配符致請印、無遲滞早々順達、留り所方可相返候、以上、

未六月十五日

大津

御役所御印

大津始長沢迄、坂本新兵衛へ渡、

一、東浦へ之御配符箱有之、十六日松本浦へ持せ遣ス、使新八

口演

一、貸船増減相改帳面二記、来月朔日方十日迄之内二上納可被致候、

一、昨午年之儀、浦方二より貸船混乱いたし候間、当末年之儀者借り主并貸船屋共入念相改、船每貸借符合致候様可書出趣被仰渡候二付、別段得御意候、尤此廻状早々順達、留り所方百艘会所へ御返し可被成候、以上、

未六月十六日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、源七、五郎八、善兵衛、源六

覚

一、小艀船壹艘

滋賀郡大物村

新右衛門

右之船書面大物村船入二繫置候処、当正月八日夜大風二而吹流シ候二付、其以来種々相尋候へとも、不相知旨申出候間、浦限り致吟味、見当り次第新右衛門へ及通達二船可相渡候、此廻状早々順達、留り所方追而可相返候、以上、

未六月十八日

大津
御役所御印

東浦松本始伊庭迄

松本村へ新八持せ遣入、

一、六月十九日、園城寺政所より暑中見舞として素麵貳拾把到来、

六月廿二日、当所暑氣御伺

石原庄三郎様

素麵三拾把、白台、包のし

乍御手附

御町役御元々

石丸三平様

御元々

福永久次右衛門様

同

内藤伍左衛門様

御町やく

芝山泰蔵様

舟方

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

右六軒へ素麵廿把つゝ、包のし添

御組頭

佐久間正蔵様

同

赤井平六様

御目附

高橋角左衛門様

同

多部甚助様

同

岡本多内様

右五軒へ素麵拾五把つゝ、包のし添

右之外御門内手代衆、御組屋敷不残、北出雲平殿へ手札計二而相勤候、
市兵衛、九兵衛、供新八

未六月廿日、下組平六船ヲ矢橋藤蔵のせ口ニかり遣イ、人数四十人
余乗せ、同日九つ過時小船入江着いたし、人数茂不残上り切候後、
右乗り合之内大坂薩摩堀東之町伝法屋庄兵衛内林兵衛と申候仁、途
中より船端江立戻り、脇差壹腰船ニ無之哉と被申候二付、船中相改
候処、船ニハ無之、勿論乗り合人数ハ先達而船上り之事二付、いた
しかた無之段申聞置、林兵衛義ハ被歸候事、

小船入番所詰役人勘三郎、廻り平兵衛

矢橋浦かこ半兵衛、八助

大津平六船かこ四郎兵衛、又兵衛

右林兵衛ふし見表を被差越候写

益御壮健可被成御座、珍重奉存候、しかれハ今日ハ段々御世話忝奉
存候、然ル処、相知レ不申候、則別紙ニいろ書相認申上候間、御吟
味可被下候、此壹腰ハ少々わけ有品ニ御座候へハ、如何様成共せん
儀仕候間、此段御勘弁可被下候、若相知レ不申候時、又々御苦勞ニ
も相成義御座候、左様御承知可被下候、何卒御面倒二候へ共、有無
之御返事可被下之、奉待入候、まつハ右御願申上度、如此御座候、

以上、

六月廿一日

伝法屋

庄兵衛

林兵衛

船場御役所

一、脇差一腰、柄糸黒さめ白、目貫赤胴獅子、陰扇ノ地紙かさねすかし、切羽杓枚、金きせ、はゞき銅ニ而杓枚、銘越中守包国さや黒

右之通被申越、全船頭江うたかい掛ケ候心底と相見江、其儘ニも差置かたく、依之矢橋船年寄茂平ニ此方仲間年寄共立合、双方之かこ四人共相糺候処子細無之候ニ付、左之通返書差遣入、

去ル廿一日、伏見宿より御差出之御紙面、翌廿二日夕方相達、致拜見候処、御紛失御腰之もの色書杓枚御差越被成、慥致承知候、然ハ右一腰ハ沢ケ合御座候品ニ而、如何様共御せん儀可被成由ニ付、我等共ニ乍此上勘弁仕候様、弥相知レ不申時ハ、思召御座候趣被仰越、委細致承知候、此儀於我等共ニも、甚以氣之毒ニ存候、何卒早々相知レ候様仕度存罷在候へ共、其節御見聞被及候通、船中ニハ相残り無之、勿論乗り合人ハ不残揚り切候跡辺之事故、今更味吟之手掛りも無御座候、尤矢橋浦方之出船ニて、当方より之乗せ前ニ而無之候ニ付、大津船方江引受御対談可仕筋ハ無之儀ニ候へ共、当津江着船之上被仰聞候故障筋ニ付、取敢致御世話候迄之義ニ御座候、此度別紙ニ色書被進候ニ付、御状并色書共則矢橋浦江相達シ、両浦申談しかこ共儀も得と相糺シ候処、疑敷儀も無之、然ル上ハ自分共手先ニ而僉儀之手懸り無御座候ニ付、其筋々江御訴申上置候間、自然盜取候もの有之被捕候而御沙汰向御座候節ハ、早速御案内可申入候、勿

論此方共之義も船場其外等平生氣ヲ付罷在、御書付通り之腰之もの帶し候者見及ヒ候ハ、早速取計候積り御座候間、左様思召可被下候、右之仕合ニ候へハ、此後如何躰被仰下候而茂別段いたし方無之儀ニ御座候間、此段も御承知置可被下候、乍然此後御掛ケ合筋有之候ハ、矢橋浦船方江可被仰聞候、依之両浦船方連名御報申入候、以上、

六月廿五日

矢橋浦

船年寄

大津浦

船年寄

伝法屋庄兵衛様

御内林兵衛様

右返書相認、未不差出内ニ、又々大坂表方追状被差越候へ共、同趣意之書面ニ付、別段返書不及、尤其段先返書ニ端書ニ差込遣入、右一件船方御役所江届書写左之通、尤おもに矢橋方掛り之義ニ付、町方御役所并御目附衆江ハ別段届ニ不及候、

乍恐口上書

去ル九日、矢橋浦藤藏船ニ乗合人数四十人余乗せ登り仕、乗り合人数不残船方揚り切候迄右乗り合之内大坂薩摩堀東之町傳法屋庄兵衛内林兵衛と申仁彦人、途中方船場江立戻り、差用脇差一腰船ニわすれ置候旨被申聞候ニ付、かこ共立云船中吟味仕候処、船ニハ残り無之、勿論かこ共義ハ私共得と相糺候処、疑敷筋一切無御座候ニ付、自然乗り合内之もの船揚り候節取逃候段も難計奉存候へ共、前書奉申上候通、乗り合之人數ハ不残船方揚り、所々江散乱いたし候跡ニ候へハ、猶伏見迄之道中筋氣ヲ附被帰候様申談し置候処、弥以相知レ不申候趣、以書中申越候ニ付、則脇差拵方品書別紙ニ相認、此段御届奉申上候、以上、

未六月廿四日

矢橋浦船年寄

茂平次

百艘船年寄

市兵衛

大津

御役所

覚

一、脇差一腰

鞆糸黒 ^(柄方) さめ白 目貫赤銅獅子 鰐扇ノ地紙かさね

すかし切羽金きせ はゝき銅二而壹枚 銘越中守包国 さや黒

右之通御座候、以上、

右ハ御役所江届書、右大坂方之来状式通、御役所届書并下書、以上

六通矢橋渡海一件之引出し江入置、

六月十九日、京都東西御屋敷暑中御窺

西

三浦伊勢守様

金貳百疋

御用人

御取次

留尾武兵衛様

曾我元三郎様

藤井文左衛門様

津兼安左衛門様

清水新兵衛様

右ハ名札計

東

松下信濃守様

金貳百疋

御用人

御取次

杉田市之進様

佐伯五郎兵衛様

佐藤八郎次様

坪内逸作様

柴田伴藏様

大久保逸八様

右ハ名札計

西公事方

渡邊甚五右衛門様

西尾新太郎様

深谷平左衛門様

真野嘉右衛門様

不破伊左衛門様

四方田重丞様

入江吉兵衛様

加納小十郎様

右九軒銀壹両宛

上田弥右衛門様

西公事方下

千賀与三右衛門様

東公事下

久下政右衛門様

寺田官左衛門様

浅賀卯兵衛様

末吉新五郎様

上田八藏様

森儀左衛門様

酒井宗助様

中川定右衛門様

菊地治左衛門様

同 杢橋平藏様

柏原治部右衛門様

平尾安左衛門様

右ハ手札計

若狭屋八兵衛殿

差鯖式さし

田内彦助殿

白銀三匁

右之通次郎左衛門、孫右衛門相勤ル、供嘉平

七夕御礼

石原庄三郎様江

青さし鳥目百疋、木札付

御手附

石丸三平様

御元

福永久次右衛門様

内藤五左衛門様

御町役

芝山泰藏様

舟方

内堀繁太様

御用人

山田仲助様

乍御無役任例

七里官助様

右七軒へ鳥目五拾疋つゝ、わらさし、紙札附

右之外御門内御手代衆、御組屋敷不残、并北出雲平殿江八手札計二而勤ル、市兵衛、孫右衛門、供新八

覚

一、金子五百疋

一、銀子三枚

一、同 壹枚

右者從御本山被下置、慥受取申候、以上、

寛政十一年

未七月十一日

御講中

釜屋藤兵衛殿

大浜船御極印場修覆入用覚

一、栗壹丈丸太貳本 内壹本ハ行馬垣東角ノ柱

壹本ハ控柱ニ成

代五匁 壹本ニ付二匁五分つゝ

一、アテ檜貳間丸太三本 是ハ貳つ切ニ致行馬垣柱ニ用申候、

代拾貳匁九分 壹本ニ付四匁三分宛

一、同六尺丸太壹本 是ハ柱根掛繼

代貳匁 台敷ニ足し二用ひ申候

×拾九匁九分

古木屋久兵衛

一、釘四寸壹本 代三分五厘^{三拾五文} 是控柱打付

同大小拾抱 代九十文 其外打付もの

×代百廿拾文 伊庭屋久兵衛

七月五日ハ同十日迄

一、大工手間五人半 壹人四匁五分宛

此代廿四匁七分五厘

手伝働壹人 是ハ控柱ほり込其外小遣ひ

此代百六十四文

×廿四匁七分五厘

百六十四文

一、手伝拾三人 壹人百六十四文宛

此代貳貫百六十四文

一、同小休酒手

代三百廿四文

×貳貫四百八十八文

惣×銀四十四匁六歩五厘

錢貳貫七百八十五文

右之通二御座候、

未七月廿一日

百艘

右書付御役所へ巳ノ刻与兵衛持参

大浜御印場竹垣入用之覚

式一、五百拾四文 本四寸竹拾九本

壹本三拾文つゝ

但末竹拾九本差戻し申候二付、七十六文引残如此、

三二、百十六文 次四寸竹四本

壹本廿八文つゝ

×六百三十文 竹之五兵衛二而買申候、

一一、八匁八分 栗壹丈丸太 四本

壹本式匁式分つゝ、木屋又左衛門二而買申候、

×

五二、三百三十二文 手伝働式人 鱈之市兵衛

一、四十八文 小休酒手代

四一、七十式文 藁縄

×銀八匁八分

壹貫八十六文

右之通御座候、

未七月廿六日

百艘

右書付御役所へ差上ル、

当地八朔御礼

石原庄三郎様

金子式百足

元×

石丸三平様

福永久治右衛門様

内藤伍左衛門様

町役

柴山泰蔵様

勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

七里官助様

右金百足宛

小頭

佐久間正藏様

目付

赤井平六様

矢嶋藤五郎殿

高橋角左衛門様

堀猪三郎殿

多胡甚助様

遠藤仁右衛門殿

岡本多内様

船方下

北出雲平殿 右八白銀一両宛

肝煎

御門吟助殿

吉本弥四郎殿

内義

式百文

五百文

当年八役方差支有之、遠慮被致休役二付不相勤候、追而祝儀可遣候事、

小野又三郎殿

山本倭次郎殿

若党 宗八殿

右ハ貳百文つゝ

足輕 貳百文

御蔵番三人

小遣ひ 梅八

白崎久太夫殿

宇八貳百文

組やしき同心殿

其外御手代衆

右ハ手札計

右之通与次兵衛、六兵衛、とも新八

歩貳兩一步 錢五百文一

銀一十ヲ 々貳百文六

京都八朔御礼

西御奉行

三浦伊勢守様

御用人

栗原武左衛門様

富尾武兵衛様

藤井文右衛門様

御取次

曾我元三郎様

永野忠治様

後藤佐七郎様

清水新兵衛様

金子三百疋 目録台
下ケ札付

右七軒銀壹兩宛

東御奉行

松下信濃守様

御用人

枚田市之進様

佐藤八郎二様

柴田伴蔵様

御取次

佐伯五郎兵衛様

坪内逸作様

名倉平蔵様

金子三百疋 目録台
下ケ札付

小笹才司様

右七軒へ銀壹兩つゝ

西御公事方

渡邊甚五左衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

右九軒へ金百疋宛

西御公事下

千賀与三右衛門様

久下政右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八蔵様

酒井宗助様

菊池治左衛門様

柏原治部右衛門様

右拾五軒へ銀壹兩宛

上町代

田内彦助殿

上町代中へ

小番中へ

東西中番中へ

追分丸屋四郎兵衛

山科大津屋孫右衛門

銀貳匁

五百文

三百文

三百文宛

百文宛

東御公事方

西尾新太郎様

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

加納小十郎様

上田弥右衛門様

東御公事下

寺田官左衛門様

米吉新五郎様

森儀左衛門様

中川定右衛門様

中川奎左衛門様

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

筆工

奥田九右衛門殿

下町代中江

東西御門番へ

宿鍵屋佐助へ

同下女中へ

銀壹兩

五百文

三百文宛

三百文

貳百文

田内下町代

上同断

藤沢傳六殿

式百文

藤村佐市殿

式百文

×金三両二歩

五百文式つ

銀式両壹つ

三百文六つ

銀壹両三十

式百文三つ

百文式つ

披露札式枚、下ヶ札式枚、差出式枚

右之通孫右衛門、九兵衛相勤ル、供弥兵衛、荷持和助

矢橋浦へ差遣し候書面写

以手紙申上候、秋暑之砌、弥御安康御勤役可被成奉賀候、然ハ昨九つ時過、御地茂兵衛殿御舟加子久治と申者当地方歸船之節、乗人壹人引連レ參、此方浜役之者へ矢橋浦切手相見せ候処、紛敷切手二付乗せ間敷旨申聞候処、右加子久治不法之儀申掛、浜役之もの手込メ二いたし、理不尽ニ乗せ歸り候段、何共不得其意、右躰之儀打捨置候而ハ外之儀とハ違ひ、此方浜方後々差支ニも相成候二付、其儘ニ難差置、態々以手紙得御意候間、於其御地ニ御調被下、急々貴答可被仰下候、品ニより御訴も可申上儀ニ候へ共、御地之儀ニ御座候へハ、先以書中右御尋旁々如斯、前々貴面可得御意候、已上、

八月五日

百艘船年寄

矢橋浦

船年寄中様

矢橋方右返書、左之通、

御手紙被下忝致拜見候、如仰秋暑之節、弥御壮栄可被成御勤役奉珍賀候、然ハ一昨日当浦茂兵衛殿船加子久治歸り船之節、当村七郎兵衛京行被致、則鑑札遣し申候、尤京都親類内病人有之、定而歸り被

申候節、口書等茂延引仕事も御座候、貴浦浜役人中右鑑札御糺も無之候内、久次其儘ニ乗戻り候儀、甚以相濟不申、依之右加子兩人とも昨日方差留置申候、右今般迄如斯御座候、以上、

矢橋浦

八月六日

舟年寄

百艘

御年寄中様

右返書從矢橋舟宿小船入茶屋平六代四郎兵衛、小船入加子留之助、矢橋加子中惣代兩人、段々相託候二付、八月十三日相為濟遣し候二付、左之通書状差遣ス、

以手紙得御意候、秋冷相催候処、各々様弥御安康御勤役可被成、奉珍賀候、然ハ御地加子久治不法之儀申、理不尽之乗歸り候義、全心得違仕候趣、段々挨拶人ヲ以相託候二付、当所之儀ハ聞濟置候二付、右久治舟持御差留被置候儀、此上御勘弁ヲ以相濟之儀ニ御座候ハ、宜御取計被成下度候、先者右之趣以書中得貴顔、如此御座候、以上、

八月十三日

百艘舟年寄

矢橋浦

舟年寄御衆中様

一、嶋関川西之処、東本願寺江材木置場ニかし置候処、此節迄ニ右地所材木取払、最早入用ニも無之候間、差戻し申度旨、講中惣代釜屋藤兵衛殿、木屋伊兵衛殿被申参候事、八月廿六日、

大津御役所

廻状

大津浦始

内堀繁太

湖上船改為御用、我等儀来ル十一日大津出立、其浦々相廻候条、得

其意、先格之通浦境迄乗船差出、船年寄老人つゝ罷出、案内可被致候、右之外無用之人足被差出間敷候、

一、大小船数吟味いたし、別紙案文之通書付相認、前夜泊江差出可被改請候、

一、貸船者貸先、余り船者貸船屋手前二而改請候様いたし、是又案文之振合を以委細可被書出候、

一、新船、造り直等いたし、遠方浦々二而願出候儀及延引、未極印不受船有之者、一同相改候之間、其段申聞改請候様可被致候、若改之節隠船仕候歟、又者改後無印之船有之段於相聞者、急度可申付条、船持共心得違不致様、精々可被申聞候、

一、船少々所持いたし候浦村之分者、向寄浦江船相廻改受候様可被致候、一、旅宿并浦々船改場、乗船等、取繕ケ間敷儀決而被致間敷候、

一、泊之儀者行還二いたし候間、所有合之品を以一汁一菜之積相賄、馳走ケ間敷儀堅被致間敷候、昼食之儀者一同弁当持参いたし候付、用意不及候、

右之趣得其意、船持共江も申聞、心得違無之様可被致候、此廻状不限昼夜早々順達、留り所可被相返候、以上、

大津御役所

未九月四日

内堀繁太印

大津、同所貸船屋、坂本、比叡辻、苗鹿、雄琴、衣川、本堅田、同所貸船屋、同艀方、同西之切、今堅田、同所貸船屋、同釣獵師、同艀方、小野、南浜、北浜、五ヶ浦、南比良、北比良、南小松、北小松、同所貸船屋、打下、大溝、同艀方、永田、下小川、今在家、藤江、横江、舟木南浜、同横江浜、同北浜、新庄、太田、藁園、深溝、針江、森村、馬原、木津、今津、新保、領家、北仰、貫川、桂村、深清

水、中庄、北新保、知内、西浜、海津、菅浦、大浦、月出兩組、岩熊、塩津、石川、片山、東尾上、同所貸船屋、延正寺、海老江、安養寺、早崎、下八木、八木浜、大浜、南浜、同所貸船屋、川辺、下坂浜、長沢、伊庭、同所貸船屋、常楽寺、同所貸船屋、同艀方、豊浦、香ノ庄、浅小井、北庄、多賀、八幡町、同所貸船屋、八幡舟木、同所貸船屋、舟木、南津田、長命寺門前、同所貸船屋、大房、牧村、加茂、田中江、江頭、同所貸船屋、小田、野村、比留田、野田、須原、同所貸船屋、安治、堤村、吉川、小浜、幸津川、同所貸船屋、戸田、五条、水保、今浜、木浜、同所貸船屋、開発、大曲り、矢嶋、赤野井、枚江、森川原、山賀、下物、下寺、津田江、中村、同所貸船屋、吉田、同所貸船屋、品、同所貸船屋、駒井庄大萱、下笠、南山田、山田、矢橋、大江、穴村、大萱新田、新浜、大萱、神領、橋本、里村、黒津、太支、関津、五ヶ浦、外畑、南郷、千町、平津、石山、鳥居川、松本三ヶ所

右浦々

庄屋

舟年寄 中

貸船屋

覚

一、丸船

何拾石積^〆

何艘

何百石積^迄

内何艘 板請

内 何艘 何村誰方^〆年限借し船

何艘 何村誰方^〆右同断

一、大艀船

内何艘

板請

何艘

内右同断

右同断

一、中艀船 内何艘 板請 何艘

内右同断 右同断

一、小艀船 内何艘 板請 何艘

内右同断 右同断

一、田地養船 内何艘 板請 何艘

内右同断 右同断

×船数何艘

外

新造願

何船 誰印

造直船

何船 誰印

当分借

何船 誰印

内何艘 何村誰方何用二借

何艘 何村誰方何用二借

右者当村所持船并年限当分借共吟味仕書上候通相違無御座候、以上、

何郡何村

未九月

庄屋誰印

船年寄誰印

右御廻状九月五日未明、飛脚を仕立次浦坂本へ相渡、右二付添状左之通、

以手紙得御意候、秋冷御座候処、弥御堅勝可被成御座珍重奉存候、然ハ此度船御改二付、御触老通、御案文老通入老箱持せ遣し候間、髓二御入手被成、受取書御渡可被下候、尤先年ハ其御地二而中食御座候所、此度ハ何れ茂弁当御持参二付、其御手当二不及候、其余之

義ハ御触之通御心得取計可被成候、右之段拙者共よりも申通候様被仰渡二付、此段得御意候、以上、

九月五日卯刻

百艘舟年寄

坂本浦

舟年寄中様

追而此飛脚賃之儀、其御方老先村へ無賃二而御送り被成候先格二候ハ、此方二而扣置可申候得共、先村老其御方へも賃錢御取被成候義二候ハ、此ものへ式百文御渡し可被成候、

右之通申遣候処、飛脚賃式百文、則飛脚利七へ被渡、受取歸り相濟、

一、九月五日、松本浦舟年寄方へ、廻り加兵衛を以申遣候趣ハ、今度為船改来ル十一日御出立有之、坂本始御改被成候、則昨日御廻状御差出被成候二付、坂本へ為持遣候、貴浦御改ハ右御廻村仕廻二相成候、自然作方差支等御座候ハ、内堀様御在宿之内二御願被成、可然と存態々御心得之ため申遣と申遣候処置候、

一、九月五日、貸舟や源助相招、近々舟改有之間、心得之ため申達置候、尤其方老御中間中へ御通達置可被成候、弥御日限相定り候ハ、其節可申達候と申置候、

一、同日、左之通艀持中へ廻状を以申達置候、

今度舟改有之間、先月相納候舟帳面之通二候と歟、又ハ相替候儀共否哉、来ル九日迄二無間違銘々舟会所へ御申出可被成候、

但

尾花川町、土居町、観音寺町、北保町、別所村、大江村、神出村
右之分ハ其所二而相調、町村毎惣代を以御申出可被成候、

宛名ハ

はなれの艀持へハ吉軒別ニ相認、右町村之分ハ町村相記遣

置候、

一、九月五日、上下小舟惣代へも及通達置候、

但し、小舟入会所ニ而太郎兵衛方申聞ル、

右之外委敷訳書等ハ、舟改一件帳入と申袋へ都而入置候ニ付略ス、

九月節句御礼

石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元々

石丸三平様

〃

福永久次右衛門様

〃

内藤伍左衛門様

御町役

芝山泰蔵様

七里官助様

御勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

右七軒へ鳥目五拾疋つゝ、紙札付、其外御門内御手代衆、組屋敷不残、

浅野様、北出氏手札ニ而相勤、治郎左衛門、九兵衛、供嘉兵衛、

諸浦為舟改と、九月十一日御出立、

石原庄三郎様

舟方御手代

内堀繁太様

御若徒壹人、内堀様御供壹人

同下役

北出雲平殿

北出氏并太郎兵衛と相合ニ而供壹人

当中間年寄

太郎兵衛

右御上下六人、下組小舟次右衛門舟ニ御乗舟、加子三人、但し笠葺無屋形、尤薄縁、茶、たはこほん中間方差入ル、

一、当日朝大浜御印場ニ而堅田海老漁船八艘御改相濟候上、同所方

御出舟、

右舟場御見送りととして、年寄次郎左衛門罷出ル、

右内堀様儀、平生共何角之音物堅御請無之、別而舟改御出役も、諸事下方御いたわり厚き思召ニ付、御出立之餞別遣不申、船中并御旅宿ニ而之御なくさミとして、付添太郎兵衛方菓子たんす持参之筈、右菓子代式朱一片位、

大津

配符 御役所

大津浦始

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方ニ而掛改候間、得其意納人印判持参可致候、以上、

湖上船運上銀、来月朔日より五日迄ニ持参上納可致候、遅滞致間鋪候、此配符令請印早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

未九月十五日

御役所 御印

書面之趣貸船やへも可申聞候、

一大津

坂本

同断

西浜

海津

すか浦

大浦

月出両組

岩熊

塩津

石川

片山

東尾上

延勝寺

海老江

安粮寺(龜)

早崎

下八木

八木浜

大浜

南浜

川道

下坂浜

長沢

右浦々

庄屋

舟年寄

右廻状十四日巳刻到来、申刻坂本新兵衛へ新八持せ遣ス、東浦松本始之分、十五日朝嘉兵衛持参ス、

九月十三日、九つ時橋本町小歩参り、只今見受候所、御高札行馬之内二脇差壹腰相見へ申候故、御知せ申上候由、則見分致候処、かわつか、鉄つば、黒之さや、竹身之脇指壹腰有之、十四日船御掛り福永様へ御覽二入、右之趣申上候所、町役所へ出し候様被仰候二付、則書付ヲ以差上候処、預り置候間、自然尋ニ参り候ハ、早束願出候様被仰付事、

九月十四日

口演

一、船御運上銀、来月朔日ヨリ五日迄無遅滞上納可被致候、此廻状早々順達、留り所を御返し可被成候、以上、

未九月十五日

百艘

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、源七、五郎八、善兵衛、源六

船改御廻村御配符壹箱、村々不残順達いたし、九月廿五日松本舟年寄長兵衛、爰元へ持参被致候二付、即刻御役所江返上仕候、

十月九日、与次兵衛御役所江罷出候、内堀様被仰聞候は、拙者共明日方廻村二出候得ハ、留主中差懸り候訴事有候ハ、内藤五左衛門在宿二付、彼方江可申出候、当津改残丸ふねの分、追々帰津次第極印極付共書直候分ハ得と下見いたし、北出雲平方へ可申参候、此段被仰渡候、与次兵衛答上候ハ、北浦二帳付致ふねはいつれ帰候程も不相知申、是迄上之下見致置候処、宜分ハ私共方ニ印置惣濟候上可申上候、最早下見不致ふね三四艘ニ御座候、冬中ニハ相濟可申候へ

とも、急ニハ登り不申候、此段御断申上候、

九月廿五日差上候浦廻り御廻状箱ハ御役所ニ有之候へとも、御廻状ハ見へ不申候ニ付、其節いつれの名前人持參被致候哉、当役所ニ而受取候役人共名前相知レ候ハ、可申出旨被仰渡候ニ付、其節中間忠助罷出候ニ付相尋候処、御□所ニ而梅八殿へ御取次相頼、於御玄關ニ御受取被成候、御役方ハ御名前不存候旨、今夕方内堀様御宅へ御返答ニ忠助參候事、

一、十月十四日、永田浦間屋名前袋屋清左衛門參候、是迄度々上津致候様御伝言被下候へとも、少々いたミ御座候而延引之段、断申居候、此方ハ廻船さしふね之訳申聞候処、随分尤ニ承知いたし、しかし漸此節取付之事ニ候へハ、四、五ヶ年も用捨いたし呉候様、だんく相頼ミ候へ共、夫ニ而ハ浦法も不相濟候間、来申年老年ハふね差向候之義相待可申候へとも、酉年よりハいつれ及対談ニ、舟差下し可申候、尤当津之義ハ外式ケ浦とハ格別世話いたし候是迄之訳合も有之候へハ、自然明年ニ而も浦方ニ荷つかへ等有之由を以、ふね入用ニも候ハ、此方へ可被申越候、

右之段精々申聞候処、何事も承知候上歸村被致、但ふねハ大坂嶋之内山田屋忠兵衛持、袋屋清左衛門ハ大溝之者ニ而、くすり店出し、右忠兵衛ハ兄也、清左衛門家内十五六人も暮居候而、永田、大溝懸持之由、

右之趣清左衛門へ懸合候訳、片た、八幡へハ此方ハ通達可致筈、但片たハ歸り道ニ候へハ、見合被立寄候ハ、来年中用捨候旨被申置候間、申聞ル、

十月廿二日、大塚屋四郎八兵衛、是迄嶋閑床地かり受罷在候善七相果、

跡尾張屋仙蔵と申者引受候ニ付、是迄かし遣呉候様相頼候ニ付、廿九日は迄之振合書付取置候事、

炭屋善助船積不埒ニ付、北行船方へ一刻相止メ置候処、鰯屋吉兵衛を以たんく被相詫候ニ付、十一月朔日方已前之通用捨儀遣候、尤下地証文証人名前近江屋喜兵衛ニ付、鰯吉ハ印形除置候、

右為挨拶諸白三升、鯖吉本、かき式かこ到来ニ付、二日寄合料理ニつかい申候、

八月十九日、御所司代牧野備後守様山門御順見ニ付、旧例之通唐崎より当津へ之御用船共差出候先格、右御用向ニ付前十七日当御役所へ年寄治郎左衛門罷出候砌、御元メ福永様被仰聞候趣ハ、御所司代御召船御蔵前へ御着船ニ付、右場所見請候処、こもく杯ニ而埋り、甚見苦敷、殊ニ御召船着所勝手悪敷候間、石垣際浚掃除為致度、是迄堀さらへハ何方より仕来り候哉之儀御尋ニ付、御答申上候ハ、都而津内関々之儀ハ、其地所統キ町或ハ船荷物揚ケ場所町々より堀さらへ候趣申上置候処、同夜戌刻過二年寄老人罷出候様申来候、則市兵衛罷出候処、町方於御役所ニ蔵はし町、御蔵町年寄、此方とも一緒ニ被仰聞候ハ、御所司代御召船并御供船とも御蔵前へ御着ニ付、金藏堀石垣際埋り有之候ニ付浚掃除為致度、尤急御用ニ付是迄浚方等相調らへ居候而ハ及延引、何れ明日中ニ浚切候様致度、下地仕来り之儀不論、此度百艘方并両町へ臨時ニ浚之義申付候間、三方共申合せ、無滞掃除さらへ致候様被仰聞、差掛り急御用ニ付、一同御受申上、夫より手配り申合、御蔵町年寄米屋吉兵衛方へ参り相談候処、両町より家並ニ老人宛人足被差出候筈ニ付、仲間方よりも拾人差出し候様申置、折節雨天ニ付、明日快晴之程も難計、出合之人足計ニ而ハ無覚束、依之黒鋏五人相雇ひ可申様、則御蔵町より黒鋏清右衛

門へ通達被致候筈猶又土砂捨船七艘入用二付、手先之事故此方へ被相頼候二付差出し遣候、尤黒鍬并船加子賃共、三つ割二可致様相對いたし、何れ明日艸々(草々)方一同罷出候筈二申合、其夜子ノ刻過二相退キ申候、

右人足并船加子とも尾花川舟方へ申遣し候処、承知之趣返事有之、且翌十八日早天より右場所へ市兵衛、忠介参り候処、両町方も町役不残被出、一同差配致候、尤今曉御蔵町方前夜申合之外人足少々相増候様会所へ通達有之候二付、仲間方も今三人増加へ、十三人二相成、雨しきりと降続キ候得とも、右大勢之人歩故、其日申下刻迄二大躰浚切、則御掛り町役柴山様御見分、無滞相済申候、

右御順見御用船金藏堀御蔵前へ御着之積二付、右場所上り段取繕ひ候様被仰渡候二付、此儀ハ中間方方仕候例も無之旨を以御断申上候処、其已前百艘方方いたし候趣、御蔵ニ御留書有之由を以被仰付、此儀ハ中間方二ハ留書等無之、全左様之儀有之間敷存候故、押而御断申上候故、猶又御調らへ中御順見御延引ニ相成候而、重而御沙汰無之候事、

但し其後外御用二付治郎左衛門罷出候節、船方御手代内堀様被仰聞候ハ、先達而御順見御船揚り場取繕ひ之儀、其中間方可被致筈二ハ無之処、全自分留主中之事故、其節掛り役人不弁二而心配を懸ケ、氣之毒与被仰聞候事、

右浚二付諸入用、左之通、

一、貳貫貳百四十八文 船七艘、壹艘二付百文宛

但し中間方扣 舟付七人、壹人二付貳百文宛

并船壹艘借り賃百四十八文とも

一、五貫四百七十六文 右同断、諸入用

但し蔵はし町、御蔵町、右両町方之扣

×七貫七百廿八文、但し三つ割、貳貫五百七十七文余宛掛ル、

一、三百文

金蔵与三八方へ茶代

是ハ仲間方方之人歩休足所(息)

一、五十六文

金わり四枚代、

此二口ハ割り合不拘中間一存之払也、

一、七里官助様御死去、十一月廿八日八つ時、高山寺江葬式有之候、為香典南籙一片遣し申候、右官助様義ハ、当時何も御役中二ハ無之候へとも、前々方御馴染、殊ニ中間之義御世話ニ預候事も有之候故、右之通取計申候、

但是迄御役付之御手代衆二而も御死去之節右躰相勤候義ハ無之、此度之義ハ右之訳合、勿論御子息様引続御元々役も可被蒙仰風聞有之候、

一、京都西御奉行三浦伊勢守廿七日八つ時御死去之旨、宿鍵屋佐助方(速)早束為相知被呉候へとも、是迄御悔ニ罷出候例も無之事、

十一月

十二月十五日、当津寒氣御窺

石原庄三郎様

真鴨壹掛ケ

御手附

石丸三平様

御元々

福永久治右衛門様

同

内藤伍左衛門様

御町役

芝山泰蔵様

御舟方

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

右八南鐐一片宛

小頭 赤井平六様

佐久間正蔵様

高橋角左衛門様

御目附 多胡甚助様

岡本多内様

右五軒へ銀壺両宛

右之外御門内御手代衆、御組屋敷不残并北出雲平殿江手札計二而相勤ル、与治兵衛、忠介勤ル、とも平兵衛

覚

一、御納豆 五十抱

右者御旧例之通御前より不相替被下置、難有頂戴仕候、以上、

未十二月十六日

百艘印

観音寺様御内

松岡市左衛門様

覚

一、金子百疋

右者当津より御家中并御人足渡海為御挨拶御前を被下置、慥二頂戴仕候、以上、

未十二月十六日

松岡市左衛門様

十二月十六日

京都寒気見舞

東
松下信濃守様

御用人

杵田市之進様

佐藤八郎治様

柴田伴蔵様

御取次

佐伯五郎兵衛様

坪内逸作様

名倉平蔵様

小笹才司様

〆右八名札計

東公事方

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

上田弥右衛門様

木村栄之進様

木村八十郎様

右八南鐐一片つゝ

百艘印

真鴨一掛

公事下

寺田官左衛門様

末吉新五郎様

喜多尾八郎右衛門様

森儀左衛門様

中川定右衛門様

// 李左衛門様

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

✂手札計

川嶋与二右衛門殿
岡村勝左衛門殿

(印:「百艘」)

西御奉行 十一月廿七日御死去二付不相勤、勿論同屋敷も不相勤候、

西御公事方

公事下

渡辺甚五右衛門様

千賀与惣左衛門様

(裏表紙)

深谷平左衛門様

久下政右衛門様

石破伊左衛門様

浅賀卯兵衛様

七拾四番

入江吉兵衛様

上田八蔵様

右南鐐一片つゝ

菊池治左衛門様

百艘

柏原治部右衛門様

ま之嘉左衛門様 ✂手札計

若狭屋八兵衛殿

ひとり一羽

田内彦助殿

銀三匁

右之通太郎兵衛、孫右衛門、とも嘉兵衛

一、金貳歩 十二月廿九日、升市殿を受取、

右ハ去午、当未兩年分朽木様舟積之御祝儀也、

追而請取書貫二被参候ハ、其節此帳へ扣書いたし、受取相認可遣、

尤認方文言ハ諸蔵船積長^帳二有之候事、

覚

一、金子貳百疋

右者朽木兵庫助様より去午、当未兩年分、例之通被下置、慥受取申候、
以上、

百艘

寛政十一己未年十二月

船年寄印

四、「万留帳」寛政一二年

(表紙)

寛政拾貳庚申歳

(別筆)
「七拾五番」

万留帳

正月吉日

(表紙見返し)

(印：「百艘」)

曲渚和泉守様禁裏御附より西御奉行ニ御転役并年頭御札

御初入恐悦兼帯之事并ニ御高札御書替之事

下組惣代かわり之事

四廻り新八上組小船買入之事

石山御開帳一件

石山御開帳ニ付掛茶屋三星屋荷物持越し之二件

惣年寄矢嶋氏惣領死去香典之事

京東御奉行松下信濃守様御出府

せた橋本お石山御開帳ニ付挨拶之事

船屋市松船常楽寺行古手お固粉之事

日吉御神事御延引之事

京東御奉行御組石山御開帳御見廻り、所司代御組、西御組同断、

大坂御目附川筋御順見之事

御目附高橋氏御母公御死去香典之事

日吉御神事御廻状触直し之事

御茶壺御下向

御所司代牧野備前守様坂本、唐崎御順見之事

坂本町組上之番乗人入水之事

御所司代当御蔵御順見之事并金蔵堀掃除之事

一、貸船屋取締之事

当御役所御手代石山江船ニ而御出之節せた橋江当テ候事

吾妻川浚之事

堅田町白銀屋陸助蔵浜江建出しニ付一札之事

一、荷問屋船賃払錢拝借之事

上組仁右衛門船せた橋杭江船スレ候事

東御奉行森川越前守様御登り恐悦并御高札書替之事

常楽寺浦九艘付込之事

御所司代当御蔵御順見ニ付金蔵堀掃除引合之事

彦根領山門下伊崎寺より船ニ而人乗せ候ニ付引合之事

若狭蔵仮橋江男死骸掛り有之、此方江御頼之事

肝煎山本兵次郎死去香典之事

上組五兵衛船乗合はまり入水之事、但所丸五親類

殿様吾妻川御見分之事

仲間年寄市兵衛死去跡役太郎兵衛願之事

市松船紛失荷出候ニ付御役所江願之事

多賀喜三太様御目附被仰蒙候事

嶋之関地面東本願寺江是迄貸付有之所、講中お差戻し候事

右同処直様西本願寺江是お貸候事

(本文)

干時寛政拾貳庚申立春吉祥

例年二日御礼、尾州公御停止ニ依十一日迄延引、

正月四日、初寄、旧例之通諸帳面勘定、中飯有之候、

正月七日、向せた泊り、惣番積、

十一日、例年帳固メ祝儀在之候得共、当日当津京都御礼日ニ付、十三日迄延引、尤役一同留守中ニ付、

大津御礼 正月十一日

石原庄三郎様 金子貳百足

御手付

石丸三平様

元々

福永久治右衛門様

内藤五左衛門様

町役

芝山泰蔵様

勝手方

山田仲助様

船方

内堀繁太様

七里左六郎様当年初而元々格ニ被蒙仰候、

右七軒金百足つゝ、

小頭

目付

佐久間正蔵様

高橋角左衛門様

//

多胡甚助様

赤井平六様

岡本多内様

舟方下

惣年寄

北出雲平様

矢嶋真十郎殿

堀 猪三郎殿

遠藤仁右衛門殿

右九軒白銀一両つゝ、

外二小の又三郎殿ハ、去八朔、当年頭とも御差扣ニ付不勤候、

駅場肝煎

吉本弥四郎殿

鳥目式拾足つゝ、

御門吟助殿、五百文

//

御袋、貳百文

山本俵次郎殿

御足輕 宗八殿

小づかい

梅八殿

// 卯八殿

メ貳百文つゝ、

白崎久太夫様、御蔵番式人、外田中弁蔵殿御不幸ニ付不勤、組や

しき不残、其外御門内、平蔵町年寄木屋利介殿

右八手札計

メ金貳両一步、銀一九つ、五百文一、貳百文六

右之通当十一日 与次郎、市兵衛、とも新八相勤申候、

正月十一日、京都御礼

西御奉行

一、曲渕和泉守様

金子三百足

目録台、下ヶ札附

御用人

御取次

藤田一市様

佐藤左市郎様

星野半右衛門様

佐藤太仲様

原田仙助様

矢沢龍右衛門様

芝幸平様

東御奉行

右七軒へ銀壺両宛

一、松下信濃守様

金子三百疋

目録台、下ヶ札附

御用人

杵田市之進様

御取次
佐伯五郎兵衛様

佐藤八郎次様

坪内逸作様

柴田伴藏様

名倉平藏様

小笹才司様

右七軒へ銀壺両宛

西公事方

渡邊甚五左衛門様

東公事方
真野嘉右衛門様

深谷平左衛門様

四方田重丞様

不破伊左衛門様

上田弥右衛門様

入江吉兵衛様

木村八十郎様

右八軒へ金子百疋宛

西公事下

千賀与三右衛門様

東公事下
寺田官左衛門様

久下政右衛門様

末吉新五郎様

浅賀卯兵衛様

喜多尾八郎右衛門様

上田八藏様

森 儀左衛門様

菊地治左衛門様

中川定右衛門様

柏原治部右衛門様

中川本左衛門様

芝 嘉左衛門様

櫛橋平藏様

平尾安左衛門様

右十五軒へ銀壺両宛

上町代田内彦助殿

銀貳両

筆工奥田九右衛門殿

下町代藤沢傳六殿

銀貳百文

下町代藤村佐市殿

上町代中へ

銀貳百文

下町代中へ

小番中へ

銀貳百文

東西御門番へ

東西仲番中へ

銀貳百文

宿鍵や佐助へ

追分丸屋四郎兵衛へ

銀貳百文

同下女中へ

山科大津屋孫右衛門へ

銀貳百文

歩判三両貳歩

銀貳百文

銀貳両壹つ

銀貳百文

銀壺両三十

銀貳百文

披露ふた貳枚

下ヶ札貳枚、差出し貳枚

右之通孫右衛門、忠助相勤ル、供嘉兵衛、荷持和介

十一日、帳固又祝儀

饅頭百

上組小ふね中

仁右衛門
徳藏

諸白貳升

下組小ふね中

甚兵衛
長七

同

坂本新兵衛

酒貳升

諸三升

諸三升

関ふね次兵衛

諸三升

諸三升

するめ式把 尾花川町

右之通持参、例年之通相濟、

正月十五日、芦浦御礼

観音寺様

扇子三本入壱箱献之、

但扇箱くり足のし包添

右権僧正様未御病氣二付、京都二御座被遊、尤御当住様御幼年故御逢無之旨、片岡氏に御断被仰聞、不相替御酒、御節等被下置候事、

御家中

片岡喜右衛門殿、西川五郎兵衛殿、久松清蔵殿

右三軒扇子三本入壱箱つゝ、

右之通孫右衛門、喜三郎相勤ル、供弥兵衛

当西御奉行曲渕和泉守様御儀ハ、是まで禁裏御附御在勤之処、旧臘廿九日当御役被為蒙仰、此度年頭御祝兼帶二而、御初入恐悦御受被遊候二付、則先格左之通相勤申候、

三浦伊勢守様御跡役

曲渕和泉守様

金子貳百疋 目録台、下ヶ札付

上町代田内彦助殿へ銀壺両

右ハ御替り度毎遣し参り候振合を以此度も遣ス、

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、御書替頂戴仕度候二付、為御願明十日京都西御役所へ持参仕候二付、乍恐此段御届ヶ奉申上候、以上、

寛政十二年

申正月九日

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届申上候、尤御目附御三人、橋本町年寄、右ハ口上二而届ヶ置候、同町小歩へも達し置候、

正月十日御高札、御印紙とも持参二而登京仕、翌十一日東御役所御帳前へ孫右衛門、忠介罷出、名札を以御公事方様へ御通達被下度申上置、左手之傍二御高札、御印紙携扣罷居候処、則御公事方様御出被成候二付願書差出候、高札、御印紙とも相渡し御名前御尋申上候処、喜多尾八郎右衛門様与被仰候御事、尚追而御沙汰可有之旨被仰候二付、罷歸り申候、

但し願書、左之通、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙、御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙とも前々之通被下置候様奉願上候、以上、

寛政十二年

申正月十一日

御奉行様

大津百艘舟年寄

孫右衛門印

忠助印

下組小舟惣代五兵衛、忠兵衛兩人相勤居候所、内故障筋有之、忠兵衛義ハ去年五月自分断引被致、其以来五兵衛一役二罷在候二付、

百艘舟年寄

市兵衛印

早々忠兵衛之跡役相究メ候而可然旨、兼而此方々も申含置候処無其儀差置、五兵衛儀も当正月十五日忠兵衛同様惣代上ケ引度旨、組内へ申出候へ共、組切二而ハ跡役引受相勤候者、出来兼候趣二付、正月十五日五兵衛、甚兵衛、七兵衛右三人当会所へ被參、此方々差圖を以惣代申付呉候様被相頼候故、翌十六日下組小舟持不残会所へ呼、以來ハ甚兵衛、次右衛門相頼候様申渡、尤右二付不得心之筋も候ハ、一同無遠慮此席二而可被申段申聞候処、何連茂承知之旨請之被申候事、正月廿一日、如嘉例貴布祢御神酒相勤申候、

一、四廻り之内新八、此度上組小ふね持太郎兵衛跡組入致度旨相頼候二付、中間相談之上聞届ケ遣し申候、則正月廿五日御運上帳面御改メ願書差出、是迄定法之書付中間へ取置候事、

一、正月廿七日、東御公事方御差紙到来、明廿八日九つ時御高札可相渡間、東御役所罷出候様申来り候二付、翌廿八日未明る^ル与次兵衛孫右衛門登り申候、宿鍵屋佐介^ノ添状有之候、賃錢貳百五十文渡ス、

一、廿八日、九つ時御廊下江罷出候処、御公事下寺田官左衛門様御出公事方御用部屋江御引連被成、四方田重丞様御立会御印紙并古御印紙、御高札とも首尾能御渡し被成下候事、

奉差上一札

一、大津百艘江被下置候船御高札、御印紙頂戴仕并是迄之御印紙前々之通被下置難有奉存候、依之一札奉差上候処、依而如件、

大津百艘年寄

寛政十二年

与次兵衛印

申正月廿八日

孫右衛門印

御奉行様

右相認參候へとも、同文言二而御帳面江印形御取被成候、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替被成下候様、先達而東御役所江奉願上候処、右御印^高札、御印紙頂戴仕難有奉存候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

大津百艘年寄

寛政十二年

与次兵衛印

申正月廿八日

孫右衛門

御奉行様

右ハ西御役所江罷出申上候処、御公事下千賀与三右衛門様御出、願之通御聞濟被成、御高札表臚おり之訳御尋二付、即答申上候、相濟候事、

右御礼勤方、左之通、

東

松下信濃守様 金貳百疋

西

曲渕和泉守様 //

東御公事方

真の嘉右衛門様

四方田重丞様 此度御懸り

上田弥右衛門様

木村八十郎様

西御公事方

渡辺甚五右衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

右金百疋つゝ、但四方田様ハ御懸りニ付、定列例之外金百疋遣し申候、尤旧例也、

東御公事下

喜多尾八郎右衛門様

是ハ最初御高札持参候節御取次被下候ニ付、御懸り同様金百疋遣申候、

同

寺田官左衛門様

御懸りニ付金百疋遣申候、

同

寺田亮ダイスケ祐様

御印紙、御高札御書役ニ付、金百疋遣申候、

西御公事下

千賀与惣右衛門様

西御役所御^届御取次被下候ニ付、銀壺両遣申候、尤是ハ旧例

ニ無之候へ共、余り無手も如何ニ付、中間相談之上取計申候、

已来ハ支宜ニより取計ひ可申候事、

歩十六切、銀壺両壺包

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都東御役所ニ而頂戴仕罷
歸り候二付、此段御届ケ奉申上候、以上、

寛政十二年

申正月廿九日

百艘年寄

孫右衛門

大津

御役所

当所御目付

高橋角左衛門様

銀一両

多胡甚助様

〃

岡本多内様

〃

橋本町年寄翁屋小兵衛口上ニ而申遣ス、
同町小歩江銭式百文、先格ニ付遣ス、

一、諸白式升

野田村帳屋

小鮒七枚

源蔵

同乍庄屋親類

定八

右者去未年帳屋一件之儀ニ付、為挨拶如此此度到来、尤一件委細者
別紙三ヶ浦廻船対談帳記有之、

当年石山寺御開帳ニ付、上下小船持、四廻り三組加子不残并津内體
持貸船屋中へ、示談之上印形取之、其外御開帳之諸留メハ別半紙帳
ニ有之候故略之、

申二月廿三日

上巳御礼

一、石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

御元メ

石丸三平様

// 福永久次右衛門様

// 内藤伍左衛門様

町役

芝山泰蔵様

元々格

七里左六郎様

御勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

右七軒青銅五拾疋つゝ

右之外御門内御手代衆、組屋敷不殘、北出氏手札ニ而相勤候事、治郎左衛門、九兵衛、供吉平

一、惣年寄矢嶋真十郎殿惣領子息死去ニ付、為香典白銀壹両遣し申候、葬礼三月七日八つ時、

一、三月十九日、京都東御奉行松下信濃守様関東御下向ニ付、御出迎ニ追分江市兵衛、勘三郎罷出候、尤為御見送与右兩人松本江罷出候、供やとい和助、

三月十七日二山田浦綱方よりわたか廿致到来候ニ付、即刻役人中配当いたし候事、

但し当節雇人和助与申者ニ配せ候事、

三月廿二日ニ勢田橋本村舟年寄をうくひ数四十七到来いたし、右者定例之様成趣ニ而被相送候ニ付受納いたし、即刻役人不殘配当いたし候事、

但し右同人ニ配せ候事、

右即日舟年寄又右衛門殿、藤九郎殿被来、当年之石山寺御開帳ニ付、右同所艀日毎二入込候一礼挨拶申被帰候事、

三月廿二日、当御役所を石山寺御開帳ニ付御廻状御渡し被成、即請印いたし松本浦へ持せ遣ス、使和介

但し右御廻状之御文言ハ、石山開帳一件帳ニ記し有之、

乍恐口上書

一、去ル廿一日私所持船ニ而、蒲生郡常楽寺浦行荷物船積仕、平蔵町字嶋之関ニ繋置、湖上日和待いたし罷有、昨廿三日朝水主与三吉と申者あか水かへ可申と存、舳先へ這入見候処、右場所ニ積置候櫃荷積並あれ有之、下堅田町伊勢屋孫左衛門方出古手荷三箇之内、壹箇紛失致候趣、私へ為相知候ニ付、相驚孫左衛門方へ申達、立会見請候得共、入日記等難相分り、依之孫左衛門方を京都出元へ申遣候処、彼方ニ而も早速ニハ難相分り候故、得と相調跡を可申越旨申越し候、尤水主与惣吉儀右舟ニ泊り居候へ共、全廿二日夜中寝入候隙を考、胡乱もの這入盗取候儀と奉存候、且右与三吉へも得と相糺候へ共、怪敷存当り無御座候旨申之候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

百艘仲間之内

堺川町菱屋伊兵衛同居

申三月廿四日

舟屋市松印

大津

御役所

右者町方御役所へ差上ル、

右訴書之写壹通、町方御目付高橋御氏へ差出相届ル、残り式軒之御目付方へハ、口上計ニ而相届ケ置候、

一、右訴書之写ニ

右之通ニ町方御役所へ御届ケ奉申上候ニ付、尚又此段奉申上候以上と奥書相認、年寄次郎左衛門老人印形ニ而、舟方御役所へも届ケ置候事、

右之古手荷出方

京五条室町 菱屋孫兵衛

荷物送り先ハ

石堂村 つるや新平行

一、米屋町北側字紺屋関方西へ式軒め、同町鍵屋半兵衛抱屋敷裏

一、米屋町鍵屋半兵衛抱屋敷ニ而、同町北側字紺屋関角方西へ式軒目之裏、湖水端石垣并雁木共大破ニ付、此度修覆被致候ニ付、別紙ニ書付取之置申候事、

乍恐口上書

一、昨廿四日奉御訴申上候、百艘中間内船屋市松舟紛失荷物壹箇之内品書、京都出元方申越候通左ニ書付ケ御届ケ申上候、

覚

一、嶋単物壹

一、花色たり小袖壹

同船年寄

次郎左衛門印

- 一、帶木綿
- 一、拾羽織壹
- 一、越後弁慶帷子
- 一、黒袖小袖壹
- 一、地しま布子
- 一、小紋かたひら
- 一、じゅはん壹つ
- 一、花色紋付帷子
- 一、木綿帯
- 一、桔梗越後帷子
- 一、小紋かたひら
- 一、小紋絹拾壹
- 一、小立拾壹
- 一、振子立帷子
- 一、嶋単物壹
- 一、浅黄帷子
- 一、小紋布子
- 一、青梅単物
- 一、柿越後帷子
- 一、糸しま切々
- 一、黄嶋小袖
- 一、花色木綿壹反
- 一、青梅ひとへ物
- 一、かすり郡内小ふら
- 一、しま木綿壹端
- 一、花色木綿うらとき
- 一、弁慶しま帷子
- 一、白さらし帷子
- 一、小紋縮緬羽織壹
- 一、しま布子壹
- 一、しまひとへ物壹
- 一、かのこ帯
- 一、岸しま小袖壹
- 一、しま単物壹
- 一、こん引付壹
- 一、小紋単物壹
- 一、桔梗さらし帷子
- 一、布じゅばん壹
- 一、小紋帷子
- 一、嶋拾壹
- 一、糸入子立壹
- 一、桔梗しま帷子
- 一、青梅小布子
- 一、小紋羽織
- 一、小紋布子
- 一、小紋小袖
- 一、毛とろめん帯
- 一、青梅しま裕
- 一、糸嶋小裕
- 一、花色袖帯
- 一、皮羽織
- 一、紋縮緬昼夜帯

〆五十四品

右之通御座候、以上、

申三月廿五日

大津

御役所

右者町方御役所へ上ル、外二右之通吉通御目付へ上ル、

覚

- 一、しま単物吉
- 一、花色たり小袖吉
- 一、鹿子帯吉筋
- 一、もめん帯吉筋
- 一、小紋帷子吉
- 一、振小立吉つ
- 一、糸入子立吉
- 一、柿越後帷子吉
- 一、花色木綿吉反
- 一、かすり郡内小ふし
- 一、小紋小袖吉
- 一、青梅しま裕吉
- 一、花色紬帯吉筋
- 一、紋縮緬昼夜帯吉筋
- 一、もめん帯吉筋
- 一、弁慶しま帷子
- 一、嶋ひとへ物吉つ
- 一、桔梗越後帷子吉
- 一、小紋帷子吉
- 一、しま裕吉つ
- 一、青梅ひとへ物吉
- 一、岸しま小袖吉
- 一、青梅しま単物吉
- 一、小紋羽織吉つ
- 一、毛とろめん帯吉筋
- 一、糸しま小裕吉
- 一、皮羽織吉つ
- 一、小紋綿入吉つ

〆廿八品

一、右之品々廿七日下堅田町い勢屋孫左衛門向イ持屋敷地尻二、夜五つ
 半時吉揃二いたし捨之有候二付、翌廿八日右町内方御役所へ持参被
 致候処、孫左衛門、市松、中間連印二左之書付差上、御下ケ願いた

し候処、願之通被仰付即座二申請、いせ孫方へ相渡遣し申候、
 乍恐奉願口上書

一、去ル廿一日荷問屋内下堅田町伊勢屋孫左衛門出二而、江州蒲生郡常
 楽寺行古手荷物、舟屋市松船二積乗せ、字嶋ノ関船入二而日和待致
 し罷在候処、右荷物之内吉箇紛失致し候二付、早速市松方其段御訴
 申上、尤品分之儀ハ孫左衛門方より荷主先キ江相尋、猶又品書とも
 差上置候儀二御座候、然ル処、昨夜中孫左衛門持屋敷地尻二、古手
 類廿八品一揃二致し捨有之候を、町内小歩キ見付候旨、孫左衛門儀
 者居町分之儀二而、早速二承之、若哉右紛失之品二而も可有之哉与存
 市松江も為相知俱々町役人江懸合内々立会見請候処、全船中二而被
 盜候品之内与符合仕候儀二御座候、勿論右品々ハ町分方差上御訴被
 申上候段承之奉驚候、

右申上候仕合二而、紛失之品二相違無御座、孫左衛門類身分ハ得意
 先キより荷物為打任置候儀二而、荷主先キ江之申訳二当惑仕、且ハ
 右躰不束之義出来候而者、自参渡世之差支二相成、市松迎も同様之
 義二而、旁以何共歎ケ敷奉存候付、恐多御願二者御座候得とも、格
 別之御慈悲を以差上置候品書与御引合之上、右品々被下置候様奉願
 上候、願之通被仰付被下候ハ、難有可奉存候、已上、

寛政十二年申三月廿七日

荷問屋仲間
 下堅田町
 伊勢屋孫左衛門
 百艘仲間
 境川町
 菱屋伊兵衛同居
 舟屋市松

右之もの共奉願上候通相違無御座候間、願之通被仰付被下候様、於
 私共も俱々奉願上候、已上、

大津

御役所

差上申御請証文

- 一、木綿嶋女単物 式筋
- 一、同 帶 式筋
- 一、花色太袖女綿入 壹
- 一、弁慶嶋帷子 壹
- 一、縮緬花色鹿子女帯 壹筋
- 一、桔梗越後女帷子 壹つ
- 一、小紋女帷子 式つ
- 一、振袖小立女帷子 壹つ
- 一、青梅嶋女袴 壹つ
- 一、糸入嶋小立綿入 壹つ
- 一、青梅嶋男単物 壹つ
- 一、柿越後女帷子 壹つ
- 一、菱嶋女小袖 壹つ
- 一、花色木綿 壹反
- 一、青梅嶋女単物 壹つ
- 一、かすり郡内小裁小袖 壹つ
- 一、ちゝぶ小紋女小袖 壹つ
- 一、かゞ小紋女小袖 壹つ
- 一、毛とろめん男帯 壹筋

荷問屋惣代

白銀屋陸助

百艘年寄

舟屋与次兵衛

一、青梅島女袴

壹つ

一、糸入嶋小立袴

壹つ

一、花色袖女帯

壹筋

一、皮羽織

壹つ

一、紋縮緬昼夜女帯

壹筋

一、絹小紋女小袖

壹つ

× 廿八品

右ハ去ル廿一日、下堅田町伊勢屋孫左衛門出、江州蒲生郡常楽寺行古手荷物、船屋市松二積乗せ有之候内、壹箇紛失仕候処、右紛失之内右書面之廿八品壹揃二致し、昨夜中孫左衛門地尻へ捨有之付、其町分る右品差上、御訴被申上候処、今日私共御歎申上、右品々私共江被下置候様奉願上候付、怪敷心当り之儀、且私共へ意趣遺恨請候覚ハ無之哉之段御糺被成候得とも、外々方遺恨等請候覚ハ勿論怪敷心当り之儀會而無御座候、尤前書廿八品之外、相残候分ハ御吟味之義御願不申上候間、右品々被下置度旨申上候付、私とも為御見置逸々御改之上、右書面之通御渡被成下難有奉請候、且又此上怪敷存当り之義御座候ハ、早速御訴可申上旨被仰渡奉畏候、依之継添御請証文奉差上候処如件、

荷問屋仲間

下堅田町

申三月廿七日

伊勢屋孫左衛門

百艘仲間

堺川町

菱屋伊兵衛同居

船屋市松

差添

荷問屋惣代

白銀屋陸介

百艘年寄

舟屋与次兵衛

大津

御役所

這入候由、

四月朔日、例年之通日吉御神事之船御配符四箱、外二御配符式通御役所二而受取、夫々へ相達候趣、左二記、

覚

一、船数 五艘

但百五拾石積方式百石積迄

是者日吉御神事御名代舟奉行船、日吉惣政所并供船

右之船、来ル十四日日吉御神事二付、如例年可差出候、尤服忌差合之もの相改可申候、以上、

申四月朔日 石庄三郎御印

大津百艘

船持中

右御本紙取片付置

右八五月十五日迄延引二付、跡御配符御渡被成候二付不用之もの故、五月十四日内堀様へ差戻申候、太郎兵衛持参、

一、船割賦老通 山田浦 矢橋浦江

四月朔日市右衛門船頭源次江相渡、

御文言例年之通二候故略ス、

一、同 老箱 堅田浦始 小いと長三郎江相渡、四月朔日、

御文言左之通

来ル十四日、日吉御神事神輿船割賦之事、

堅田浦

丸船式艘 水主九人

外楫取老宛 舟年寄

但百八拾石積方式百積迄

元々

一、福永様

町役

一、芝山様

元々

一、石丸様、此節御懸り

石丸様立会

一、岡田様式勿余

同心

右三軒江白銀一両

御目付

町代

一、高橋様

一、堀 猪三郎殿 南鐮一片

多胡様

是ハ格別世話二被致候付如此、

岡本様

右ハ南鐮一片つゝ、

一、筆工、太七江銀式勿

一、小の宗三郎殿

一、吟助、茶代式百文

遠藤仁右衛門殿、銀式勿つゝ、

右之通百艘年寄、舟屋市松連名二而 卅日市松代、ひしや伊兵衛持参、

一、右被下候荷物持参同道二而、常楽寺着荷主方江市松、孫左衛門近日

断対談二被参候筈、

一、四月二日右荷主江州石塔寺村太兵衛、新平、右兩人方江段々断申

入候処、心能了簡被致候二付、市松代伊兵衛、孫左衛門、兩人とも

同四日二帰宅被致候事、右太兵衛ハ伯父、新平ハ甥也、兩人とも甚

心入能人二而右之通相濟候へとも、此後残り代口物出次第早束相届ケ

遣し可申候事、

石塔寺村ハ八日市方老里半計東南二当、甲賀谷へ行道筋也、馬渕方

二宮方早船

今津浦

丸船壹艘 水主十一人
外楫取壹人

甚丞

同 壹艘 右同断

十左衛門

同 壹艘 右同断

七郎左衛門

同 壹艘 右同断

八郎左衛門

海津浦

丸船壹艘 水主十一人
外楫取壹人

次左衛門

同 壹艘 右同断

嘉助

同 壹艘 右同断

太郎市

同 壹艘 右同断

甚兵へ

塩津浦

丸船壹艘 水主拾壹人
外楫取壹人

八郎兵へ

丸船壹艘 右同断

左近右衛門

同 壹艘 右同断

角兵へ

同 壹艘 右同断

惣右衛門

右之船例年之通致吟味、来ル十四日已前大津へ着船可致候、尤服忌
差合之者相改可申候、此配符令請印早々順達、留り可相返もの也、

申四月朔日 石庄三郎御印

堅田浦

舟年寄

今津浦

甚丞

海津浦

次左衛門

塩津浦

八郎兵へ

外二舟方御手代内堀繁太様、福永久次右衛門様方御添書壹通有之、
文言例年之通二候間略ス、

一、御廻状壹箱 坂本始、坂本船屋次郎兵衛二相渡、四月朔日、

一、同 壹箱 矢橋始、同日小船入二而四廻り之内嘉兵衛江相渡

し置、

右式箱御文言爰両三年之ことく二候間略ス、外二松本浦へ之御割賦
例年此方方取次遣し候へ共、今日外御用二付、松本浦之者御役所へ
罷出候二付、直々御渡被成候事、

一、四月五日、船屋市松方右矢粉荷（今マ）一件為挨拶と、肴料金貳百足被差出
候事、

一、四月五日朝五つ時、御役所呼二参孫右衛門罷出候処、来ル十四日
山王御神事之積二付、去ル朔日例之通諸浦へ船廻状差出置候処、親
王御方薨去二付右日限相延、尤跡々御日限ハ今以相知しす候旨被仰
渡、則左之書付御渡被遊候事、

当月十四日、日吉御神事二付先達而役船割賦相渡候処、今度親王御
方薨去二付、右日限御神事延引相成、未日限不相知候事、

申四月八日

此御書付ハ当中間へ被下候分也、

外二

御廻状壹通 松本村へ 即刻廻り弥兵衛二為持遣入、

同 壹箱 山田浦 同刻同人へ小船入迄遣し、
矢橋浦

同 壹箱 堅田浦始 同刻かたゝのりまへ舟居合庄七へ為持
遣入、

此方添書とも

ノ

一、四月十九日、例年之通沖ノ嶋より鱒三本到来いたし、即刻貝屋半六
方江預ケ遣し申候、使弥兵衛、

一、四月二日、京東町奉行御組目付方与力平塚吉十郎様、石山開帳二付
見廻り御用として御越被成、ひらたふね差出候様被仰越二付、則当
所南保町上本長兵衛殿裏江相廻し御乗船被成、為挨拶年寄与次兵衛
参り候処、最早出船後二相成候間、上長殿江申置候処、御帰船之節
加子のもの江懇二御伝言有之候事、

一、四月十一日、所司代御組同心瀬良吉五郎様石山御見廻り御こし被成
候、小舟入方小船二御乗船被成候事、

一、四月十八日、所司代御組木村市左衛門様、筒井平右衛門様、石山筋
御見廻り二付同勢十四五人計小船入方御乗舟被成候、

一、^(張紙)四月廿日、所司代御組同心中川九郎右衛門様石山筋御見廻り与し
て御越二付、小舟入方御乗船被成候事、孫右衛門御送り小舟入迄参
ル、

一、四月廿三日、西御組与力 下田忠七郎様

同 御組同心 眞壁市之丞様

右石山筋へ御見廻り与して御越被成候二付、小舟入方御乗舟被成候
事、則人馬会所る当会所へ案内被致候二付、当会所方小舟入迄孫右
衛門案内いたし候事、

一、先頃紛失荷土橋町竹屋五兵衛小方竹屋市兵衛と申もの方江、押手清
次と申者方預ケ置品、右市兵衛方御目付迄差上候二付、市松、孫右
衛門兩人大江江御召被成爲御見被成候所、此方荷物二相違無御座候
付、御歎ケキ申上候処、此節右書付差出候様内々御心添有之候二付、
左之書付差出申候、

乍恐奉願口上書

一、当三月廿一日、私所持舟二東江州常樂寺行荷物舟積仕候所、日和悪
敷御座候二付、平蔵町字嶋関二繫置日和待仕罷在、同廿三日朝水主
与惣吉と申者船中見受候所、下堅田町伊勢屋孫左衛門出古手入荷物
三箇之内壹箇紛失仕候趣為相知候二付、相驚早束孫左衛門方江申達
俱二見受候得とも、入日記等も難相分候二付、則孫左衛門方京都荷
主方江申遣取調候所、古手類都合五十四品入之由申越候二付、其段
追々二御訴奉申上候折柄、古手類品々下堅田町二捨有之候二付、則
町内方御訴申上候所、右品々ハ右舟二而紛失仕候品之内二符合仕候
着類之内二付、何卒被下置候様奉願候所、御憐愍ヲ以御渡被成下、
難有仕合奉存候、尤右紛失之儀二付追々御手当可被成下候所、三月
廿四五日頃迄平蔵町二借宅罷在候舟稼致候清次と申もの方、土橋町
竹屋市兵衛と申もの方江引解包壱つ預り置候所、取二不参候二付、
市兵衛方右清次方江参候得共、清次義ハ其頃方変宅致候旨申之、家

明ヶ罷出候由二付、又候取ニ参り可申哉と見合居候旨、御聞被及候付、右品御取上ヶ御調へ被成下候所、右舟ニ而紛失之品ニ似寄候様被思召候二付、私并孫左衛門被招呼、為御見被成下候処、先達而被下置候残品之内ニ相違無御座候、前以奉申上候通、何ニも引受荷物ニ而、荷主方江も難相立、彼是心配等仕居、荷主方も追々催促等受、甚当惑難渋罷在候儀ニ御座候得者、何卒御慈悲御勘弁を以、右御取上ヶニ相成候品々被下置候様仕度奉願上候、左候得ハ荷主方江も相渡、今少々不足之分ハ相對を以如何様共取計可仕候間、何分此段御勘弁被成下候、右品々被下置候ハ、重々難有可奉存候、已上、

堺川町

菱屋伊兵衛同居

百艘中間

寛政十二年

舟屋市松

申閏四月四日

下堅田町

伊勢屋孫左衛門

右兩人奉願候趣承知仕候、願之通被仰付被下候様於私共も奉願上候、

百艘舟年寄

与次兵衛

荷問屋惣代

白銀屋陸助

右之通揚枝屋町牢屋敷江持参いたし、御目付三人江差上歸り申候、

閏四月三日

御高式千石

一、大坂御目付代 仁賀保孫九郎様

二千五百石

脇坂甚兵衛様

供御瀬為御順見与御被成御越候、出迎治郎左衛門、孫右衛門、供新八

一、四月廿一日、松本茶屋彦助方へ、石山かけ茶屋三星屋行炭廿俵、京都方持越松本船ニ為積候を、廻り嘉兵衛見咎候処、彦助夫婦共段々相詫、何卒穩便ニ致呉候様達而相頼候二付、重而心得違無之様嘉兵衛方申聞、右船賃仲間へ取上ヶ為相濟置候処、同廿八日又候船屋行すミ拾六俵、石山艦松右衛門江為積、重々不届之致方難差置、御訴可申上趣彦助へ申聞、猶石山へも呼ニ遣候処、船年寄与左衛門付添罷登、右相達候処、石山之義者是迄松本方右様之荷物積不申、不案内之事故不調法致候、以来急度相心得罷有候間、此度者下濟ニ致呉様相頼、猶又彦助方挨拶人当津中町烏屋五兵衛、貝屋半六、村内瓦師七左衛門方再応被参、以来者御定法急度相守可申間、此度之義者下濟致呉候様、再三相侘候二付、誤り一札ニ而事濟致候、尤石山松右衛門、船年寄よりも別紙一札取之置候、且石山之義者、是迄不案内之趣申之候二付、此度者村方一同へ得与被申聞置候由対談致、則一札写船年寄へ相渡し置候、

但し右式通証文松本一件箱ニ入置、

右一件事濟致候二付、翌日彦助礼ニ肴一折鯛蛸持参被致候事、

一、閏四月廿三日、京都西御組豊嶋郷右衛門様、東御組山田健次郎様下役式人同勢十五六人計、石山開帳二付為御見廻り御出、未八つ時右小船入ニ而御乗船、石山江御出、

一、閏四月廿五日、山田浦より二年もの位い之鯉（船紙）本、鮒壹枚到来「山田あみ方」

一、^(張紙)同日山田魚船」庄左衛門より鮒五枚到来、

一、閏四月廿七日、当所目附役高橋角左衛門様御母親御死去二付、為香儀与銀壹両遣し候、

御配符、堅田浦始写置

来ル十五日日吉御神事執行可相成候間、先達而割賦申触候差船之分、早々手当いたし差出、神輿船可相勤候、尤日限四五日以前、一同大津へ差船可相届候、且又差舟之内服忌其外差支等有之候ハ、石付揃ひ候丈夫成代船可差出候、勿論日限治定之上如恒例船割賦可差出候得共、差懸り申触候而ハ差支可相成間、前広此段相触候条、可得其意候、此配符浦名下令請印、昼夜不限刻付ヲ以順達、留り所可相返者也、

大津

申五月朔日 御役所御印

片田浦

今津浦

海津浦

塩津浦

右浦々

船年寄

船持

覚

一、艀船八艘 幅三尺八寸ハ四尺

但老ケ村ハ式艘ツ、

右者御茶壺御下向、当月九日宇治御出立、同日守山宿御止宿、翌十日野洲川渡船之御用二候間、丈夫成致吟味、洗之柄杓老本宛船毎二入置、九日昼時迄二野洲川渡場へ船差出可相勤候、此配符令請印昼夜二不限早々順達、留り所可相返候、以上、

大津

申五月朔日 御役所印

小浜

吉川

須原

比留田

右村々庄屋

舟年寄

覚

一、艀船五艘 幅三尺八寸ハ四尺

右者横関川渡船之御用、御文言同断仍而略ス、

野洲郡

江頭

蒲生郡

大房

常楽寺

田中江

加茂

右村々庄屋

舟年寄

右片田、小浜、江頭三カ所へ、飛脚藤八同日巳ノ刻添状認持せ遣ス、

但賃錢片田式百四十八文

小浜へ 三百四十八文
江頭へ 四百文

来ル十五日日吉御神事執行可相成趣候間、可得其意候、尤日限弥治定之上、如恒例船割符可相渡候へ共、先つ為心得右之趣申達し候間、此旨松本浦、山田浦、矢橋へも通人へ可申事、

申五月朔日

右之通御書付御渡し被成候二付、右三ヶ所へ以手紙申達し候、

左之通

以手紙申上候、薄暑御座候処、弥御安康御勤被成奉賀候、然ハ来ル十五日山王御神事御執行可有御座旨、弥日限治定之上、如恒例船割賦可相渡候趣、御村方へ此方共々通達いたし置候様被仰付候二付、以書中得御意候、早々以上、

百艘

山田浦

矢橋浦

御役人中

右同断松本浦へ忝通遣ス、

一、明後四日御所司代牧野備前守様、唐崎^カ大津御順見二付、坂本、膳所肥船通船相成り不申御廻文、左之通、
明後四日所司代辛崎^カ大津御順見二付、右辺肥^シ船通船不致様、船持共江急度可申付候、此廻状昼夜刻付ヲ以早々順達、留り^カ可被相返候、以上、

大津

申五月二日

御役所御印

大津

坂本

比叡辻

松本

馬場

膳所船町

右浦々

庄屋

船年寄

右之通御廻文大津之処江刻付印形いたし、坂本船年寄方江書状付賃銭貳百文相渡シ候様申遣シ、尤夜分故少々高直、

急廻状

一、明四日御所司代唐崎^カ大津御順見二付、右辺肥^シ船通船被致間敷候、此段艀持中江急度御申付可被成候、此廻状印形被成早々御順達、留り所^カ百艘会所へ御差戻し可被成候、已上、

申五月三日

百艘印

湊町源七、喜六、北保町平兵衛、五郎兵衛、市兵衛、北国町五兵衛、大門町仁右衛門、仁兵衛、別所艀持中、観音寺町艀持中、土居町艀持中、尾花町々、大江、神出村艀持

一、明後^六日御所司代^敏禎野備前守様唐崎^カ大津御順見二付、坂本、膳所肥船通船相成不申御廻文、左之通、
去ル四日所司代辛崎^カ大津辺御巡見之処相延、明六日御順見相成候間、右辺肥舟通行不致様、舟持共江可申付候、此廻状昼夜刻付を以順達、留所^カ可相返候、以上、

大津

申五月五日 御役所御印

大津

坂本

比叡辻

松本

馬場

善所

右浦々

庄屋

年寄

右之御廻状当津之処刻付印形致、坂本船年寄方へ書状付添、飛脚賃
貳百文相渡し候様申遣候、但し飛脚長兵衛、藤八遣入、

再触

当津艀持中へ、明六日御順見二付、肥し船通船被致間敷旨急廻状、
文言名前、前同五日申刻相廻し候、

五月六日、御役所へ呼二参り六兵衛罷出候所、日吉御神事御延引二付、
是迄度々御触書等差出候処、此度御神事弥当月十五日二相定り候二
付、再船割符并諸浦之配符等御渡候二付請取帰り候、尤夫々へ相達
シ申候訳、左二記入、

覚

一、船数五艘

但百五十石積る貳百石積迄

是者日吉御神事御名代船奉行船、日吉惣政所船并供船
右之船来十五日日吉御神事二付、如例年可差出候、尤服着差合之者
相改可申候、以上、

申五月六日 石庄三郎御印

大津百艘

船持中

但此御書附仲間御箱へ納置、

一、船割賦壹通 松本浦 廻り弥兵衛二為持遣入、

御文言例年之通候間略入、

一、同 壱通 山田浦 下組押手岩兵衛
矢橋浦

矢はしへ為持遣入、

御文言例年之通候間略入、

一、同 壱箱 堅田浦始 沢中仕傳治郎二為持遣入、

今津、海津 賃錢四百文申遣入、

塩津浦迄

御文言者当四月朔日之御書附二同也、

一、從御役所坂本浦艀持へ御差紙壱通

右為持遣入、

申五月七日巳刻

右ハ七日午ノ上刻ニ小揚ノ清助ニ添状相認メ、賃錢貳百文相渡し申
様申遣候事、

端午御礼

石庄三郎様 青銅一貫文

元々

福永久次右衛門様 内藤伍左衛門様

〃

石丸三平様

勝手方

山田仲助様

元々

七里左六様

町役

芝山泰蔵様

舟方

内堀繁太様

鳥目五百文つゝ、

組屋敷、御門内手代、北出雲平

右八手札計 与次兵衛、六兵衛、とも弥兵衛

一、京都御所司代牧野備前守唐崎御順見之節、夫方御乗船二而大津尾花川江着船綱引御上覧、夫方三井寺観音、七つ半時二御出立之事、尤八王子七社権現御順見二而、唐崎へ八八つ時過二御越、船割之委細ハ御役舟帳二有之候、

五月八日、三井寺方例之通竹ノ子拾本致到来候事、

一、五月廿日、石丸様矢橋藤五郎殿^{真次郎殿}吾妻川さらへ受書ハ不渡候へとも、地境方三尺二候間右二準シ浚立候様被仰渡候、上浚立候後、百艘分堀立可申候間、此段御含置被下候様申置候、年寄与治兵衛、

一、五月十九日、八つ時過坂本町組五兵衛、上ノ番船加子音吉、利兵衛、右兩人矢嶋ノ関方旅人三十一人乗せ出船致候処、矢橋浦へ着船

前凡一町計沖二而、右乗合之内男老人入水致候旨、右船加子之内音吉、右場所松本浦戻り船二乗り罷歸り相知らせ申候二付、早速小船入加子共差遣候処、矢橋浦方も助船差出し俱々相働キ被呉候処、無程死骸相知レ申候趣申越候二付、此方小船壹艘相仕立、廻り弥兵衛、上下惣代、右兩人ハ自分心得二而乗参り候、仁右衛門、次右衛門、其外加子之もの共右場所へ迎遣候二付、則矢橋浦船年寄兩人付添、右乗り合船并死骸共、嶋ノ関へ夜五つ時過着船致し候二付、此段御届奉申上候書付之写、左之通、

乍恐口上書

一、百艘下知内五兵衛与申もの所持之船二而、旅人三十一人乗合、大津方矢橋まで渡船仕候処、矢橋浦へ着船前一町計沖二而、乗合之内老人人入水仕候二付、此段御届ケ奉申上候、以上、

寛政十三年

申五月十九日

百艘年寄
与次兵衛印
太郎兵衛印

大津

御役所

右書付御役所へ与次兵衛持参仕、則口上二而死骸之義も相知レ申候二付、此方方迎二遣し候間、追付右船并死骸共当浦へ着船仕候間、其節御案内可申上候趣申上、罷歸り候事、

一、加子并乗り合旅人へ入水人始終相尋候処、私共乗り合之内二何方之人二候哉、名所ハ不存候得共、年頃三十才計之独旅之男乗り合居候処、矢橋浦へ着船前一町計沖二而、右旅人ゆくへ元方飛込入水被致、驚入加子衆船板、船竿等投込、色々相働被申候得共、水底へ沈相知レ不申、早速矢橋浦方助船参り、俱々相働キ被呉候二付、無程死骸相知レ申候趣、何れ茂申之候二付、左之通一札取置候事、

一札

一、私共義、今十九日当所矢嶋ノ関ハ百艘下知内五兵衛船ニ旅人三十一人乗合、加子式人ニ而未刻過頃出船仕、海上順風ニ而矢橋浦へ着船前、凡一町計沖ニ而、右旅人之内男壹人入水被致候二付、早速加子衆船板、船竿等水中へ投込、色々相働キ被申候内、矢橋浦も助船差出し、俱々相働キ被申候得共、死骸水底へ沈ミ相知レ不申候処、段々相尋被申無程死骸相知レ候二付、元船大津へ漕戻し、戌刻過嶋ノ関へ着船仕候、然ル処百艘年寄中御立合ニ而被仰聞候ハ、私共船中ニ而口論等仕候哉、又者加子衆鹿抹ニ被致候故入水致候哉与御尋被成候、此義乗り合之もの共、口論仕候義毛頭無御座、加子衆ニも鹿抹成義一切無御座候趣、私共申上候通少茂相違無御座候、勿論相互ニ吟味仕候処、入水人身附荷物ハ不及申、連人迎も無之、私共一同不存人ニ而御座候、然ル上ハ加子衆へ対し乗り合之もの共聊申分無御座候、右御尋ニ付申上候通相違無御座候、為後日仍而如件、

寛政十式年

申五月十九日

乗り合三十人印

但し名前、所書ハ本紙在之候二付、此所ニ記不申候、

百艘年寄中

右一札相濟候上、只今嶋関江着船之趣御役所へ太郎兵衛御案内旁御迎参り候処、則御檢使与して内堀様、北出氏、若徒壹人、供壹人、太郎兵衛御案内仕、嶋ノ関へ御越被成、死骸御見分之上、於嶋関會所ニ乗合旅人并船主五兵衛、加子利兵衛、音吉、其外矢橋浦船年寄勘三郎、長七代利兵衛、百艘年寄与次兵衛、太郎兵衛、右何れ茂御吟味御糺之上、銘々申口御書取被成候、尤百艘年寄兩人へ、右死骸預り請書御取被成候而、夜八つ時過頃ニ御引取被成候事、

乗り合旅人三十人、夜八つ時過宿左之通預ケ置候事、

一、江州野洲村吉左衛門

右ハ平蔵町下組升屋左助方定宿二付、左助呼ニ遣し相渡候事、

一、同 神崎郡佐野村久右衛門

一、同 能登川村喜右衛門

右ハ湊町近江屋藤左衛門方定宿二付、此方ハ人ヲ付右藤左衛門方へ送り遣候事、

一、残り旅人廿七人

右ハ平蔵町下組、屋伊八方へ宿相頼、則右伊八呼ニ遣し相渡候事、尤三度朝夕為賄壹人前百八十文つゝニ相究遣し申候、

一、矢橋浦船年寄勘三郎、利兵衛ハ、宿小船入平六方へ引取候事、右

兩人江翌廿日見舞与して、上菓子三包宛式袋、廻り新八ニ為持遣ス、

一、死骸之義ハ古長持二人、廻り加子共番いたし申候様申付候事、

一、翌廿日八つ時ニ御役所ハ一件之もの共不殘罷出候様申参り候二付、

何れ茂召連罷出候処、内堀様、北出氏御立合ニ而、乗合旅人口書并船主、加子、矢橋浦船年寄兩人、右口書御読聞候上印形御取被成候、尤船主、加子共ハ他参留并旅人之分ハ宿留メ被仰渡、則右請書式通御取被成候事、

右一件之義ハ当御役所ハ京都御奉行様へ御伺ニ相成候、然ル処廿一日朝五つ時ニ当御役所ハ右一件之義^もの共不殘罷出候様申参り候二付、乗合旅人三十人、船主五兵衛、加子音吉、利兵衛、矢橋浦船年寄勘三郎、長七代利兵衛、百艘年寄与次兵衛、太郎兵衛罷出候処、殿様、元々福永様、船方内堀様、船方下北出氏、右御列座之上、右一件之もの共何角相濟申候、死骸之義ハ今廿一日ハ三日さらし被仰付候、^{張紙}二付、則御目附御三人へ右之段口^{張紙}上ニて、「太郎兵衛御届ケ参り候、尤最初方も口上ニ而六兵衛御届置候二付如此、」^{張紙}「右三日さらし被仰付候

二付、則請書」奉差上候得共、死骸之義ハ内分ニ而廿一日暮六つ過時、松本山へ送り遣し埋置候、尤埋料六百文遣し候事、

但し先年松本山へ埋料壹貫文ニ御座候得共、埋料高直故此度ハ手寄泉町成覚寺へ送り可申積二而、則埋料五百文ニ相究置候処、松本山　右先規之通送り遣し呉候様、内々松本山長兵衛相頼参り候二付、廻り弥兵衛松本山へ及引合候ハ、此度之義ハ甚以難渋も二候ニ付諸事一錢目二而も相減し度故、手寄成覚寺へ送り可申積二而、則埋料五百文ニ而相究候得共、其元先規之通送り遣し呉候様段々相頼候義故、相對ニ参り候間、埋料ハ何程ニ而被致候哉与相尋候処、先年之通壹貫文之趣申之候二付、夫ハあまり高直二候間、五百文ニ而被致候得者送り遣し可申、無左候へハ何方へ成共手寄へ遣し可申趣申聞候二付、無抛可引請旨申之、乍併可成義二候得ハ、六百文ニ致呉候様段々分而相頼候故、右六百文ニ相究申候、後日心得之ため爰ニ記し置候事、

一、乗合旅人之義ハ、御役所下り次第出立被致候事、

一、矢橋浦船年寄兩人も、右同断歸村被致候事、

三日さらし日数相立候二付、廿四日朝五つ時過、左之通書付ヲ以御届奉申上候、

乍恐口上書

一、先達而御届奉申上候百艘下知内五兵衛船ニ而、矢橋へ渡船仕候乗合旅人^{之内}一人入水仕候二付、死骸御檢使之上当廿一日方同廿三日まで曝置、尋参候もの有之候ハ、御訴可奉申上旨被仰渡候処、今以尋参り候もの無御座候、依之右日数相立候二付、此段御届奉申上候、以上、

百艘年寄

寛政十弍年

与次兵衛印

申五月廿四日

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付ヲ以御届奉申上候処、則元々福永様、船方内堀様御立合之上被仰聞候ハ、右死骸之義ハ今日方かり埋二致置、来ル晦日まで渡船場ニ左之通札建置、右日数相立候は、札取払死骸之義ハ土葬ニ可致旨被仰渡、則右請書^{張紙}「御取被成候、尤右日数相立候節ハ」別段御届ケ^{張紙}「二罷出候二および不申候、勝手ニ取片付」可申趣被仰聞候、年頃三十才計男、木綿紺嶋之單ものヲ着し、当十九日於矢橋浦捨身いたし候間、心当り人在候ハ、当所船方へ御申出可有之候、

申五月廿四日

右二付謝礼并挨拶物、左之通、

船方御掛り

一、是ハ手札計ニ而御挨拶御礼ニ参ル、
内堀繁太様
但し是迄定列之外御受無之故如此取計候事、

元々

一、南鐮沓片

福永久次右衛門様

右ハ御立会ニ付如此、

一、白銀沓兩

北出雲平殿

右ハ御檢使之節御立合、其外御前詰共

若徒

一、白銀三匁

嘉七殿

右ハ御檢使之節被参候ニ付如此、

内堀様

一、鳥目廿疋

御供一人

右同断ニ付如此、

御門ノ

一、鳥目廿疋

吟助殿

右ハ夜分御門通行世話其外御前詰并茶代共

一、鳥目拾疋

小使

梅八殿

右ハ御台所方何角取次相頼候二付、

御手廻り

弥七殿

一、鳥目拾疋

右ハ御前詰二付如此、

嶋ノ関

新兵衛

一、南鐮壹片

右ハ御檢使之節宿其外何角造左二付、心付、

嶋ノ関

油屋作兵衛

一、酒貳升、切手

右ハ御檢使之節かりもの其外乗り合旅人へ為喰候香之もの杯も
らい候二付、

松本浦

舟年寄

一、酒三升

右ハ矢橋浦迄小船二而加子参り呉候二付、何角挨拶旁孫右衛門
持参致候事、

上下小船中

一、酒三升、切手

右ハ惣代両人格別世話いたし候二付、

上下小船加子中

一、鳥目壹貫文

右ハ酒代与して遣ス、

四廻り加子中

一、鳥目五百文

右同断

矢橋浦

役人中

一、酒五升

するめ三把

一、酒壹斗

同

するめ五把

加子中

右者廿五日太郎兵衛為挨拶持参致ス、

一、是ハ書状ヲ以挨拶致し候事、

但し五月廿六日山田魚船二遣ス、

北山田浦へ役人中
同問屋中へ

忠兵衛

諸入用買もの之分

小船入

一、六貫六百三十六文

ぜゝ屋伊八

右ハ乗合旅人廿七分、一日壹人二付百八拾文つゝ、并翌朝一

飯共

一、八百文

古長持壹本

一、六拾四文

嶋ノ関

一、壹貫文

油屋作兵衛

一、壹貫文

繩むしろ代

一、壹貫文

小船入小揚雇

一、壹貫文

幸内

一、壹貫文

与兵衛

一、壹貫文

松本山

一、壹貫文

長兵衛

一、壹貫文

いせ屋

一、壹貫文

甚兵衛

右ハ死骸埋料

一、四百四十三文

一、四百四十三文

右ハ白米四升、ここの者^(物)五十

是ハ乗合旅人嶋ノ関着船之節にぎり食ニ而喰せ候分、

一、貳百十文

右ハ白米四升にきり食世話料

小船入

船屋平六

平蔵町上組

一、六拾八文

近江屋伊助

右ハ割木貳束代

平蔵町下組

一、六拾八文

鍵屋源七

右ハ割木貳束、小柴貳束代

矢橋浦

一、壹百七十四文

浜屋治郎助

右ハ小船入加子共、矢橋浦ニ而酒飯代、

但し此分差掛り候義故、此度ハ相払申候へ共、重而ハ其しきニ

ハ相糺候上相払可申候事、

一、六十匁

丁子屋九兵衛

右ハ矢橋浦船年寄兩人、旅人宿へ見舞遣候菓子代、

一、百十文

柳屋治兵衛

右ハそ^六うり七足代

右ニ付諸方ハ見舞并到来もの扣

五月廿日

一、酒貳升

松本浦

但し見舞舟年寄長兵衛、長二郎參ル、

舟持中

廿二日

一、酒五升

矢橋浦

右ハ舟持之内安左衛門持參ニ而、

舟持中

廿三日

一、諸白三升、切手

北山田浦

并二問屋中ハ

御所司代様御越被遊候節、金蔵堀掃除之義御尋ニ付、町方御役所へ
奉差上候書付之写、左之通、

就御尋乍恐口上書

去ル未八月、御所司代様御越可被遊筈ニ付、字金蔵堀中掃除百艘方
へ被仰付候得共、私共仕来り之義ニ而ハ無之候ニ付、御断申上候処
御蔵町、蔵橋町へ被仰渡、是又御断被申上候趣ニ而、其節御糺之上
何れ共可被仰付思召ニ御座候得共、差懸り候御用向ニ付、右両町并
百艘方共立会仕置候様、以来之義ハ追而御調之上可被仰付旨、御利
解ヲ以被仰付、三方立会仕候処、無間も当月六日御同所様御越之節
も前同様三方へ被仰付、是又相勤候御義ニ御座候処、今度御尋ニ付
左ニ奉申上候、

百艘仲間之義者、右御用御役船差出し、役人共付添相勤候義ニ而、
右躰之節者甚混雜仕罷在、加子共無人ニ御座候得者、尾花川町之も
の共助加子ニ遣ひ候仕来りニ御座候へハ、右町内へも別段綱引被仰
付候ニ付、成丈ケ遣ハし不申様除置候得共、堀掃除等被仰付候得者
右町内之外ニ相頼候手当も無之候ニ付、既当五月四日与両度被仰付
候節も、無抛右町内之もの共相頼候故、右町内ニおゐても甚迷惑仕
候御義御座候、且又掃除人足計差出し置候而ハ不行届候ニ付、仲間
年寄之内壱人、抱歩キ壱人付添罷出差図仕候ニ付、甚以難義迷惑仕候、
別而津内関々堀浚等ハ、其懸り町々へ引受被浚立候仕来りニ付、既
去ル子年早水ニ付、堀さらへ之節も其懸り町々ハ被相浚申候、尤平

生船着荷物積揚仕候船方之義二候故、為親積私共中間方も罷出世話等仕候義二御座候得共、全浚立之義ハ其懸り町々引受之義二付、歩割人夫又者割賦銀等差出し候例、一切無御座候、且右子年字生洲町堀之義ハ、古望仁兵衛方築地二件二而浚相延有之候処、一件相濟候上、右堀懸り橋本町、坂本町被召出被仰渡、右町々方浚立被申候、依之都而堀々二御建有之候、塵あくたの御制札も懸り之町々方御願被申上候御義御座候得者、乍恐以来金藏堀掃除之義、私共義ハ御免除被成下候様、幾重二も奉願上候、願之通御許容被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

百艘船年寄

寛政十式年

与次兵衛印

申五月晦日

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付町方御役所御懸り石丸三平様へ奉差上候処、何角御尋之上追而御沙汰可在之趣被仰聞候事、

乍恐口上書

一、御所司代様御順見之節、金藏堀掃除之義此度町方從御役所御尋被遊候二付、此段御届ケ申上候、則左二写書奉御高覧入候、

就御尋乍恐口上書

去ル未八月 御所司代様御越可被遊筈二付、字金藏堀中掃除、百艘方へ被仰付候得共、私共仕来り之義二而者無之候二付、御断申上候処、御蔵町、蔵橋町へ被仰渡、是又御断被申上候趣二而、其節御糺之上、何れ共可被為仰付思召二御座候得共、差懸り候御用向二付、右両町并百艘方共立会仕置候様、以来之義者追而御調之上可被仰付旨、御利解ヲ以被仰付、三方立会仕候処、無間も当月六日御同所様御越之

節も、前同様三方へ被仰付、是又相勤候御義二御座候処、今度御尋二付、左二奉申上候、

百艘仲間之義者、右御用御役船差出人共付添相勤候義二而、右躰之節ハ甚混雜仕罷在、加子共無人二御座候得者、尾花川町之もの共助加子二遣ハし候ハ仕来り御座候得共、右町内へも別段綱引被仰付候二付、成丈ケ遣ハし不申様除置候へ共、堀掃除等被仰付候得ハ、右町内之外二相頼候手当も無之候二付、既当五月四日与両度被仰付候節も、無扨右町内之もの共相頼候故、右町内二おゐても甚迷惑仕候御義御座候、且又掃除人足計差出置候而ハ不行届候二付、仲間年寄之内吉人、抱歩キ吉人付添罷出、差函仕候二付、甚以難義迷惑仕候、別而津内関々堀浚等ハ其懸り町々へ引受被浚立候仕来二付、既去ル子年早水二付堀浚之節も、其懸り町々方被相浚申候、尤平生船着荷物積揚仕候船方之義二候故、為親積私共中間方も罷出世話等仕候義二御座候得共、全浚立之義ハ其懸り町々引受候義二付、歩割人夫又ハ割賦銀等差出候例一切無御座候、且右子年字生洲町堀之義ハ、古望仁兵衛築地一件二而浚相延有之候処、一件相濟候上右堀懸り橋本町、坂本町被召出被仰渡、右町々方浚立被申候、依之都而堀々二御建有之候塵あくたの御制札も懸り之町々方御願被申上候御義御座候得者、乍恐以来金藏堀掃除之義、私共義ハ御免除被成下候様幾重二も奉願上候、願之通御許容被成下候ハ、難在可奉存候、以上、

百艘船年寄

寛政十式年

与次兵衛印

申五月晦日

太郎兵衛印

大津

御役所

右書付船方御懸り役内堀様へ奉差上候処、当町方御役所方被仰渡候

趣相届ケ候様被仰聞候事、

一、三井寺より例之通暑氣見舞として素麵式拾わ到来、六月朔日、

一、五月廿一日、せたより石山開帳無滞相濟候挨拶として夕照式升、但

銘酒、蜆三升計、

六月四日、当所暑氣御伺

石原庄三郎様

素麵三拾把、白台、包のし

御町役御元メ

石丸三平様

同

福永久次右衛門様

同

内藤伍左衛門様

同

七里左六郎様

御町懸り

芝山泰蔵様

船方

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

右七軒江素麵式拾把宛、包のし

御組頭

佐久間正蔵様

同

赤井平六様

御目附

高橋角左衛門様

同

多胡甚助様

同

岡本多内様

右五軒江素麵拾五把宛、包のし添

右之外御門内手代衆、御組屋敷不残、北出雲平殿江手札計二而相勤ル、与次兵衛、勤三郎、供新八

六月五日、京都暑中御伺

西御奉行

曲淵和泉守様 金子式百足

目録台 下ケ札付

御用人

藤田一市様

御取次 佐藤左一郎様

星野半右衛門様

同 多仲様

原田仙助様

矢沢龍右衛門様

鈴木順平様

芝 幸平様

右九軒八名札計

椎名市右衛門様

東御奉行

松下信濃守様

右八江戸表へ御下之上御役御免二而、未跡御代り御登り無之故、相勤不申候事、

西公事方

渡邊甚五右衛門様

東公事方

真野嘉右衛門様

深谷平左衛門様

四方田重丞様

不破伊左衛門様

上田弥右衛門様

入江吉兵衛様

木村八十郎様

本多金右衛門様

右九軒八銀壹兩宛

同公事下

同公事下

千賀与惣右衛門様

寺田官左衛門様

久下政右衛門様

末吉新五郎様

浅賀卯兵衛様

森 義左衛門様

上田八藏様

中川定右衛門様

菊地治左衛門様

同 左左衛門様

柏原治部右衛門様

榎橋平蔵様

芝 嘉右衛門様

平尾安左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

右拾五軒八名札計

上町代

田内与助殿

若狭屋八兵衛殿

右八銀三匁

右八差鯖式刺

東公事方

本多金右衛門様 金子百疋

右八御役被蒙仰候二付恐悦申上候、

右之通太郎兵衛、孫右衛門相勤申候、供弥兵衛

一、例年之通湖上船増減相改帳面記、来月朔日〆十日迄二可致持参候、
尤是迄帳面落等二相成有之、去秋中改候分八巨細二相調、不残可書
出候、

一、貸船之義今以混雜いたし不取締二付、貸船屋共、糺問之上、前々より

申渡置候趣堅ク可相守旨申し渡候処、貸借之訳度毎相届候義ハ難渋
之趣相聞候付、双方申合壹ケ年二両度宛、無遺失可相届旨申渡候間、
是迄之通借貸之訳不相届義ハ勿論、浦二より片届又ハ双方より相届
候而も、各別日数隔り、届書差出候而ハ石付寸尺等相違いたし候せつ、
糺方難出来取調方差つかへ、且ハ一ケ年も借船いたし候而も貸船屋
とも与借り主相對而巳二而、其浦役人江ハ不相届も有之二付、自然
与帳面落二も相成、難破船之節迎も差支候間、当帳面差出候、以来
ハ右躰疎二不相心得、其時々庄屋、船年寄之内江相届、貸船屋連印
之書付二右庄屋、船年寄之内奥印ヲ以壹ケ年二壹両度宛二而も、無
相違可相届候、

但前々申渡之趣相守、是迄貸借之度毎相届ケ候浦方ハ、本文之趣
意不抱、仕来之通取計可申候、尤連印奥書等二而相届候義差支候
場所ハ、届日限各別相違不致様申^{アワセ}含、同日等二可相届候、

一、彦根領内二而作事并借り船等一切致間敷旨、前々より申渡置候処、
取留又候義ハ無之候得共、北浦辺二ハ右躰之義も有之哉之風聞も相
聞候間、万一右躰之義有之段、於相違ハ夫々可及吟味条、浦々共不
取締之義無之様可致候、

右之趣得其意、此配符請印いたし無遲滞早々順達、留り所より可相
届候、以上、

大津

御印 申六月十七日 御役所御印

大津浦始り

長沢浦迄

右浦々

庄屋

船年寄

右之御配符御役所より参り候二付、坂本浦江遣入、使

一、右之御配符之趣一箱、東浦行ハ松本浦江向ケ遣入、

六月十八日使則坂本伊助与申仁へ相渡入、但廻り平兵衛ニ為持遣入、

右之趣貸船やへ及通達候事、

一、六月十四日、小船入新八舟^{仁右衛門}ニ而御手代内藤伍左衛門様石山へ御

越被成候砌、勢多橋杭へ船行当テ少々かけ取候得共、其趣^{備方}二下り候

所、同所右船へ以使被届ケ候故、則加子新兵衛断参り候処、少々

損シも有之、別而音嚴敷、若外方御役方へ相聞江候義も有之候而ハ

如何存候、何れ近々御見分有之、其節御吟味無之候ハ、重々義二候

自然御目二掛り御尋御座候ハ、随分取計可致候趣ニ而相濟不申由

十六日届ケニ参り候故、同日夕方孫右衛門勢田へ参り、庄屋又右衛門

年寄傳右衛門兩人へ断旁々致参上旨申入候処、右兩人被申候者、前

文之通ニ而膳所より月二兩度宛、大目附衆御見分御座候、其節御見

当り被成御尋御座候ハ、随分陳申上候得共、只今御答難申上、猶

御見分相濟候ハ、否御返事申上候、且又此後御通船之砌ハ前広ニ

御呼被下、若出合之者無之候節ハ、橋上へ船御附ケ御案内被下候ハ、

何れ成共罷出御世話可致候、橋も次第二古相成、少々之事ニ而も補

強御座候間、此段舟頭中へも御申入置可被成御座候、何れ宜敷頼入

置候事、

一、先達而被仰渡候吾妻川浚之義、追々町方浚相濟候二付、仲間持場等

之義も町方立会場ニ而三尺堀二付、右二准し浚方之義、則此度請負

人馬場村清右衛門ニ出来御見分相濟候迄之処、四貫五百文ニ而請負

相渡し置候処、無程浚立候二付、右清右衛門ハ六月廿一日ニ御役所

へ出来御見分之義相願候処、追而御見分有之事、

右浚賃錢四ノ五百文

六月廿一日ニ相渡し、則請取書取置候事、

一、下堅田町白銀屋陸助方裏ニ有之候蔵、今度北へ式間建出し申度段、

右陸助方ハ相達被申候二付、仲間方ハ兩三人も場所見改メニ参り候

処、今度之義ハ格別之差支ニ不相成趣二付、双方熟談之上書付被差入、

普請取懸り被申候、則書付之写、左之通、

差出し置書付之事

一、我等裏ニ有之候蔵、此度北へ式間建出し仕候、尤我等所持沽券地之

内ニ候得共、都而湖水端右躰取繕候節ハ、其御仲間へ前以相断候様

被仰聞、致承知各々方へ相達候処、則場所及見与して御越之上差支

も無之趣二付、普請取掛り申候、尚此後之処ハ船積荷物通路之差障

りニ不相成様可致旨被仰聞致承知候、依之書付差出し置申候、以上、

寛政十式年

申六月

請人

大坂屋六郎兵衛印

百艘御仲中

右書付六月廿二日陸助殿持参被致候二付、則本紙ハ空地堀一件之箱

へ入置候事、

一、六月廿六日、吾妻川浚出来為御見分、町掛り石丸三平様御組川嶋文

左衛門様、町代堀猪三郎殿、右御越被成候二付、則仲間方太郎兵衛

罷出候処、御見分之上被仰聞候ハ、殊外川下も之処、川床高ク相見

へ候趣被仰聞候二付、請負清右衛門御答申上候ハ、先達而相浚候節

ハ甚水込在之、難堀立候故右躰致置候趣申之候二付、又々此方へ御

尋被成候二付、御答申上候ハ、右清右衛門申上候通、先達而相浚候節ハ甚水込在之、此節二至り候而ハ照統候故、次第二水引浪打寄せ候二付、右躰川下も高ク相成候趣申上候処、石丸様被仰聞候ハ、幸此節水引申候事二候得へハ、川床高ク候処、此上相浚候様被渡候二付、則請負清右衛門申上候ハ、今日二而も相浚候様御請申上候二付、御見分相濟申候、□□尤出水御見分相濟候迄之請負故、如此御請申上候事、

一、七月朔日、荷問屋惣代として近江屋藤左衛門被參、此節錢相場少し高直二付、聊用捨預り度旨申被參候二付、如何之様子承り候処、此節相場九匁六分四り、売相場ハ六分二御座候間、已来相場二取呉候様被申候付、此方ハ申聞候者、与次兵衛、治郎左衛門、太郎兵衛立会成程此節聊相場宜候へとも、殊二金相場殊之外高直二付、錢相場も夫二なそらへ候迄之事二付、既而替方二も相場下さや二而売買いたし程之事二候へハ、此方二も売ハ六分二候へとも、五分少々取集候様申遣候、しかし已来金、錢とも相場二被相頼候ハ、此度迎も承知可致候へとも、此度計上さや之相場之取集メ候而ハ不承知之旨申候所、藤左衛門被申候ハ、已来其趣二御座候間、此度計二限り候義二而ハ無御座候段、被申聞候付、左候ハ、問屋中間内へ不残触可被申候、兼而此方二も其旨承知致可申候旨申遣候事、

此義ハ前日晦日中保町酒屋甚兵衛地通ひ之分相場違ひ候旨二付、
発端ハ酒甚方発り候事二御座候、藤左衛門も同様申被居候、

当所御屋敷七夕礼覚

一、石原庄三郎様

青銅一貫文

元々

福永久治右衛門様

石丸三平様

内藤伍左衛門様

町方

元々

芝山泰蔵様

七里左六郎様

舟方

内堀繁太様

勝手方

山田仲助様

鳥目五百文

右之外御門内手代衆、組やしき小頭目付其外不残、北出雲平殿

右之分名札計二而相勤ル、年寄与次兵衛、六兵衛、とも和助

一、六月十四日、石山行仁右衛門船、せた橋杭江スレ候処断も不申其儘舟下ケ候二付、せた石山迄人差越候二付、加子五兵衛、新兵衛、松之助たんく断申候へとも、せた役人とも承知不致、勿論当会所へも右かことも何之沙汰も不致候内、十六日其趣下承り候二付、早束孫右衛門を以せた江挨拶二遣候処、石山開帳相濟候後も何ノ沙汰不致候由二而、せた二ハ少不足二存居候様子、其後又候せたる書状を以呼二越し、又候孫右衛門參候へとも相濟候義二も無之処、七月五日せた傳左衛門船帳納序上津いたし、孫右衛門方へ參弥一件相濟候間、神領、鳥川江酒一樽つゝ遣呉候様申居候間、翌日七日孫右衛門神領、鳥川、橋本へ酒式升つゝ遣候、

右之趣三人之加子之内、五兵衛ハ船稼と申旁不埒二付、船持、おしでのり共差留メ、新兵衛、松之助ハおしでのり計二付持不相成様上組仁右衛門呼二遣し右之段申聞候、

七月八日

都而石山行登下りとも鳥川せた小橋の広間通行可致、大橋ハ通舟致間敷旨申付置、上組仁右衛門、

覚

一、金子五百足

一、銀子壹枚

右者從御本山被下置、慥ニ受取申候、以上、

寛政十弐年

百艘年寄印

申七月十日

御講中

釜屋藤兵衛殿

東御奉行

一、森川越前守様御登、

右十四日夕石部御泊り二付、草津迄出迎、尤石場出迎共孫右衛門、

喜三郎相勤事、供和助、

十五日夕当駅御泊り、十六日朝御出立、見立八町上二而、九兵衛、

勘三郎相勤、供和助、但若殿森川主善様、御令弟同富之助様、石場

二而手札差出入、

七月廿六日、京都東御奉行様御初入恐悦御受被成候二付、与次兵衛、

九兵衛、供和助、前日^方登京、

東御奉行

一、森川越前守様

金子貳百足

目録台
下ケ札付

内屋敷御家中八名札計二而相勤申候、

上町代田内彦助殿へ銀壹両、

右者恐悦之節世話被致候二付如此、

乍恐口上書

一、当津橋本町大橋詰ニ御建被下置候船御高札、御印紙、此度東御奉行様御替ニ付御書替頂戴仕度候二付、為御願今日京都西御役所へ持参仕候二付、此段御届ケ奉申上候、以上、

百艘船年寄

太郎兵衛印

寛政十弐年

申七月廿五日

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届ケ申上候、

但し御目附御三人、橋本町年寄、小歩へ八口上届ケ二而候、

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰御建被下置候船御高札、御印紙御書替頂戴仕度奉願上候、則先達而被下置候御高札、御印紙奉御高覧入候、尤是迄之御高札、御印紙共前々之通被下置候様奉願上候、以上、

大津百艘年寄

与次兵衛印

九兵衛印

寛政十二年

申七月廿六日

御奉行様

右西御役所御廊下二而御高札、御印紙、願書相添、御高札御文面難見へ相成申候二付、御し（自気）らけ御書替被下置候様願上申候、暫相待可申候被仰、御入被成候跡へ、入江吉兵衛様御出被成、御高札、御印紙慥ニ受取追而沙汰可致候間、上ケ置帰津可致候様被仰渡候事、

一、七月廿日、町代猪三郎殿伯父宇兵衛殿死去二付、為香典白銀一兩遣し申候、

当津八朔御礼

石原庄三郎様

金子貳百足

目録台、下ヶ札付

元

石丸三平様

福永久次右衛門様

内藤伍左衛門様

七里左六郎様

町懸り

芝山泰蔵様

勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

右七軒金子百足つゝ

小頭

佐久間正蔵様

赤井平六様

目附

高橋角左衛門様

多胡甚助様

岡本多内様

惣年寄

小野又三郎殿

矢しま真十郎殿

町代

堀 伊三郎殿
遠藤仁右衛門殿

右拾軒銀壹両つゝ

肝煎

吉本弥四郎殿

山本倭次郎殿

右鳥目貳拾足つゝ

小使 梅八殿

右三人鳥目貳百文つゝ

白崎久太夫様

御蔵番三人

組屋敷不残、其内屋敷、平蔵町年寄

右者名札計二而相勤、

歩判貳両壹歩 五百文 一

銀壹両拾ヶ 貳百文 六

右之通太郎兵衛、九兵衛相勤申候、供新八

京都八朔御礼

西御奉行

曲淵和泉守様

金子三百足

目録台
下ヶ札付

御用人

藤田一郎様

星野半右衛門様

原田仙助様

鈴木順平様

御取次

佐藤佐一郎様

同 多仲様

矢沢龍右衛門様

芝 幸平様

椎名市右衛門様

右九軒銀壹兩つゝ

東御奉行

森川越前守様

御用人

小柴宗右衛門様

中川億右衛門様

志川藤左衛門様

御勝手御用人

村田忠兵衛様

右八軒へ銀壹兩つゝ

西御公事方

渡邊甚五左衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

本田金右衛門様

右九軒へ百疋つゝ

西公事下

千賀与三右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八蔵様

菊地治左衛門様

柏原治部右衛門様

芝 嘉左衛門様

金子三百疋 目錄台
下ヶ札付

御取次

鈴木又兵衛様

中村官兵衛様

石川与左衛門様

村田直右衛門様

東御公事方

真野嘉右衛門様

四方田重丞様

上田弥右衛門様

木村八十郎様

(東カ)
西公事下

寺田官左衛門様

末吉新五郎様

喜多尾八郎右衛門様

森 儀左衛門様

中川定右衛門様

中川左左衛門様

櫛橋平蔵様

平尾安左衛門様

右拾四軒へ銀壹兩つゝ

上町代田内与助殿銀貳兩

下町代藤沢傳六殿貳百文

上町代中へ 五百文

小番中へ 三百文

東西仲番中へ 三百文つゝ

追分丸屋四郎兵衛へ百文

山科大津屋孫右衛門へ百文

×金三兩貳三步

銀貳兩 壹つ

銀壹兩 三十二

披露ふた 貳枚

下ヶ札 貳枚

差出し 貳枚

筆工奥田九右衛門殿銀壹兩

下町代藤村左市殿貳百文

下町代中へ 五百文

東西御門番へ 三百文つゝ

鍵屋佐助へ 三百文

同人下女中へ 貳百文

五百文貳つ

三百文六つ

貳百文三つ

百文 貳つ

右之通与次兵衛、孫右衛門相勤申候、供弥兵衛、荷物中介

一、八月四日、神泉苑町宿鍵屋佐助へ手紙被差越候、明五日九つ時与次兵衛、九兵衛西御役所江罷出候様申参候二付、翌早朝与次兵衛、孫右衛門、供和助召連上京致申候、於西御廊下二公事方与力入江吉兵衛様、同心芝嘉左衛門様御印紙、御高札御渡被成、御文言之訳俱二御尋被成、則受取一札御取被成候事、
為御礼と東西御役所江

西

曲淵和泉守様

東

森川越前守様 金貳百疋宛

東西公事方九軒江金百疋

右之内御懸り

入江吉兵衛様、別二金百疋

御懸り同心公事下

芝 嘉左衛門様、金百疋

右御同人御書役二付、別二金百疋

東御屈之節公事下

中川定右衛門様、銀壹兩

東御役所江御届書之覚

乍恐口上書

一、大津橋本町大橋詰二御建被下置候船御高札、御印紙御書替被成下候様、先達而西御役所江奉願上候処、右御高札、御印紙頂戴仕難有奉存候、乍恐此段奉御届申上候、已上、

大津百艘年寄

寛政十二年

与次兵衛印

申八月五日

孫右衛門印

御奉行様

右奉御届申上候処、中川定右衛門様御出被成御聞濟候、

×歩判十六切、銀壹兩一、下ケ札二枚、手ふた四枚

右首尾能相濟罷歸り候処、御高札懸場屋根殊之外破損二および候二

付、此段当御役所江御届ケ申候一件、左之通、

八月八日、式升樽壹つ、大工与三兵衛方到来、

但御高札場所屋根普請二付、祝儀として如此、

常楽寺浦九月ふまへ付込船九艘之儀、昨年八銘々浦方之渡世も致候

所、去ル未秋八幡大津や宅二而八幡衆中へ引合之趣二而ハ、当冬ハ右九艘之船常楽寺浦へ名前差出し候上ハ、其船之外浦渡世難成候二付、片田浦、当浦とも差支二付、片田浦へ右面談致度候二付、八月十二日右之儀二付御上津被下哉、罷下り可申哉、否被申越候様書面遣候事、

一、船御高札并御印紙共、当月五日二京都西御役所二而頂戴仕罷歸り候得共、御高札場屋根殊之外及破損候故、七日より普請取掛り候処、十四日迄出来仕候二付、十五日当津御役所へ御届奉申上候書付之写、左之通、尤普請届ケハ別段致し不申候事、

乍恐口上書

一、先達而御訴奉申上候船御高札、御印紙、京都西御役所二而頂戴仕罷歸り候二付、此段御届奉申上候、以上、

百艘年寄

寛政十三年

太郎兵衛印

申八月十五日

大津

御役所

右之通町方御役所へ御届奉申上候事、

当所御目附方

高橋角左衛門様

多胡甚助様

岡本多内様

×

右三軒へ白銀壹兩宛遣ス、

橋本町年寄へ口上届ケ計、

同町小歩キへ先格二付、鳥目式百文遣入、
右之通太郎兵衛相勤申候事、

一、当所殿様御検見とし而御越被遊候二付、先触写左之通、

覺

一、山駕籠 壹挺

此人足三人

一、人足 四人

内内掛式荷、合羽籠壹ケ、步卒持壹人

×人足七人

右者御代官明後廿日曉七つ時大津出立、矢橋迄乗船二而野洲郡北桜村為検見被罷越、日帰り候条書面之人足往返共御定之賃錢請取之、無差支差出可被申候、此先触無遲滞継送、北桜村を可被相返候、以上、

石原庄三郎手代

割印 八月十八日

内藤伍左衛門印

百艘、矢橋、草津人足用意二不及候、守山、北桜村

右宿々問屋年寄中

追而北桜村を例年之通、守山宿迄迎人足可差出候、

一、明後廿日若雨天二候ハ、日送り之積二可被相心得候、以上、

右御先触十八日巳刻從御役所呼二参り、則孫右衛門被参、右先触即刻矢橋浦へ為持遣入、則廻り嘉兵衛二為持遣入、

一、八月十八日二而無之歟、相改可申候事廿八日、御役所を御召二付次郎左衛門罷出候処、御町役芝山泰藏様被仰候二ハ、当所為御順見明廿九日御所司代様御越被遊候、夫二付金藏堀内御蔵前辺二浮流有之候塵あくた穢物類掃除入用之船差出候様、尤取捨人足ハ外方へ手

当申付候、尤右掃除之儀前兩度差懸り、其仲間并御蔵町、蔵橋町三方立会仕置候様申渡候処、何れも迷惑仕候段申立候得共、時二望差懸り候儀二付、三ヶ所割合二而いたし候儀故、其後三ヶ所を書付差出糺中二候処、猶又此度も差懸り候二付如此申付候へ共、後々例二相成候儀二而ハ無之、一躰之儀ハ御調之上、追而可被仰渡事二候間、其意を弁、此度之船差出候様被仰候二付御請申上、則、右舟相廻し候節御役所裏石垣際へ打寄せ有之候塵あくた類も取捨させ呉候様と被仰候二付御請申上、則尾花川へ艀壹艘、人式人申遣、御役所裏側のごとく取捨させ、其後金藏堀江相廻し、御蔵町、蔵橋町出人足と俱々取捨申候事、

しかし廿九日ハ御延引二相成、跡御日限いまた相知レ不申候事、

一、三百文 人足式人代、壹人二百四十八文つゝ、

一、百文 艀壹艘舟ちん

×四百文 尾花川へ遣入、

但廿八日昼九つ時を暮前迄半日分二付、如此丸一日分二候ハ、人壹人二式百文を式百五拾文位、時ノ見合二而可遣事、

一、別二船方御懸り内堀繁太様を被仰渡候二ハ、是迄共御所司代様御順見御上事被遊候節ハ、金藏堀内二ハ舟差置不申、勿論肥シ舟之儀ハ日中通行迄も差留候儀二候へ共、此度ハ其儀二不及、尤御蔵へ御入被遊候事二候へハ、御目障二相成不申様、舟共西ノ方へ並能繋置、御通り之節加子共不行跡無之様相締可申、且又御帰りハ扇屋関御通り被遊候積二候間、肥し舟之儀ハ金藏并扇屋関二ヶ所へハ、堅ク差入申間敷、其外関々浜側通行ハ不苦候間、其旨二存取計可致様被仰渡候二付、即刻坂本并さい川、尾花川、観音寺町、北保町、別所、大門躰方へ其段相達、猶翌日金藏、扇屋関之取締等手当致置候処、御延引之旨申参不用二相成候二付、右躰方へも御延引之段申遣候事、

一、八月廿八日暮過、尾花川二而伊崎寺持體二人のせ帰り候を、同町之もの見咎、のりまへ差出候様相對二及候処、かさつ法外等申之候二付、召連參候由二而、当舟会所へつれ来り被申候二付相糺候処、右舟頭ハ彦根領新田村喜藏と申もの二而、伊崎寺へ被頼右寺方京都之病人迎二參候もの乗せ、今朝尾花川へ着、則先刻病人并迎人共京都方被出、のせ帰り候処、のりまへ差出候様と被申候得共、左様成訳合一向存不申、勿論途中何方二而も彼是申懸候儀有之候ハ、寺へ連レ歸り候様寺方申越被置候二付、用向候ハ、寺へ可被来と申候と右喜藏申候故、此方方申二ハ、夫ハ以之外の申口也、然ル上ハ船并のり人共差留置、其段御支配御役所へ御伺御下知次第二可致旨申為聞候処、病人容躰も甚不宣差急キ候処、右躰二被成下候而ハ一向難渋之由相歎候故、然ハ其方之心得違不調法二而、全寺方二ハ後日被申立候趣意ハ無之儀二候間、隱便ニして早々歸り候様被相頼候儀哉と尋候処、随分其通り之儀二御座候二付、何分御断申上候間、隱便二御返し被下度と被申之候故、惣人数四人之内式人ハ舟頭二引、残式人分のりまへ六拾文取之、但し荷物一切なし、以来之儀等申為聞為相濟返し置候事、

一、錢百文 尾花川見付人江、心付遣ス、

ノ

九月三日

松茸貳拾本、石山村庄屋方到来いたし候、

一、八月十七日朝、若狭藏裏仮橋杭二男死骸浮止り在之候二付、則渋川屋六兵衛義右藏所へ先代方立入申候二付、早速呼二被遣六兵衛參候

処、右藏所役人義俄直四郎殿、榊原金五兵衛殿御両人御立会之上二而被仰聞候ハ、今朝見請候処、当屋敷裏仮橋杭二男死骸浮止り在之候二付、取計方之義段々相調へ見候処、是まで右躰之義ハ無御座候得共、先年貴殿父孫九郎存生之節相尋置候処、孫九郎被申候ハ、以来右躰之義出来候節ハ百艘仲間方へ熟魂ヲ以相頼可申候様、可然趣先役之もの承之候而、則藏所留メ書ニ記シ置候間、何卒百艘仲間方へ此度之義引請世話致し被呉候様、勿論諸入用等之義ハ藏所方差出し可申候間、此段何分貴殿へ相頼申度趣被仰聞候二付、無抛義二付六兵衛右之趣仲間方へ相談申候二付、一統相談仕候処、右躰之義容易ニ引請候而ハ、先達而坂本町裏一件後之振合ニも相背、以来類例ニ相成候而ハ面働之趣二付、此度之義ハ御断申上候様可然、乍併外藏所方ハ違、格別所縁も在之候得ハ、達而御頼候義ニ御座候得ハ、右藏所方御頼通書付二而も申し請候上、内々御役所へ右之趣ヲ以御窺之上、此度之義引請可申趣相談治定致候二付、則書付下書尙通相認メ懷中致候而、右引合ニ太郎兵衛、六兵衛与同道二而右藏所へ參候処、折節役頭直四郎殿御留主二付、御相役金五兵衛殿へ得御意返答申上候ハ、先刻六兵衛ヲ以被仰聞候趣六兵衛方委細承候処、先年孫九郎存生之節以来、右躰之義出来候節ハ私共仲間へ御熟魂之上、何角御頼被成候様可然趣孫九郎申上置候二付、其意を以此度之義被仰聞候得共、其時節与ハ当時二而ハ振合等も違、別而近年浜側二而右躰之義二付故障出来候後之振合ニ相背候得者、此度之義引請御世話申上候而ハ外之類例等も出来候様相成り、其段何共歎ケ敷存候間、此度之義御断申上候趣及返答候処、金五兵衛殿被仰聞候ハ、委細被仰□候処、随分御尤之趣承知致候、乍併都而湖辺二而右躰之義ハ其御仲間方へ及相談候へハ、宜敷御取計可被下様兼而見聞致候二付御頼申上候処、御仲間方之差支ニ相成り候義、達而御頼申上候義

も氣毒存候得共、是迄当蔵所^右右躰之義取計致候例も無御座候得ハ、此上八国本へ申遣候様相成り候而ハ甚以手間取り、何共困入心配致し罷在候間、此度之義ハ格別御熟魂ヲ以御頼申事二候間、何卒可然様取計致候様分而御頼二付、難黙止義故左様被仰聞候義二御座候ハ、右御頼通書付御認メ被成候而御渡し被下候ハ、其意ヲ以当所御役所へ内々御窺之上、公辺向之処引請御世話可申上趣申上候処、随分書付二而も差出し可申候、乍併此方^右相認メ遣し候而も、御仲間方之御趣意之程難計候得ハ、却而手間取申候趣被仰聞候二付、左様御座候ハ、乍愚案仲間方二而書取致置候下書差出し申候処、御熟覽之上被仰聞候ハ、随分御尤之書付二而、此方二差支之筋も無御座候得共、只今同役義も他出いたし候間、早速呼二遣し申談候上、追付返答可申趣被仰聞候二付、兩人共帰宅致し相待居候処、無程右書付本紙左之通相認メ、六兵衛方へ為持被遣候事、

相渡申置候書付之覚

当屋敷敷掛出し仮橋杭二、昨夜中何方^右参候哉、男死骸浮止り居候処、各々方へ引請被呉、御公辺表為相濟被呉度、尤諸人用之義ハ蔵所^右差出し、勿論以来例格二ハ不致、外々之頼申立二不相成様差心得可申候段、誠ニ熟魂ヲ以頼入預御世話二候事故、後々跡役二おゐても、前書之通相弁居候様可致候間、於此義二ハ安心可被呉候、以上、

寛政十式庚申八月十七日

榊原金五兵衛印

儀俄直四郎印

百艘年寄中

右書付六兵衛仲間へ持参致候二付、早速年寄与次兵衛、太郎兵衛兩人町方御役所へ御届参候処、則町代部屋二惣年寄小野宗三郎殿詰合被居候二付、右之趣委細申談候処、宗三郎心得ヲ以内々奥へ御窺申上被呉候処、則石丸様被仰聞候ハ、右躰之義百艘方引請候而ハ、先

達而一件後之振合二相背候、乍併無抛熟魂ヲ以致候義二御座候ハ、右死骸蔵所裏二在之候而ハ面働之趣、内々二而百艘持場所へ引取百艘限二而相届候様可然御内意被仰聞候二付、左之通書付ヲ以御届ケ奉申上候事、

乍恐口上書

一、百艘請地字小船入浜先キ男死骸流寄在之候を、仲間小歩キ嘉兵衛与申もの只今見付、私共へ為相知候二付、立会見請候処、相違無御座候二付、此段御届奉申上候、以上、

申八月十七日

百艘仲間

年寄与次兵衛印

同 太郎兵衛印

大津

御役所

右書付ヲ以御届奉申上候処、追付御検使差遣し可申候趣被仰渡候事、

一、右之通町方御役所へ御届奉申上候趣、船方御掛り内堀様へ口上二而年寄与次兵衛御届奉申上候事、

一、御目附三軒へ太郎兵衛口上二而、右之段御届申上候事、

一、右死骸早速小船入仲間持場所へ引揚置申候処、御検使与して御目附多胡甚助様、立会川寫文左衛門様、町代遠藤仁右衛門殿御出被成死骸御吟味之上小船入会所二而、年寄与次兵衛、太郎兵衛、見付人廻り嘉兵衛、右三人江外二何之心当りも無御座候哉与御尋二付、一切何之心当りも無之趣申上候二付、早速御引取之上、左之通口書御認メ被成、御役所小頭部屋二而印形御取被成候事、

差上申一札

一、百艘請地字小船入浜先キ、年来四拾才計之坊主死骸浮在之候二付、其段百艘仲間年寄^右御訴奉申上候処、為御検使多胡甚助殿、川寫文

左衛門殿御出、町代仁右衛門立会死骸御改之上、私共被召呼様子御
 糺被成候二付、見付人嘉兵衛申上候通、私共へ為知候二付早速立会
 見届候処、年頃凡四拾才計与相見へ、見馴不申坊主裸身二而死骸水
 中二浮在之、尤日数余程相立候様子相見へ候二付、近辺穿鑿仕候得共、
 近頃何之怪敷風聞も無御座候ハ、若者他浦二而怪我二はまり溺死
 仕候処、昨日之風波二而死骸右場所へ流寄り候義二而可有御座哉
 与奉存、外二存当り怪敷義等一切見聞不仕候、勿論死骸御改被成候処、
 前書申上候仕合二而、面躰惣身共(腐裂)ふさげ在之候得共、疵等ハ一切無
 御座候、右申上候通二而人主相知不申候間、死骸之義如何様共被仰
 付被下候様奉願上候、若子細在之候義ヲ存押包、重而露頭仕候ハ、
 此判形之もの共如何様共可被仰付候、為其連印一札奉差上候処、依
 而如件、

寛政十式年

申八月十七日

百艘仲間小歩キ

嘉兵衛印

申四拾才

右年寄

与次兵衛印

同

太郎兵衛印

大津

御役所

右口書差上、年寄与次兵衛、太郎兵衛并見付人嘉兵衛、右三人共罷
 出候処、

元々

町役

惣年寄

足輕代り

石丸様

柴山様

小野宗三郎殿

吟助

殿様
内藤様

町代

御目附

立会

遠藤仁右衛門殿

多胡様

川嶋様

右何れ茂御列座之上、死骸之義ハ今日右三日肆被仰渡候而、則請書
 奉差上候得共、死骸之義ハ内分二而十七日暮六つ過時、松本山へ送
 り遣し埋置候事、

右三日肆日数相立候二付、廿日四つ時年寄与次兵衛、太郎兵衛兩人、
 書付ヲ以御届ケ罷出候処、町役御部屋二而石丸様御聞濟之上、死骸
 之義ハ仮埋二致置、尚又七日之間建札致置候様被仰渡、是又右御届
 書二請書繼添奉差上候事、
 右二付謝礼并諸入用

一、金百疋

御目附掛り

多胡甚助様

御檢使立会

一、南鐮沓片

川嶋文左衛門様

掛り町代

一、同 沓片

遠藤仁右衛門殿

一、白銀老兩

筆工松右衛門

是ハ外二下地相頼候認メ物も在之如此遣入、

元々

一、白銀三匁

石丸三平様

//

一、同

内藤伍左衛門様

町役

一、同

柴山泰蔵様

御目附

一、同

高橋角左衛門様

同

一、是八死去二付遣し不申候、

岡本多内様

一、白銀三匁

惣年寄代役

小野宗三郎殿

一、同

惣年寄

矢嶋真十郎殿

一、鳥目拾疋

御門ノ 吟助殿

是八御前話二付如此

金棒引

一、鳥目拾疋宛

待番老人、供三人

一、貳百四十八文

藤木屋久兵衛

右八御檢使之節紙代

一、六百文

松本山長兵衛

右八死骸埋料

小船加子

一、壹貫文

宗吉
留之助

右八御檢使前死骸取扱、其外死骸松本山へ送り人足賃共、

廻り加子

一、百文

長七

右八小遣ひ二雇候二付如此、

一、百四十八文

むしろ三枚代

一、拾六文

繩代

一、四十八文

御檢使之節(草履)そより三疋

金式歩

銀廿式匁三分

貳貫七百六十四文

右之通入用書付相認め、蔵所へ六兵衛持参致候処、跡方銀子六兵衛

方へ為持被遣候二付、則六兵衛方仲間へ被差出候事、

一、諸白三升切手

金子百疋

右八挨拶与して蔵所方六兵衛方まで為持被遣候二付、則六兵衛仲間へ持参被致候二付、受納いたし置候事、

一、九月八日、肝煎山本儀治郎殿死去二付、香典与して白銀壹両忠助持参いたし候事、

重陽御礼

一、石原庄三郎様

青銅百疋、木札付

元々

石丸三平様

〃

福永久次右衛門様

〃

内藤伍左衛門様

町役

芝山泰蔵様

元々格

七里左六郎様

御勝手方

山田仲助様

舟方

内堀繁太様

右七軒青銅五拾疋つゝ、

右之外御門内御手代衆、組屋敷不残、北出氏、手札二而相勤申候事、

治郎左衛門、九兵衛、供嘉兵衛

大津始

御配符之写

追而本文運上銀、大津橋本町古望仁兵衛方ニ而懸改候間、得其意
納人印形持參可致候、以上、

湖上船運上銀、来月朔日の五日迄持參上納可致候、遲滞致間敷候、
此配符令請印早々順達、留り村を可相返候、以上、

九月十五日

御役所御印

書面之通貸船
や可申聞候

大津

南古賀

延勝寺

坂本

新庄

海老江

比へ辻

太田

安養寺

のふか

わらその

早崎

おこと

同断 深ミソ

下八木

衣川

針江

八木浜

同断 本片田

森村

大浜

同断 方

馬場

同断 南浜

西之切

木津

同断 川道

今片田釣漁師

今津

右浦々

同断 今片田

新保

庄屋

同断 方

領家

舟年寄

小野

北仰

わに南浜

貫川

// 北浜

桂村

五ヶ浦

深清水

南比良

中庄

北比良

北新保

南小松

知内

同断 北小松

西浜

打下

海津

大溝

大浦

同断 方

菅浦

永田

月出兩組

下小川

岩熊

今在家

塩津

藤江

石川

横江

片山

// 横江浜

同断 東尾上

// 北浜

右坂本よつや九兵衛弟善七へ渡、但十五日午ノ刻、右東浦へ吉通、
文言同断、松本村へ廻り嘉兵衛を渡、

口演

一、船御運上銀、来月朔日の五日迄ニ無遲滞上納可被致候、此廻状早々
順達、留り所を御返し可被成候、已上、

申九月十五日

百艘印

仁左衛門、仁右衛門、喜兵衛、源助、清助、太右衛門、源七、五
郎八、善兵衛、源六

九月十六日早天、御所司代様御組獅々飛御内見ニ御越し被成、尤当
駅方を案内いたし候て、当関へ御越し被成、則上組下舟市兵衛をね、

但し加子三人二御乗船有之、御名前左之通、

植村治部左衛門様

大森与平次様

永田五郎七様

鵜飼小助様

右御供廻り三人

右ハ昨日当駅方より案内有之候二付、前晚より小舟廻させ用意いたし置候事、但し土瓶風呂差入遣入、茶わん、(無草盆)たは粉ほん、

一、十月三日、当所御殿様御検見御帰り之節宇治御出立二而、当津吾妻川上乃川下まで御見分在之候二付、則御役所元々石丸様、福永様、御組小頭赤井様、御案内方与して御組之内川寫様、町代堀猪三郎殿、右何れも追分迄御出迎之上、夫々御付添被成川上より御見分在之候二付、仲間より太郎兵衛、孫右衛門、忠助右三人嶋ノ関へ罷出、御出迎申上候処、暮六つ時前、嶋ノ関へ御越被成候、尤前以御役所町代部屋方呼二参り、右之御沙汰被申聞、嶋ノ関ニ而御休息も可在之趣二付、嶋ノ関会所ニ御殿様御入被遊候処、屏風ニてかこひ、毛せん敷取繕ひ、夫々茶ノ道具并たばこ盆等用意致置候へ共、日も及晩景二候二付、御見分相済候上御休息ハ無御座、直様御帰館二付不用二相成候事、

一、仲間年寄役之内市兵衛儀、去ル五月病氣ニ有之候処、今十一日被致死去、右跡役太郎兵衛へ為勤度段、左之通書付を以御届奉申上置候事、

乍恐口上書

一、私共中間年寄役之内市兵衛儀、今度病死仕候二付、右跡役年寄太郎

兵衛へ為相勤申度候間、此段御届奉申上候、御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

百艘舟年寄

寛政十二年

三郎兵衛印

申十月十三日

与次兵衛印

次郎左衛門印

大津

御役所

右之通相認次郎左衛門吉人持参罷出、御掛り内堀様へ差上候処、先例同様之届方二候哉、仲間内不残相談之上相究願出候儀哉と御尋被成候故、前々者不及御届二仲間切二相究候得共、近来相届出候様被仰渡御座候、已後如此之振合ニ而御届申上候得ハ、即席御聞濟被成下候御儀二御座候、尤仲間一統評議仕候二而も無之、舟会所へ出勤之もの共不残相談仕、則右頼合之盃仕候例ニ御座候旨御尊申上候処、尤二御聞被下、右御届書之趣御代官様へ申上聞濟二相成候様、御取計可被下旨被仰渡難有候段、御礼申上罷帰り申候、

右二付太郎兵衛儀内堀様御宅へ手札持参、口上ニ而御礼二罷出候事、

右太郎兵衛儀ハ、先達而年寄役之内三郎兵衛儀老衰ニ而、役義難勤旨ヲ以退役致度段被申出候得とも、中間表無人之折柄故、表向名前計ハ其儘ニ差置、内チ々ハ去々午年四月方太郎兵衛を年寄役二相頼、則盃等も其砌相済有之候二付、今改而盃いたし不申候、依之右届書認方如此二候得とも、跡役未究内年寄役之もの病死いたし候節ハ、死去届計いたし置、**追而跡役名前**へ之儀ハ、相究候上ニ而御届申上可然候事、

乍恐奉願上候口上書

一、当三月廿一日私所持船二東江州常樂寺行荷物船積仕候処、日和悪敷御座候二付、平蔵町字嶋之関二繋置、日和待仕罷有、同廿三日朝水主与惣吉と申もの船中見受候所、下堅田町いせや孫左衛門出古手入荷物三箇之内、壹箇紛失仕候趣為相知候二付、相驚早速孫左衛門方へ申達俱々見受候得共、入日記等も難相分候二付、則孫左衛門方京都荷主方へ申遣取調へ候所、古手類都合五拾四品入之由申越候二付、其段追々二御訴奉申上候折柄、古手類品々下堅田町二捨有之候二付、則町内方御訴申上候所、右品々ハ右船二而紛失仕候品之内二符合仕候着類之内二付、何卒被下置候様奉願候所、御憐愍ヲ以御渡被成下、難有仕合奉存候、尤右紛失之儀二付段々御手当御座候所、三月廿四五日頃迄平蔵町二借宅罷有候水主清次と申者方、土橋町竹屋市兵衛と申者方へ、引解包壹つ預ケ置候所、取二不参候二付市兵衛方右清次方へ参候得共、清次儀者其頃方変宅致候旨申之、家明ケ罷出候由二付、又候取二参り可申哉与見合居候旨御聞被及候二付、右品御取上ケ御調へ被成下候処、右船二而紛失之品二似寄候様被思召候二付、私并孫左衛門被招呼、為御見被成下候処、先達而被下置候残品之内二相違無御座候、前以奉申上候通、何レも引受荷物二而荷主方へも難相立、彼是心配等仕居候儀二御座候間、御勘弁ヲ以右御取上ケ之品々被下置候様仕度旨、御吟味之節申上置候、然ル所此節追々荷主方催促を請、甚当惑難渋仕候間、恐多御訴訟二御座候得共、御慈悲を以右品々被下置候様偏奉願上候、願之通被下置候ハ、早速荷主方へ相渡遣度奉存候、此段御聞濟被成下候様奉願上候、以上、

寛政十二年申十月十五日

堺川町

菱屋伊兵衛同居

百艘仲間

舟屋市松

右兩人奉願候通相違無御座候間、願之通被仰付被下候様於私共も奉願上候、以上、

下堅田町

伊勢屋孫左衛門

百艘舟年寄

舟屋与次兵衛

荷問屋惣代

白銀や六助

申十月十五日

大津

御役所

一、十月廿七日、例之通日和定夕飯有之、当役一統相祝ひ候事、

一、同日、右日和定之幸便ニ、太郎兵衛年寄なり盃相濟候事、尤同人より為祝儀左之通り被差出、一統相祝ひ候事、

一、諸白三升

一、硯ふた 五種組

一、吸もの 壺

一、割ふた物 壺

一、しやう進物 五種

一、大平物 壺

〆

一、十一月六日、従当御役所書付参候二付、翌七日四つ時舟屋市松、伊勢屋孫左衛門、百艘年寄与次兵衛、荷問屋惣代白銀屋陸介、町方御役所へ罷出候処、元〆石丸三平様、目付高橋角左衛門様御立会二而被仰聞候者、先達而舟屋市松船二而紛失之品之内、土橋町竹屋市兵

衛方ニ預ケ有之候引解包ニ符合致候間、此度願之通被仰置候_下ニ付、請取一札差上候様被仰渡、尚又右土橋町市兵衛并ニ町内年より御召出候上、其節上ケ置候品ハ御取上ケニ相成候様被仰渡、一罎相濟候事、右ニ付謝礼之覚

一、金百疋、高橋様

外二百疋 市松、孫左衛門、兩人取分ニ而

是ハ格別之御頼込御世話被下候ニ付、

一、金百疋、多胡様

尤当春ハ岡本氏も有之候へとも、当秋死亡ニ付当時跡役なし、

一、式朱一片つゝ、石丸、町役芝山

一、式百文 吟助殿

一、四十八文 寄屋敷門番

是ハ四月書付持參致候節、

右之通百艘年寄、舟屋市松、いせ屋孫左衛門、三人之連名ニ而、ひし屋伊兵衛持參被致候、

右ハ全躰中間_を取計可申筈ニ候へ共、一先先達而相濟候後、又ハ當時市松身柄ニ付不残市松方_を相賄候様被申候ニ付、中間_を差図を以、凡高七拾五六匆程之処、金百疋中間_を差出し、残りハいせ屋、舟屋、式つわりニ而可致哉之由申談遣し候、

十一月十四日

一、白銀壹両

右ハ多賀喜三太様へ御目附加役被蒙仰候ニ付、次郎左衛門持參いたし御悦申上候、

十一月十五日、東六条様当津講中之内白銀屋陸助殿、釜屋藤兵衛殿、

近江屋七兵衛殿右三人当会所へ被參、是迄嶋ノ関地面長々借請居候処、此度差戻し可申候ニ付、此段御承知被下候様断ニ被參、則酒三升、鱈三本持參被致候事、一礼かへ被申候、

尤下地差入有之候証文戻しくれ候様とたのみ被置候付、翌日先達而取置候証人の名前切抜持參ものゝ礼旁釜藤殿方へ差戻申候、則忠助參、尤証文之名前ハ右三人の印形也、酒、鱈壹本ハ即座ニつかい申候事、残り鱈式本貝半方へ預ケニ遣ス、

十一月廿七日、当津寒氣御窺

石原庄三郎様 真鴨壹掛ケ、台ニ重ぐり、下ケ札

御手附

石丸三平様

御元_々

福永久次右衛門様

同

内藤伍左衛門様

同

七里左六郎様

御町役

芝山泰蔵様

御船方

内堀繁太様

御勝手方

山田仲助様

右ハ南簾壹片宛、打へぎ、大半紙包

小頭

赤井平六様

佐久間正藏様

御目附

高橋角左衛門様

多胡甚助様

多賀喜三太様

右八白銀壹両宛、右同断

右之外御門内御手代衆、御組屋敷不残并北出雲平殿、手札計二而相勤ル、次郎左衛門、勘三郎、供弥兵衛

十二月四日、京都寒氣御窺

西御奉行

曲渕和泉守様

御用人

藤田一郎様

星野半右衛門様

原田仙助様

鈴木順平様

真鴨壹掛

御取次

佐藤左一郎様

同 多仲様

矢沢龍右衛門様

芝 幸平様

椎名市右衛門様

右八手札計

御公事下

渡邊甚五左衛門様

深谷平左衛門様

不破伊左衛門様

入江吉兵衛様

右八南鐐壹片宛

千賀与惣右衛門様

浅賀卯兵衛様

上田八藏様

菊地治左衛門様

柏原治部右衛門様

東御奉行

森川越前守様

御用人

小芝宗右衛門様

中川億右衛門様

志川藤左衛門様

御勝手御用人

村田忠兵衛様

右八手札計

御公事方

四方田重丞様

上田弥右衛門様

木村清右衛門様

本田金右衛門様

右八南鐐壹片宛

芝 嘉右衛門様

廣瀬佐野右衛門様

右八手札計

真鴨壹掛

御取次

鈴木又兵衛様

中村官兵衛様

石川千左衛門様

村田直右衛門様

御公事下

寺田官左衛門様

末吉新五郎様

森 儀左衛門様

中川奎左衛門様

同 定右衛門様

櫛橋平藏様

平尾安左衛門様

喜多尾八郎右衛門様

右八手札計

ひとり一羽

銀三匆

右之通治郎左衛門、孫右衛門勤ル、とも嘉兵衛

若狭屋八兵衛殿

田内彦助殿

一、十二月八日、嶋之関地面、是迄東本願寺材木置場二貸附置候処、東本願寺御普請成就二付、右地面東講中より戻シ被參、引続き西本願寺二普請相始り、当地西講中より借り受度被申參候二付、則東同様之振り合ヲ以貸シ遣ス、右二付今日西講中「^(よりみ)」の一札ヲ取、印形相濟津内空地堀一件之引出し江入置、

一、十二月三日、上組小船五兵衛船加子新兵衛、新次郎、右兩人七つ時過乗り合旅人定り乗せ、小船入右出船いたし候処、乗り合之内大路井村之仁、当津上堅田町丸屋五兵衛方死去二付葬礼二罷登り、右帰りかけ四五人つれ二而同船致候処、右之内壺人矢橋浦へ着船前、日暮時水中へすへりはまり候二付、早速引揚矢橋浦へ着船之上、濱屋次郎助方二而、右浦方船役人俱々世話致し被呉、依之無難二歸村被致候趣、右船加子のもの罷歸り申之候二付、此段翌四日上組惣代市兵衛当会所へ届ケ參、則矢橋浦へ今朝右挨拶二惣代仁右衛門遣し候趣申之候二付、尚仁右衛門歸り次第委細様子可申聞趣申遣候処、右仁右衛門罷歸り段々様子承り候処、格別矢橋浦方世話二相成り候義二而も無之候二付、左之通手紙相認メ遣候、尤慥成もの二得与口上二而申遣し、浦方費等も有之候ハ、無遠慮可被仰聞趣申遣し候事、以手紙得御意候、甚寒御座候処弥御安康二可被成御勤役、奉珍賀候、誠二一昨日者、当浦小船乗り合之内入水致候処、早速引揚於其御浦方段々預御世話、無難二而歸村被致候趣承之、大悦奉存候、依之早速以參上御挨拶可申上筈二御座候処、時分柄取込無其義、乍失礼愚札ヲ以右御礼可申上候、先ハ右申上度、如此御座候、以上、

十二月五日

百艘

舟年寄

矢橋浦

舟年寄中様

覚

一、金子百足

右ハ従当津御家中并御人足渡海為御挨拶、従御前被下置、慥頂戴仕候、已上、

申十二月十四日

百艘印

西川五郎兵衛様

覚

一、御納豆五拾抱

右ハ御旧例之通、従御前不相替被下置難有頂戴仕候、已上、

申十二月十四日

百艘印

西川五郎兵衛様

一、十二月九日、堅田庄兵衛船、野田積登り之節故障之義、有之候二付右挨拶与して酒三升切手、左之通手紙差遣候事、以手紙得御意候、甚寒御座候処、弥御安康可被成御座奉珍賀候、然者此間野田積御登り之節、故障之義有之、嚙御心配遠察致候、尤拙者共義折節他行罷在、早速御尋も不申上御無沙汰相成候段、御用捨可被下候、乍延引右御様子御尋申上度、随而麴酒三升入壺樽、右御見舞旁進上之致候、右得御意度如此御座候、以上、

十二月十六日

百艘

舟年寄

堅田浦

舟年寄庄兵衛様

覚

一、金子百疋

右者朽木兵庫助様より当申年分例之通被下置慥請取申候、以上、

寛政十二年 百艘船年寄印

申十二月

朽木御役人中様

(印：「百艘」)

(裏表紙)

七拾五番

百艘

「大津百艘船万留帳」全体目録

| 番号 | 年号 | 番附 | 原本 | 抜書帳 | 収録 |
|----|--------------|------|----|-----|----|
| 1 | (延宝九年～天和三年) | 番附外 | ○ | — | 1 |
| 2 | (元禄二年～享保十六年) | 八番 | ○ | × | |
| 3 | 安永三年(断簡) | 不明 | △ | × | |
| 4 | 天明四年(断簡) | 五十九番 | △ | × | |
| 5 | 寛政八年 | 七十一番 | ○ | × | |
| 6 | 寛政九年 | 七十二番 | ○ | × | 2 |
| 7 | 寛政十年 | 七十三番 | ○ | × | |
| 8 | 寛政十一年 | 七十四番 | ○ | × | |
| 9 | 寛政十二年 | 七十五番 | ○ | × | |
| 10 | 寛政十三年 | 七十六番 | ○ | × | |
| 11 | 享和二年 | 七十七番 | ○ | × | |
| 12 | 享和三年 | 七十八番 | ○ | × | |
| 13 | 享和四年 | 七十九番 | ○ | × | |
| 14 | 文化二年 | 八十番 | ○ | × | |
| 15 | 文化三年 | 八十一番 | ○ | × | |
| 16 | 文化四年 | 八十二番 | ○ | × | |
| 17 | 文化五年 | 八十三番 | ○ | × | |
| 18 | 文化六年 | 八十四番 | ○ | × | |
| 19 | 文化七年 | 八十五番 | ○ | × | |
| 20 | 文化八年 | 八十六番 | ○ | × | |
| 21 | 文化九年 | 八十七番 | ○ | × | |
| 22 | 文化十年 | 八十八番 | ○ | ○ | |
| 23 | 文化十一年 | 八十九番 | ○ | ○ | |
| 24 | 文化十二年 | 九十番 | ○ | ○ | |
| 25 | 文化十三年 | 九十一番 | ○ | ○ | |
| 26 | 文化十四年 | 九十二番 | ○ | ○ | |
| 27 | 文化十五年 | 九十三番 | ○ | ○ | |
| 28 | 文政二年 | 九十四番 | ○ | ○ | |
| 29 | 文政三年 | 九十五番 | ○ | ○ | |
| 30 | 文政四年 | 九十六番 | ○ | ○ | |
| 31 | 文政五年 | 九十七番 | ○ | ○ | |
| 32 | 文政六年 | 九十八番 | ○ | ○ | |
| 33 | 文政七年 | 九十九番 | ○ | ○ | |
| 34 | 文政八年 | 百番 | ○ | ○ | |
| 35 | 文政九年 | 百一番 | ○ | ○ | |

| 番号 | 年号 | 番附 | 原本 | 抜書帳 | 収録 |
|----|--------------|-------|----|-----|----|
| 36 | 文政十年 | 百二番 | ○ | ○ | |
| 37 | 文政十一年 | 百三番 | ○ | ○ | |
| 38 | 文政十二年 | 百四番 | ○ | ○ | |
| 39 | 文政十三年 | 百五番 | ○ | ○ | |
| 40 | 天保二年 | 百六番 | ○ | ○ | |
| 41 | 天保三年 | 百七番 | ○ | ○ | |
| 42 | 天保四年 | 百八番 | ○ | ○ | |
| 43 | 天保五年 | 百九番 | ○ | ○ | |
| 44 | 天保六年 | 百十番 | ○ | ○ | |
| 45 | 天保七年 | 百十一番 | ○ | ○ | |
| 46 | 天保八年 | 百十二番 | ○ | ○ | |
| 47 | 天保九年 | 百十三番 | ○ | ○ | |
| 48 | 天保十年 | 百十四番 | ○ | ○ | |
| 49 | 天保十一年 | 百十五番 | ○ | ○ | |
| 50 | 天保十二年 | 百十六番 | ○ | ○ | |
| 51 | 天保十三年 | 百十七番 | ○ | ○ | |
| 52 | 天保十四年 | 百十八番 | ○ | ○ | |
| 53 | 天保十五年 | 百十九番 | ○ | ○ | |
| 54 | 弘化二年 | 百二十番 | ○ | ○ | |
| 55 | 弘化三年 | 百二十一番 | ○ | ○ | |
| 56 | 弘化四年 | 百二十二番 | ○ | ○ | |
| 57 | 弘化五年 | 百二十三番 | ○ | ○ | |
| 58 | 嘉永二年 | 百二十四番 | ○ | ○ | |
| 59 | 嘉永三年 | 百二十五番 | ○ | ○ | |
| 60 | 嘉永四年 | 百二十六番 | ○ | ○ | |
| 61 | 嘉永五年 | 百二十七番 | ○ | ○ | |
| 62 | 嘉永六年 | 百二十八番 | ○ | ○ | |
| 63 | 嘉永七年 | 百二十九番 | × | ○ | |
| 64 | 安政二年 | 百三十番 | × | ○ | |
| 65 | 安政三年 | 百三十一番 | × | ○ | |
| 66 | 安政四年 | 百三十二番 | × | ○ | |
| 67 | 安政五年 | 百三十三番 | × | ○ | |
| 68 | 安政六年 | 百三十四番 | × | ○ | |
| 69 | 安政七年 万延元年 | 百三十五番 | × | ○ | |

※「原本」の○は原本が残っているもの

「抜書帳」の○は「留帳目録抜書帳」に記載のあるもの

〔天津古文書輪読会会員〕

秋山恭伸

麻田有代

片岡良昭

鍬田清美

高正昭

谷玲子

橋本豊

林俊介

樋口晶美

福野修三

(故)

谷口利正

大津市歴史博物館調査報告書3

大津百艘船万留帳2

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇—〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七—五二一—二二〇〇

発行日

令和五年（二〇二三）三月三十一日

印刷

有限会社竹田謄写堂